

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十七年十一月二日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷一〇六二号



日川協加盟

No. 1062

第21回 川柳塔まつり特集

十一月号

お知らせ

第4回 春の川柳塔まつり誌上大会案内

課題と選者（各題二句 共選）

「包む」 政岡 日枝子（川柳塔社）
川上 大輪（川柳塔社）

「重い」 菱木 誠（番傘川柳本社）
新家 完司（川柳塔社）

「雑詠」 赤井 花城（ふあうすと川柳社）
小島 蘭幸（川柳塔社）

投句料 一〇〇〇円（切手は不可）

締切 平成28年2月20日（土）消印有効
※詳細は12月号

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（二人一句）

「私の一旬」

■今年中に発表された句に限り
■締切 11月20日（本社事務所宛）

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円

② 1/2頁 九、〇〇〇円

③ 2/3頁 一二、〇〇〇円

④ 1頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 十二月二十日

川柳塔社

川柳研究社

八十五周年記念川柳大会

小島 蘭 幸

少し早いかなと思ひながら会場のある船堀駅に降りると、すでに案内係の人が立っておられました。会場のタワーホール船堀は、美しくて凄く立派でした。さすが東京と眩きながら受付を済ませると、スタッフの方が控室まで案内して下さいました。控室で西来みわ氏と少し話す事が出来ました。「私は三太郎の直弟子です」という言葉に自信と誇りをひしひしと感じる事が出来ました。

代表挨拶は津田暹氏「本日は、川柳六大家縁の皆様に来ていただきました」と挨拶を結ばれました。来賓祝辞は竹本瓢太郎氏と私です。私は二十歳の時、広島県東広島市で開催された第7回西条川柳大会で川上三太郎先生に一度だけお会いしたことを話させて頂きました。いつかどこかで話したいとずっと思つていましたので、最高の場所でお話し出来た事に喜びました。

記念講演は一般社団法人全日本川柳協会顧問、毎日新聞客員編集委員の近藤勝重氏、「言葉と真実」と題してたんたと、力強く、しみじみと話されました。課題は四題、選者は田中新一、安藤波瑠、島田駱舟、いしがみ鉄、江畑哲男、齊藤由紀子、赤井花城、津田暹の八氏、共選でした。憧れの川柳作家の披露を直接生で聞けて、共選の醍醐味をたっぷり味わう事が出来ました。全入選句の中から二賞が発表されました。

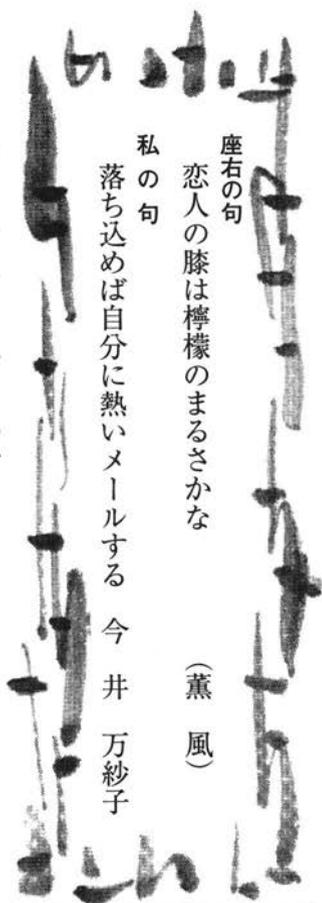
一般社団法人全日本川柳協会賞
腐葉土が積もる別れの街角に

加藤 經

三 太 郎 賞

散るのではないぞ解き放たれるのだ 高瀬 霜石

懇親会は立食でした。好きな料理を好きなだけ皿に盛つて、お気に入りのテーブルで和気藹藹と飲み話する事が出来ました。二年前の山梨国文祭の私の選、披露を覚えて下さった方もおられて、ちょっと嬉しかったです。私は川柳研究社の大会は初めての出席でしたが、津田暹氏をはじめスタッフの皆様の情熱がひしひしと伝わって来て、実に心地の良い大会でした。川柳研究社のますますのご発展をお祈り申し上げます。



座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

(薫風)

私の句

落ち込めば自分に熱いメールする 今井 万紗子

川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙さり絵・前田 尋「東福寺」

■巻頭言 川柳研究社八十五周年記念川柳大会……………	小島 蘭 幸……………	(1)
文芸分野の活性化……………	森山 盛桜……………	(2)
川柳塔(同人吟)……………	小島蘭幸選……………	(4)
川柳塔の川柳讃歌 ^⑬ ……………	木津川 計……………	(43)
自選集……………		(44)
温故知新……………		(47)
水煙抄……………	川上大輪選……………	(48)
橘高薫風句抄……………		(69)
新川柳鑑賞 ^⑮ ……………	麻生路郎……………	(70)
英語 de Senryu ^⑰ ……………	吉村侑久代……………	(71)
誹風柳多留一二篇研究 29……………		(72)
第21回 川柳塔まつり……………		(74)

同人総会・おはなし・各賞発表・記念句会・懇親宴

文芸分野の活性化

森山 盛桜

これは永遠のテーマと言えるかも知れない。特に近年は、喫緊の問題として論議される事が多いと思う。現在、鳥取県文化団体連合会に所属している文芸分野は、「川柳」「短歌」「俳句」の三団体。

県文連の活動の一つとして、また、裾野を広げたいという思いも有って、平成二十三年から「ごちゃませ講座」というのをやっている。三団体が一堂に会して講座と実作をやってみようという物。

公的機関が「ごちゃませ」という言葉遣うのも面白い。尤も知事の「スタバは無いけどスナバは有る」という強烈なギャグが有名になったりするので、これも有りか。今では「スタバ」も「スナバ」も駅を挟んで営業している。

今年のごちゃませ講座は、七月二十日に行なわれた。それぞれの会員は勿論の事、本来の狙いである一般県民も二十数人の参加を得て盛況であった。

民族の詩歌 (41)

愛染帖

三好專平 …… (89)

檸檬抄 「見せ場」

三浦強一・長浜美籠共選 …… (90)

「近い」

谷口 義選 …… (97)

一路集

「レシート」

加川靖鬼選 …… (98)

「細胞」

長井善純選 …… (99)

初歩教室「大根」

山口 光久 …… (100)

川柳塔鑑賞

村上直樹 …… (102)

水煙抄鑑賞

山田 葉子 …… (104)

せんりゅう飛行船 ⑤⑨

新家 完司 …… (105)

インスピレーション・ナビ 印象吟

大西 泰世 …… (106)

句会燦燦

岩崎真里子 …… (108)

各地柳壇(佳句地十選/柿花和夫・山本希久子)

…… (109)

柳界展望

…… (123)

十一月各地句会案内

…… (124)

■編集後記(ひとこと/竹治ちかし)

朱夏・まつお …… (126)

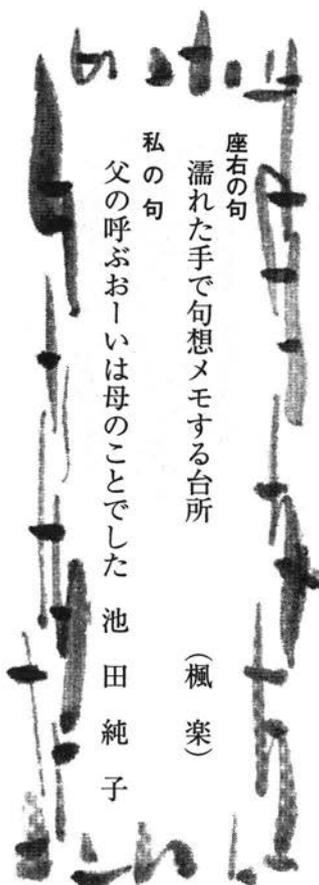
座右の句

濡れた手で句想メモする台所

(楓 楽)

私の句

父の呼ぶおーいは母のことでした 池田 純子



只、問題はその人達が簡単には入会してくれないという事。今は「個」の時代で、団体に所属せず個人で楽しみたいという人が多い。四十年間サラリーマンをやったが、昔は黙って座っていても注文が入って来た。鳥取県川柳会の昭和五十年代がそれで、放っておいても会員が増えた。誠に隔世の感がある。

活性化のもう一つの動きは、環境大のK教授を中心にした活動である。県文連の全ての団体に対して、活性化の為の問題点・提言をヒアリングするという所から始まった。私も一昨年の十月にお話しをさせて頂いたが、実際は愚痴を並べただけで終わった感がある。

そして今年九月六日全体研修会が開催された。六分野に分けてとにかく結論を出そうという事であった。文芸分野の結論はというと、残念ながらハツとするようなものは出なかった。ある線まで行くのであるが、そこが乗り越えられない。

乱暴に言えば、会員が増えれば殆んど解決するのだがそれが難題。みか月に中学校の同級生五人を引つ張り込んだがこれが限度。やはり永遠のテーマである。



小島蘭幸選

弘前市 高瀬霜石

いざという時に備えておく尻尾

吠えるのはやめて噛みつくことにする

切り札のつもりだったが切れてない

正直もほどほど顔に出ているよ

やむをえぬ再婚率を上げましょう

がんになるボケる最後はあみだクジ

和歌山市 木本朱夏

黒い手が襟髪つかむ夢の中

リハビリへコロン柑橘系を選ぶ

リハビリの顔は誰にも見せられぬ

眠れない脳の透き間のヤブカラシ

定位置にハサミがあつてホツとする

あの時の嘘がひよっこり芒野に

鳥取市 森山盛桜

本当は中身は何も無い伏せ字

たこやきのたこ絶対の位置にある

マジックは横から覗くものでない

今はもう紫煙にロマンなどは無い

あんぐりと口を開けてはいけません

綴じ紐と紙縫しぶとく生きています

横浜市 菊地政勝

健康に良い本だけを積んでいる

肌の合う人と言われている我慢

高齢者戦力外と言わせない

名は体を表わしてない鬼あざみ

善人であろうと具になつて

残り火を使つてみたい肝試し

檀原市 居谷真理子

風立ちぬ待ちの姿勢が崩せない

ボトルシップ大きな夢を諦めた

ぽっくりという逝き方も淋しいし

どうしようもない針金が胸の中

ヒマワリの太さはコスモスに負ける

心よこころ空で遊んでいらっしやい

堺市 柿花和夫

無人駅丸いポストに迎えられ
嗅覚を信じて探す路地の店

三ツ星に負けぬ夫の塩むすび

頬被りうまいお人の自尊心

終活に励み来し方ちやらにする

太閤さんに任せてみたい都構想

羽曳野市 三好 専平

笑顔から生まれる明日を信じてる

スローボールしか投げられませんが

宣誓「死んで帰ってまいります」

赤鬼が仏となって酒を断ち

川柳に心ほぐして生きています

利休旧居渾身の抵抗白椿

大阪市 谷口 義

インスタントも御御御付と言いますか

かと言って耳の形は変えられぬ

よそゆきの服も老けてしまつて秋

口数は少ないけれどお喋りだ

こじれたら烏賊を剥くのもむつかしい

そうですね風をあしあとなんですね

米子市 吉田 陽子

栗剥いてくれる夫の楽しげに

譲与なし御守り一つくれた父

ペットでも飼おうか雨の日の夫婦

走ったか打ったか古稀へ問うている
実篤と向き合うあつたかい部屋だ
延命をまだ断れぬ意気地なし

堺市 加島 由一

ご自宅で食べていますか晩ご飯

ブランドの財布が恋しがるネオン

隅っこで飲むのが居酒屋のマナー

心中の虎に飲むかと聞いてみる

スナックで女難の相と言われても

行き先を聞かれ婚活だと応え

三田市 堀 正和

真夏日に予約してきたランドセル

アロハシャツ着ないまんまで夏終る

自分では無理出来そうな人探す

ワンコイン握って今日も趣味の会

染めるなよ白髪の似合う顔だから

御神輿が重荷になった高齢化

河内長野市 山岡 富美子

追って来る老化をスクワットで叩く

自助努力だけが最後の非常口

画廊巡り紙風船をふくらます

織田作の辻からひびく下駄の音

あの人もこの人も好きマーケティング

クールジャパン世界遺産も商戦に

富田林市 中井アキ

ふところの深さは森に負けている

錯覚の瓶を並べて化粧台

言い負けた日から心は軽くなる

赤ちゃんの手の平にある草の種

頁繰る指にも老いは容赦ない

生きている証か節々が痛い

桜井市 安土理恵

のり巻きの具にしてしまふ夏疲れ

ねえあなた小さくなったね蟬の声

非常持出しあなたに紐をかけておく

存分に愛しましたと言えますか

いい貌になったねたくさん泣かされて

明日のことしだれる萩に問うてみる

犬山市 金子美千代

糠漬の臭いの残る手で化粧

大切な明日へ眠剤飲んで寝る

話題変えたまには恋の話など

大盤振舞しても女ははしれている

存分に食べて幸せ回る寿司

平和とはこんないいなちひろの絵

鳥取県 細田裕花

なつかしい古いメニユーを売る田舎

ごみ箱に夢を捨ててはなりません

節電のしすぎ体が錆びてきた

やさしい時代サヨナラですか安保法

卵立つ一次試験は突破した

積乱雲愛を積んでたはずなのに

芦屋市 黒田能子

背伸びした高さいつまで続くやら

まず一步踏み出してみる風を読む

頼られる内は私も大丈夫

背丈だけぐんぐん伸びてまだ子供

キツチンを乗っ取られそう定年後

一日中のんびりすると肩が凝る

篠山市 酒井健二

手術台六つ数えて夢世界

眠れぬ夜あやうい過去を思い出す

四人目の親を納めて虫が鳴く

自叙伝を書いている人のお幸せ

戦争に反対だけが合う夫婦

ときめきは無いが悟った訳で無い

岸和田市 岩佐ダン吉

目を開いていれば見えたのではないか

風の向きもう気にしないただ歩く

間の抜けた反論じわり効いてくる

核ゼロはそんなに無理なことですか

多数派に一線画すことにする

三倍の汗を天才だと言われ

さいたま市 星野育子

五輪の前にやるべきこと山積み

白黒の付かない話多過ぎる

反省はするが謝罪はしない訳

ブームには傍観してる仕掛人

口裏を合わせていても壁に耳

東京都 川本真理子

うつむいて子どもは風を蹴っている

飛べたのにひとりで風に乗れたのに

ひかえめな主張リピートしてる午後

ていねいに挨拶をする今日の母

横浜市 小野句多留

マイナンバー余計な足になりそうだ

討論に安心してる数の顔

おじいちゃんギネスブックに励まされ

粋狂に運河巡りは小雨降る

私をはじきとばして夏祭り

富山市 島ひかる

一番の仲間夫と縄電車

雨おんな登山仲間一人居る

白寿まで健康体で生きる欲

川柳と出会い開いた心の眼

仮の世を舞う人間の姿して

可児市 板山まみ子

マイナンバー無しでも行ける黄泉の国

笑いあう仲間大事におつきあい

無骨でも手作りの味これからも

録画して見ない映画が増えていき

やりくりの褒美なんですコンサート

犬山市 関本かつ子

待っていた秋寂しさも連れて来る

風呂敷に包んで進む安保法

防災の日に真剣な顔が増え

風がどう吹こうとやはり好きな人

愛知県 早川遯行

生きていることを毎朝確かめる

大笑いしても涙は止まらない

餌付けして小鳥の来るを待つ日課

仏葬か神葬かまだ決めてない

行きたくはないけど行っておくトイレ

京都市 清水英旺

下の世話させて恐縮しない犬

ブレーキの効かない人に惑わされ

ブログでも口を滑らす調子者

久々に血を騒がせた安保デモ

紋どころ出しかねている安保法

京都市 高島啓子

持久力らくだは瘤に詰めている
成仏をしたのか夢に出てこない
ぬっと現れ小波を立てている
平飼いの卵はちよつと頭が高い
ゆつくり治すじわじわきた病

京都市 西村益子

酷暑に耐え萩もススキも無事開花
同窓会出席出来るありがたさ
昔の友にしっかりと礼が言えました
なぜかしらポケットの中飴がある
セクシーに開いた穴から肩みえる

京都市 藤井文代

とどのつまり武器は涙と決めてます
こじれてからやとと解った自分の非
のんびりはあの世へ行つてからにしよう
夫留守のんびりを食べ満腹に
健康のためのんびりを飼いならす

京都市 榎本宏子

姉妹でも家の思い出段差ある
ご近所のうわさ話は猫に聴く
全快は望めぬ老化現象だ
仏像を連れ帰りたく凶録買う
ほほえむ目大反対と言っている

長岡京市 山田葉子

豆腐屋のラッパ昭和の音で鳴る
男の料理コスト気にせぬから美味い
おまけの日日心騒がす人に会う
決心を固め濃いめの紅をひく
変らない姿で浮かぶ利尻富士

八幡市 今井万紗子

泣いてる間にぼつと桜がほころんだ
間がもたぬ男としゃぶるカンロアメ
間延びした返事に猛暑ぶり返す
仏壇に母の伝授の栗おこわ
やがてくるいつか一人で渡る橋

大阪市 池上清治

孫の彼俺でも選びたい男
良い色の服選んだと友も褒め
チラシからメニユーを選び買に出る
就活に今年も早い青田刈り
生臭い鯖が酢漬けで酒のあて

大阪市 井丸昌紀

先に逝く病支えてくれた友
欲詰めてふくらんだ風船割れた
天の声聞いてしまつてからの鬱
ネクタイを結び紳士の振りをする
誕生日律義にやつてこなくても

大阪市 江島谷 勝 弘

天邪鬼夏ヤセせずに肥えている
橋渡しボクがしたのに札がない
歳だなあ二合飲んだら伸びている
この足もいずれ動かぬようになる
再稼働あぶない橋をまた渡り

大阪市 榎 本 日 出

神様は強い方にも味方する
満月が窓を明けるとよく笑う
札束にチューをしたけど逃げられた
一枚つつキャベツのように命はぐ
私もいつか宇宙の星の屑

大阪市 榎 本 舞 夢

老体を腹筋百で鍛えてる
旅プラン行けるつもりで立てている
来年も見れるかどうか薪金
最後かもグループ集いフルコース
御巢鷹山30年と御仏前

大阪市 内 田 志 津 子

時忘れ携帯切ってジャズ喫茶
外面が良くて知人が多すぎる
やんわりが強いと知った京ことば
五輪五輪肩身のせまいロゴマーク
人間の手の中にある自然界

大阪市 宇 都 満 知 子

あべこべに被る帽子の腕白さ
ひと絞り小さなスタチいい仕事
たべた実のお札に鳥が種を蒔き
結び目に几帳面な母がいる
小商いネット社会でグローバル

大阪市 大 川 桃 花

若いっていいな階段二段跳び
世代交代する子がなくて閉める店
その指にもう止まれない歩く会
餓死と言う兵士の無念涙する
もうええわ思たら老ける身嗜み

大阪市 奥 村 五 月

断捨離も知らぬお人のゴミ屋敷
美しい月も昼間はほんやりと
鶏飼師の妻は僕にも紐つける
芋主食でしたと話す名シエフ
海よりも広い大空僕のもの

大阪市 笠 嶋 恵 美

がんばれと鏡私に言うのです
絵手紙のノウゼンカズラしゃべるのよ
自転車かごに牛肉忘れ腐らせる
学年会誘う友あり元気出る
整理して捨てる快感新しい

大阪市 川端 一步

大阪市 近藤 正

親孝行もつとすればと秋彼岸
お互いに杖になろうと喜寿傘寿
セブテンパーソングをバックペンすすむ
歩を一ついつも握って離さない
友逝きて図書館一つまた消えた

大阪市 熊代 菜月

大阪市 坂 裕之

母さんの勘のスイッチ鼻にあり
やせたねの御世辞嬉しいダイエツト
兄さんの柱のきずはひくいまま
診察をするたび宿題増えてくる
ウラ方に徹して人生紙芝居

大阪市 古今堂 蕉子

大阪市 佐藤 忠昭

教えたいのにスマホがあると孫までも
行列の店の主の無愛想
声変えて詐欺のテストをしてくれる
断捨離のあとで時々悔やんでる
約束を破り酸素不足になる

大阪市 小谷 集一

大阪市 田浦 實

老いたかな甘い言葉に弱くなり
難聴で読唇術を会得する
日なたほこプラトニックな恋をする
幸せが続き生き様甘くなる
知らぬ間に守りの暮らし板に付き

目まぐるし噴火洪水デモの波
わが軍が総理の先を走りだし
迷走し金だけ喰らうエンブレム
切れもせず前進もせず期限切れ
辺野古には基地は要らんと総がかり

猛暑日を耐えて秋風心地よい
大向う唸らす政治期待する
天辺へ辿り着かないから元気
難しい事できないがお手伝い
楽しみもルール守ってこそ大人

天性からうぬぼれなのか十五歳
我が孫が思えば恥かし十五歳
十八歳お酒を飲んでタバコ吸う
十八歳認めた権利に責任を
子に甘い親が子供に怯えてる

防犯カメラ子供見守る社会の目
麦藁帽かぶり物干すマイワイフ
大吉が出るまでくじを引く私
風神より台風の目は無気味です
水に流すその一言で和を保つ

大阪市 津村 志華子

蛇口から今日が始まるヨーイどん
母と子の鈴は心でひびき合う
長生きの身を守るのも大仕事
むつまじく寄り添うている目玉焼
実る穂にふと亡父偲ぶ秋の里

大阪市 津守 なぎさ

旅日記若さルンルン食べ歩き
紅葉に旅のパンフは今さかり
たまに聞く子供の声はかん高い
赤トンボ老いも若きも闊歩する
予定日は晴れ疑わぬ旅かばん

大阪市 寺井 弘子

就活の前に卒業危うがる
ときめきの色褪せぬの深くなる
開幕へてんやわんやの五輪待つ
何時の間に固い結び目ほどけてる
婚活の言葉を込めた花とどく

大阪市 寺本 実

遊びましょ大人が言うとにらまれる
賛成の数を見てから手を上げる
ほとほとと夢をこぼしてなる大人
褒め言葉もつとくださいまだ聞ける
直前に僕の持ち歌歌われる

大阪市 栃尾 奏子

ドングリを集めて秋の絵を抜ける
霜柱サクリ小さな罪を負う
キリギリスでした眩しい時でした
雪の華ここにも愛はあると知り
まっさらにな生まれ変わろう冬籠り

大阪市 原田 すみ子

外見と常識 鵜呑みにはしない
家の匂い五感落ち着き素のわたし
一本と声掛かるよな言い返し
しんどいし暑いしシャワーして昼寝
ステーキのポテトぐらいの役をする

大阪市 板東 倫子

七十年の戦後を語り父が泣く
タクシーに乗るのも怖い夜の町
地震・火事・洪水・今年の旅中止
夏暑し秋も暑しと嘆く日々
若き日のわたしにそっくり孫喋る

大阪市 平嶋 美智子

強い芯の元に集まる中にいる
弱く成る心の軸にしがみつく
大根の皮で一品できました
自力では送れぬ暮し近いかも
空に向き伸びる梢に深い秋

大阪市 伏見雅明

切っ先も鋭くスマホ人を斬る
神童で乗って普通の子で降りる
実印を押すとき瞬時身構える
約款を一度じっくり読んでみる
うっかりと昭和のまま置いておかれ

大阪市 升成好

目をつむるとつても重い自己表示
コオロギの声の余白を埋める闇
何気なく洩らす言葉に歳が出る
待合室若い人には席がない
おばちゃんのパワーが日本支えてる

大阪市 松尾柳右子

未来図を語る二人に夢かける
娘の電話うきうき聞いてありがとう
ウォークのきより制限し秋の風
物干しの手を上げるのもリハビリに
献立を考え脳の活性化

大阪市 山崎君子

さびしさを充たしてくれる学生野球
ペランダの花むらさきピンク美しく
屋久島の教え子来るよい親子
一羽の小鳥誰を待つのかさびしげに
秋の候まだまだ暑い山の宿

大阪市 山本加お里

コンビニのない過疎の星見とれませす
手を洗うついでに顔も日に何度
ありがとう夫がいつも言うセリフ
はじめてのショートステイで駄駄をこね
リハビリに励む姿についほろり

大阪市 吉内タカ子

はや稲穂人恋しくて御辞儀する
お誘いに二つ返事で旅カバン
敬老日わたし好みの花届く
長生きの楽しみ出来る大阪で
趣味お蔭今日の喜び恩返し

大阪市 若本安代

快復を待ってる花は枯らせない
真実を知らされてから石を抱く
蝉ころり夏の終わりを告げている
ひと夏の恋を果たして蝉の殻
無人駅小さな秋が置いてある

堺市 奥時雄

裏山も大海原も庭だった
メランコリー膝抱いて見る雨の庭
大國になると火遊びしたくなり
程の良さ重宝がられ出世せず
入社時は面倒見たと愚痴る酒

堺市源田八千代

数の力ではびこる政治如何とも
平和を希うお言葉こそが歯止めです

秋思ふと地球の未来憂えてる

お洒落して出掛ける事も若返り

夫婦喧嘩三日三晩の無言劇

堺市齋藤さくら

もう少しゆっくり歩きたい余生

外人も手を合わせてる高野山

一大事聞いたら猫がお産した

国がすることに逆うなど出来ず

マイナンバー他人ごとでは無くなった

堺市澤井敏治

エロチシズム雅の風がすり抜ける

幼き名母の声する夕茜

たくさんの秋と遊んで祝う喜寿

シンプルをわびさびという高楊枝

神無月にお宮参りという文化

堺市遠山唯教

暮しにも透明感を持つ九月

台所の素材で味を描いてみる

炎天下ふかい祈りにつつまれる

清貧のこころ孫にはよわくなり

再挑戦あきらめている富士登山

堺市内藤憲彦

母米寿すぐに喜ぶ笑い皺

夢一つ持てば荒波越えられる

大浴場行ったり来たり落ち着けぬ

雲海を抜けほっと一息夏帽子

遊びだと分っているが肩が凝る

堺市宮本かりん

時刻む音が深夜に高くなる

リハビリのお供うろうろ付いてゆく

笑い合う心許している人と

父さんと二人で今日もどっこいしょ

傾いた夕日へ明日も頼みます

堺市村上玄也

五十回忌の父は余りに早く逝き

法事しか親族揃うことがない

回忌重ね消えてゆく顔増えた顔

叔父伯母も従兄弟もみんな老けた顔

住職も代替わりして三代目

堺市矢倉五月

救出作業誇ろうこれが自衛隊

トカゲの尾切った傷口見してしまう

国勢調査みごとに昼間留守ばかり

独り居の読書時計に針が無い

礼言うて又のお誘い期待する

茨木市 島田 誠一

生ビールサウナの汗へ倍返し

人間の欲で色分けした地球

社長の威借りてつんつん美人秘書

はしご酒みたいに生きる派遣職

半眼の隙間は問わぬ古い二人

茨木市 藤井 正雄

いじめなど春の小川にない田舎

勝ち残るうれしさ寄付の追加くる

シート交換ナースにばらのお裾分け

釣り仲間魚拓囲んで初対面

寝袋で粘って内野席確保

和泉市 横山 捷也

荒削り若者たちが描く未来

新聞がゆっくり読めた日の安堵

擦り傷の絶え間なかった父の手記

嫁ぐ娘に覚悟のほどを聞いてみる

遠回りしてもジョークの出ない仲

大阪狭山市 矢野 梓

里の秋おいでと姉の声弾む

旅プラン夫婦の会話増えてくる

予定表古い二人には超多忙

政治家の話平たく言って欲し

雑音が入り主張がぶれてくる

貝塚市 石田 ひろ子

朝顔も枯れて夏休みも終る

君だからと辛口批評温い眼で

石二つお腹の中で駄駄を捏ね

胆石がシャールレの中で畏まる

ローカル線やさしい音のある暮らし

河内長野市 植村 喜代

甘く見たくない二度とない人生

毎日増える事件事故どうなる日本

買物後ぐつと眠れる葉かな

天も地も人の心ももどかしい

お風呂の手摺りあっち持ちこっち持ち

河内長野市 大島 ともこ

埋められぬ溝を見つめて嫁姑

深夜ラジオ絆嬉しい眠れぬ夜

常識と握手したこと無いやんちゃ

出来レースの答弁虫が耳を這う

やかましくなった体のきしむ音

河内長野市 梶原 弘光

凭れずに同床異夢の競い合い

競歩の真似ちよつとしてみた朝歩き

死ぬなんて産まれる前に戻るだけ

空き菜園寂しそうだね葱坊主

又妻は遠い娘と長電話

河内長野市 木見谷 孝代

虫取り網で掬いたくなる里の星

Iターンの漁師週休二日制

迷わずに九条守るだけでいい

まだ味に文句が言える惚けてない

ちまちまと貯めては不意の交際費

河内長野市 黒岩 靖博

老いて尚ビジネスチャンス探してる

まだ上ると欲出すうちに下げた株

迷いから目覚め無欲の風が吹く

日本文化京の都にエッセンス

北斎の網引く描写眼に鱗

河内長野市 坂上 淳司

祝日から5月3日が消えるかも

新国立から学徒出陣させはせぬ

子や孫に軍事費負わすのじゃないか

70年談話ピントがやや甘い

ヒロシマの平和の炎絶やすまじ

河内長野市 谷 久美子

返せぬ恩供養読経で送る盆

待合せあれやこれやで迷う服

迷い乍ら手探りながらこの先も

抵抗力付けて治療というカルテ

おだてられ気力ばかりが先走り

河内長野市 辻村 ヒロ

隠しごとあったはずだが忘れてる

生かされて何ができるか模索中

おんな旅自慢話に火が付いた

畑仕事あうんの呼吸老い二人

母の年になつて味わうあれやこれ

河内長野市 藤塚 克三

元気かと散歩付き合う秋茜

掴みそこねころころ転ぶ飲み薬

ゴミ出しを拒否した晩は酒つかん

決断がぶるんと揺れて又迷い

今になつて妻に感謝は照れ臭い

河内長野市 松岡 篤

バリユームもお酒のような味ならば

故障など縁遠かつた日本製

チャンネルはニュースと野球だけになり

適任と言われ引退出来ぬ羽目

ときめいたマドンナ孫に手を引かれ

河内長野市 村上 直樹

長生きの是非を論じて夜もすがら

消すものか悲劇の記憶不戦の灯

仲立ちを孫に託して無言劇

まだ烟る火種を抱いて喜寿の坂

おおらかな妻と笑いの渦の中

河内長野市 山室光弘

恋がたきマドンナ吾もみんな老い

競うもの無くし柔和な仏顔

かなわぬが一矢むくいてほくそ笑む

ブチ贅沢トロカステーキかば焼きか

風清か思索楽しむ迷い道

岸和田市 雪本珠子

世の中が変われどわたし変わらない

好きな曲聴いて微睡む至福時

ノクターン聴くとあの頃思いだす

いいじやない偶に弱音を吐いたつて

傷心を癒やす旅だがよく食べる

吹田市 太田昭

運命だと言われ両手をじつと見る

遠吠えで心の憂さは晴れやせぬ

秋の匂い玉蜀黍の焼け具合

宛て先の近いポストに入れにゆく

極楽の傍に越したと便りくる

吹田市 大谷篤子

人それぞれ旬の秋刀魚の焼け具合

執着をすてた枯葉に教えられ

心折れ時には泣きたくないですか

小さい秋誰も知らない持ち時間

握手して心の温み確かめる

吹田市 木下敏子

孤独には慣れてのんびり筆運ぶ

減塩に慣れてやさしい舌になり

前向きに歩く外反母趾の靴

弱いとこ見られたくない万歩計

ややこしい事は言わずについて行く

吹田市 須磨活恵

鏡見てあなたは誰と問うて見る

思い出をたぐれば疼く三つ四つ

ブライドも意地もありますお月さま

野良猫の背中に夕日秋深む

コスモスも私も秋の空が好き

吹田市 野下之男

西郷^{せご}どんもなげいているよ桜島

毎日がサンデーやはりほっとする

持たんけど株番組をそつと見る

あの人の家の前だよしのび足

プールにも熱中症がついてくる

吹田市 山本希久子

素直に老いて脳も手足もこき使う

祭太鼓遠く近くにある昭和

友を見送る夕暮れの影ながながと

人間の森で苦いコーヒー飲んでいる

オリーブ油ポトリ料理は無国籍

四條暖市 吉岡 修

辛抱せい辛抱せいとまただます
リーダーは神代のように美女がいい
一票で蹴り落としたいあのバッジ
今までもこれからも夢横におく
艶のある語りやっぱり苦勞人

高石市 浅野 房子

信じ切ってくれる犬猫裏切れぬ
エアコンがそよそよ昼寝うとうとと
お天気で一喜一憂しても無駄
年なのか正座しにくくなってきた
台風一過やっぱりいいな青空だ

高槻市 井上 照子

不自由をじっと我慢をして生きる
自画自賛眉を描いたら美女になる
雨の夜は施設へ行った友想う
平和論ほんとにほんと信じてる
もったいない何でも溜める癖抜けぬ

高槻市 指宿 千枝子

十歳の少女に戻る終戦日
ばあさんのハグで賑わうクラス会
迷惑も許せる友のおおらかさ
八分たす二分で満ち足る私の胃
なぞなぞがいつしかクイズ番組に

高槻市 片山 かずお

旨い不味いの基準にしてる妻の味
詳しいことは知らぬ居酒屋での仲間
カルチャーの楽しみ友とするランチ
丸い眉やさしい人と思ひ込む
閉店セールのノボリがやけに翻る

高槻市 島田 千鶴子

そうめんを食べ尽したり夏終る
日傘から夏が転けて行きました
コスモスに呼ばれて降りただけの駅
自画像が描けぬ心が迷ってる
テレビ消す静まり返る老いの家

高槻市 初代 正彦

温厚な師の一言が座を締める
平穏な暮しマンネリにも感謝
何事も平均それがいいんです
豊かな森へ仲間と植樹ボランティア
墓参り済んだ終日無精ひげ

高槻市 杉本 義昭

一〇〇年の熱戦見せる甲子園
最後の最後起死回生の知恵が出る
好きな曲ただ聞いているだけでいい
サービスマン妻も財布も笑い出す
自分史を飾る一行見付からぬ

高槻市 左右田 泰雄

考えが浅いと傷が深くなる
冷静になつて道すじ見極める
ちやつかりが板についてるつまみ食い
決めかねて明日の風に委せとく
お呼ばれの席ではちゃんとかしこまり

高槻市 富田 美義

墓終い何の話かボチも聞き
ニート等にこの世の価値が未だ見え
年代の自慢の庭もビルの陰
オレ詐欺に小声で気合い入れられる
未熟ゆえ汗の種類でカパーする

高槻市 富田 保子

汗なみだ仲間と囲む優勝旗
かあさんの座布団だけはベッタタンコ
この夜へもあの世へも旅ひとりです
家族よりお友達へと孫育つ
シニアの部礼儀正しく負けて来た

高槻市 原 洋志

君が好き酒に溶かして言わないで
海水着干されて残る波の音
情報が洩れてゴキブリ姿消し
神の手に触れてしまったシャボン玉
いい質問ですが時間が足りません

高槻市 安田 忠子

じわじわと彼方此方痛む古希の坂
数独をすらすらして姉傘寿
片方の親で育つて今教授
うまく化した車内で化粧済んだギャル
我先に席確保するスマホ族

豊中市 池田 純子

何となく足が弾むよ金曜日
聞き方で違つてみえる白と黒
深呼吸してから申す娘に小言
真夜中の居間が私の部屋となる
雨ザーザー夏が別れを告げている

豊中市 江見 見清

平和というマンネリは大事にしたい
メモはして無口を通して不気味
雑沓でわたしを呼んだような声
また朝が来たぞあしたも来ますよう
ダイエツトを阻む戦中の飢餓感

豊中市 藤井 則彦

優しさに欠ける我が道歩む人
迷いから覚めて仰いだ杉木立
同じ目線で骨身を削るポランテニア
迷案を名案にするトップの目
無一物になつて最期を迎えんか

豊中市 松尾 美智代

ありがとう神にも師にも夫にも
嬉しい事続くと不安過ります
想像を掻き立てられる朝の虹
ゆつくりとひとり楽しむ美酒の味
生きる形もう迷わない古希の坂

豊中市 松村 里江

すんなりと聞けない耳を持ち歩く
軽妙に操るボスについて行く
占いを素直に信じ百度石
チヨイ悪におもちゃにされる素直な子
貢君よりアツシー君が好きな歳

豊中市 水野 黒兔

伎芸天ほほの丸さに秋の影
達筆の封を開けば請求書
駅前でもらうティッシュに知る世相
歩ければ元気な証拠医者巡り
日本の未来が駆ける幼稚園

富田林市 片岡 智恵子

失敗は理想に近くなるヒント
病名を自分で決める患者さん
同居しても言いたい事を言えば波
深いしわ道の暗さを知っている
嫁は嫁いつも素敵なライバルよ

富田林市 関 よしみ

獣道王者の貌で突っ走る
見落した誤字が私を責めに来る
ネットから一人歩き怖い闇
引き立ての香に溶けてゆく蟻り
迸り受けた明日は踊らねば

富田林市 中崎 深雪

秋風よ炎熱は夢だったのか
不自由な足にやさしい草の道
虫の音色に聴き入りながら眠る幸
あまりにも律義にひらく彼岸花
大自然の脅威の前で人は虫

富田林市 中村 恵

幼な児のはずむ歩幅にある未来
ポケットに金平糖がまだ少し
義理人情つかい棒になるお金
武器として使い熟している無言
さよならに清清したという涙

富田林市 肥山 一文

生まじめな父親らしい背中見せ
古希過ぎて新たに挑む趣味の道
あらためて心に残る傷の跡
引き際がよかったからと拍手され
古川柳読んで納得拍手する

富田林市 山野寿之

羽曳野市 宇都宮 ちづる

追伸に愛綴じ込める楷書体

清貧に生きた余生はユートピア

耐えるだけ耐えて一輪咲いた意地

民の声聞かずに驕る政

新米の一粒ずつに父の汗

寝屋川市 平松 かつみ

初物を毎年食べている寿命

どの部屋も仕事部屋です片付かず

一年が過ぎたサラリーマンらしく

同病に心寄せ合うよい木陰

坂道を登る我が家に鍛えられ

寝屋川市 森 茜

十年日記にかがやく君が棲んでいる

細く長く叔母百歳のあんこ餅

先細りなど考えぬにぎりめし

いのち継ぐ朝顔卍に種孕む

おだやかに木もれ日遠い日にもどる

羽曳野市 安芸田 泰子

口上を頭の中で繰り返す

来年はわからぬままに障子張る

淋しくて鬼の笑顔について行く

余生とは淋しい言葉紅葉散る

バラ赤し愛と憎とは紙一重

期限切れ並べ夕餉の防災日

町会の赤飯ひとつ分けて食べ

国勢調査もネットでせよと言うて来る

あの光景今度は川が暴れだす

マイナンバー民にメリット何もなし

羽曳野市 徳山 みつこ

受け取りますが微妙敬老祝金

事情許せば蝶になり君のもと

日除け帽まぶか迷いをひた隠す

迷うだけ迷いなされと仏の眼

再稼働はいどうぞとは言えません

羽曳野市 永田 章司

政活費領収書だけ揃ってる

庭からは楽し気な声おままごと

悩んでの決意だ退路全て断つ

子が巣立ち身軽になってまだ若い

判ります塵に埋もれて死んだ人

羽曳野市 藤原 大子

実り待つ稲に容赦もなく嵐

緊張をほぐす一息深く吸う

正直だ喜ぶ声が高くなる

身の丈の暮し我が家の合言葉

断捨離で記憶の鍵を失わす

羽曳野市 吉村久仁雄

人はみな兄弟ですと言う勝者
釈迦の掌の幅いっぱい遊ぶ古希
そこここに笑いの種がある浪速
夕立が虹をお供に來た昭和
参拝の所作この人も幸に飢え

枚方市 海老池 洋

向日葵も祈る姿になつて秋
蟻の穴になるやも知れぬフォアボール
ナイターのテレビへ野次を吐く独居
どんどんと老化の輪ゴムめく私
だんだんと弥陀の心になる老後

枚方市 小林わこ

進入禁止少し覗いてみたくなる
孫の突進じいじの腰は受けきれぬ
遅刻ぐせ時計の針を進めます
箸進む会話も弾む嬉しい日
真つすぐ進むあなたの笑顔について行く

枚方市 伊達郁夫

ポケットの小銭が今日を伝えてる
父と子の伝言板に文字がない
真相を伝える勇氣ありますか
言い訳を聞き飽いている猫のヒゲ
夕焼けの中で浄土が手で招く

枚方市 丹後屋 肇

リーマンショック以後株欄を見ていない
マンションポストチラシに悲鳴あげている
平均寿命越えて合格した気分
淋しさが募る月命日来れば
老朽の軀にチロチロマグロの火

枚方市 寺川弘一

影法師少し離れてくれないか
愛確かめる二人っきりのかくれんぼ
鬼ごっこ捕まるチャンス考える
自信ある人が正論述べている
想定外が無ければこの世成り立たず

枚方市 二宮紫鳳

充電ができて笑顔の帰省客
足跡は確かな証し夢つなぐ
黄昏に幸せ刻むベアシユーズ
コンサート生命弾ける若い夏
手作りの野菜レシピで夫婦膳

枚方市 二宮山久

夕焼けが歩け歩けとベアシユーズ
寶石の似合わぬ妻の片笑くほ
趣味多忙悠々自適の我が人生
腹の虫収め兼ねては出る散歩
物置に虫かご残し子の育ち

東大阪市 佐々木 満 作

大阪のあきんど手の内を見せぬ

泣き笑い母は氣丈な心柱

かっこいい筋の通った父の背な

大雑把でも急所はちゃんと押さえてる

路郎の句一句一字にある矜持

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

自分だけ信じて生きた八十の坂

温い物食べさすために起きて待つ

考える時間をくれと医師に言う

泥にまみれて植えた苗もう実り

いわし雲にのつて故郷に帰りたい

藤井寺市 太 田 扶美代

仲直りたまには味を変えてみる

曼珠沙華去年の記憶のままに咲く

駆けてきた森も林も遠ざかる

身に余るほどの情は辞退する

花の絵をいつか描こうね娘がふたり

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

自己紹介思はずごしか萩が散る

思慕つものる少し甘えて書く手紙

過去は過去上手に思い出している

秋色の上衣で隠す夏の傷
波瀾万丈そんな話に憧れる

藤井寺市 鈴 木 いさお

秋が来るただそれだけの愉快なり

応神の御陵にホタル還り来る

保護色を纏って逆境に堪える

千羽目の鶴が一番よく折れた

かごめかごめうしろの正面は亡母

藤井寺市 高 田 美代子

日替りのドラマの中で生きている

当然の様に火花が消えて闇

もう背伸びする事も無しハイヒール

心細くてなどと言わないिकासみ草

戦中育ち度胸は今も失わず

藤井寺市 田 付 絹 枝

娘の誘い腰痛飛んでレストラン

絶景とコース料理に酔う一日

障碍が大きなバネとピアノスト

ごめんネと蜂の巣落とし墓掃除

近くまで来たと訪ねる子の新居

藤井寺市 津 田 シルク

廃屋にボクを縛った木が残り

手を焼いた息子やさしくしてくれる

領いて相槌打って愚痴を聞く

歩調合せて主と家とが朽ちていく
墓も田も継ぐ者が無い故郷とは

藤井寺市 増井 ヨシ枝

お元気ですか小瓶で届く桜貝
転ばぬよういつも両手を開けておく
亡母に似た案山子もいたよ飛鳥路に
カッコ良い子等にほめられ車椅子
窓側のベッドに月が添い寝する

藤井寺市 吉田 喜代子

朝顔は我が家好んで咲き誇る
お一日我と婿とのゴマを焚く
長崎の鐘歌うと今も胸迫る
飲み代は出しても他家を車庫替り
菜園のトマト切腹して不味い

藤井寺市 若松 雅枝

雨もよい傘にしつかり名前書く
多分もう着る事の無い晴着干す
虫干しも大儀でとても手が着かぬ
優柔不断シュレッターにはかけられぬ
ネックレス一つ残して娘に譲る

松原市 森 松 まつお

墓おおう雑草しばし立ちつくす
サントリーがくれたグラスでアサヒ飲む
朝刊が来たのにまだ寝つかれず
見た目より中身と君は言うけれど
石炭を掘っていたんだこの島で

箕面市 酒井 紀華

誕生石未来をたくす薬指
ゆつくりと間を置くおんな美しい
ほとほと点滴ゆらぐ命乞い
心から笑ってみたい外は雨
友達に採まれて聞く赤いバラ

箕面市 出口 セツ子

遊び歩く体力と金欲しい日々
宝石も服も興味が無く困る
子が元気なら欲しい物特に無し
家勢あれば人は自然に寄って来る
段差無いところでも転び年齢を知る

箕面市 広島 巴子

カーテンをオレンジに染め今日新た
医者の前素直になつて私
寝た切りの窓辺すいすい赤トンボ
子を負うた夢ほっこりと背に残る
青い空足がそわそわ動き出す

八尾市 高杉 千歩

子供まで徘徊をする夜の町
うぬほれ鏡も歳は隠せない
アンテナを張り巡らせていい絆
鍵入れる財布見つけたり鍵探す
ひとり芝居思考力失せ暮おろす

八尾市 寺川 はじむ

長電話終わらぬうちに電池切れ

極暑も何んの先を見据えた蟻の列

真つ新の空気が旨い万歩計

スーツ着てノルマの海を泳ぐ夢

叱咤激励聞こえはいいが叱咤だけ

八尾市 宮崎 シマ子

気ままして孤独楽しいその果ては

故郷からスタチが届きサンマ焼く

祭りの母はいきいき寿司を作ってる

ブランコを降りても思案まだ揺れる

ナツメロの歌詞でもめている夫婦

八尾市 村上 ミツ子

雨続くうちの都合に拘らず

ご用心防犯カメラお見通し

真実は神のみぞ知るエンブレム

永眠を延ばす昼寝をしています

八尾市 山根 妙子

いつ見ても閉店セール幟挙げ

点滴が恵みの雨になる安堵

ATM列の目が射す押し違え

客席も演歌年齢肩が揺れ

商店に地域振興券が舞う

大阪府 桑田 ゆきの

レクエイム真近で聞いて涙する

頼み事ホイコトする反抗期

登り行く道標隠す萩盛ん

髪染めてお洒落心が動き出す

安保法世事に疎くても気にかか

大阪府 野田 栄呼

父の齢越えて私にない威厳

全盛期花火の様に消え去った

子や孫へ戦後は遠い日の教え

少子化へ手ごころ欲しい知恵欲しい

作句熱健康維持のお友達

大阪府 粕山 隆盛

薫風師の門下生です塔囲む

セプテンバーソング山からこだます

まんじゅしゃげ熱血冷めてかなしき朱

情報の海に溺れずきる抜きて

お宝は孫がネットで探し当て

大阪府 米澤 俣子

命とや漢方薬と根くらべ

目で選び手秤で選る主婦の知恵

胡散臭い肩書いっばいの名刺

それからと言うもの気力戻らない
あんなにも鳴いた蟬軽い骸

すき間から見ればものみな美しい
母代わり家に尽くした姉も逝く
秋深しライバルの友いまは亡く
彼岸花咲いて終活とりかかる
飛行雲戦中いまだ覚めやらす

神戸市 井上 じろう

条文を素朴に読めば違憲だナ
探しましよ戦争止める熱い知恵
尖閣に桜咲く木を植えようよ
深い巢を手掘りで作る蟻えらい
お邪魔したこの世の旅もあと僅か

神戸市 上田 和宏

古希だとして大志抱かねば高齢化
日本の四季がどっかへ流される
打ち上がる花火明日は子ら帰る
前向きに明るくというプレッシャー
行き違う空似の人の秋日傘

神戸市 奥澤 洋次郎

B 29 二度と飛ばさぬ蟬の骸
背を迂る歳月二人住んだ町
群生の夜明けひとりバスを待つ
よく笑う人に涙のツボがある
もう一人の自分に会おう広辞苑

神戸市 白川 淑子

じつと家に居ると病気かと言う夫
雨の日はじつとしてると娘の電話
一番の遊び友達夫かな
侍のような人だと思ふ老父
固い物食べぬ子供を憂う顎

神戸市 福原 悦子

声量も割り引きの老いた歌手
子との距離外国より遠くなる
母の齢越えて私は生き伸びる
神仏と早く眼が覚めいい話
太陽の味が梅にしみる土用干し

神戸市 松井 文香

しっかりと自分を見つめ鏡ふく
「家」「心」「女」磨いているところ
結果より楽しんでやるこれ秘訣
備えても予期せぬ未来神任せ
陰でする努力イメーヅ塗り替える

神戸市 山口 美穂

高からな見舞の葡萄房数え
叩きそこねた秋蚊しぶとくまといつく
洪水のニュースに老いは折るのみ
洪水に埋もれ稲穂も泣いている
散歩道猪一家に会う恐怖

神戸市 山崎武彦

五十年苦勞かけたね白い髪
とき時は白旗を振る処世術
点滴のほとりほとりと子守唄
くれぐれも逆走するなと諭される
ひっそりと路肩の隅にある献花

明石市 糀谷和郎

旅立ちにいい日だ卵ポトリ割る
蟠り胸に持つ日はヤカン吹く
一杯の酒が煙にまく本音
揉めたなら白紙にもどすのが気楽
いい里だ子等が泣いてる笑ってる

芦屋市 竹山千賀子

ふる里の地名地図から消えていた
駅ソバは企業戦士の味がする
川下り父によく似た岩に会う
ポケットに一夏の恋入れたまま
四捨五入されて私が消えている

尼崎市 市坪武臣

浜風がドラマを作る甲子園
いい見つけ浮かんでも句が作れない
孫二人産んでくれたねありがと
深呼吸をする平静を装うて
バージンロードおどおど進みずっこける

尼崎市 加川靖鬼

かすり傷程度ですんだ胡座鼻
うす味に馴れてしつこいひと嫌い
二日酔い夕べの棘が溶けぬまま
鬮雲空いちめんの大漁節
経木書梵字うやうやしく跳ねる

尼崎市 春城年代

しみじみとかいなな皺を見ていたり
したい放題おもしろい放題老ゆるとは
武庫川のしろつめ草の群れるとこ
おるごおる夫戦野に征ったあと
父と夫がこんがらがった夢の中

尼崎市 藤井宏造

ハルカスは位置確認にもつてこい
本物のビールを飲むぞピンビール
ならされて母の味より妻の味
曖昧の見本のような自由業
アルバム見て私の歴史確かめる

尼崎市 藤岡りこ

発表会齡を忘れて弾む声
堂堂と傷物安い人気店
賞讃が非難に変わる他人の真似
遠い日に母子結んだ迷児ひも
家庭菜園期待して掘るさつまいも

尼崎市 山田 耕治

申し込んでおけばと母はまだ元気

王子様多分遅れて来るでしょう

湯上りの裸の王者とり囲む

お早うさん金魚はとうに起きています

とろとろのソフトクリーム持たされる

加西市 金川 宣子

孫帰り夜店の金魚まだ元気

来客用お菓子の期限切れを待つ

年金で見合う程度の趣味で生き

抜け落ちた記憶と記録噛み合わず

ビンの蓋開かないわよと仏の前

川西市 大坪 一徳

結論を出さない事も結論だ

褒められる生き方するとくたびれる

屁理屈をこねる自分を持って余す

古希過ぎてついた仇名が遊び人

店閉まいするには喜寿はちと早い

川西市 山口 不動

この雨は僕を濾過して海へゆく

今朝の快柏手の音良く響く

月二回梅田を歩く治療法

女子会のメニューが変る高齢化

下がってる株式欄は飛ばし読み

篠山市 酒井 真由

ぼつりぼつりと禅僧の艶ばなし

いつか死ぬ話しんみり聞いている

豊醇な人生だったひとの通夜

話しかけないで瞑想タイムです

おもたせのケーキで男談義など

三田市 足立 つな子

真夏日のいい汗かいた墓そうじ

ナスの牛キュウリの馬の盆飾り

声がない亡母と姉の盆の夢

行きたい時決断をして好事なり

賑やかな世代を偲ぶ義姉ひとり

三田市 石原 歳子

何もかも忘れて喋る老いの会

親友にまかせた旅のプランみる

見るだけで心ときめく旅プラン

そっくりにならずよいとこだけ似たい

ふらり来て夕飯食べる夫の友

三田市 上垣 キヨミ

孫の血で子孫繁栄する藪蚊

独り身の自由を囓う世間の目

ぶり返す残暑の根止めにくる

バランス食説いて主治医のカップ麺

昼の月夜勤疲れで昼寝中

三田市 尾崎 一子

宝塚市 田中 章子

にぎやかに園児が今日もお芋掘り
しっかりと抱きしめないと子が迷う
疑うより信じてやろう親だもの
子のやる気口をはさまず見守ろう
居ると邪魔居ないと淋し母の椅子

三田市 北野 哲男

ケータイと言う投げ縄がとんで来る
物言えば仕事回って来る仕組み
大言壮語茶碗小さい男だが
エキナカで仕事帰りに買う夕餉
盆の僧衣で鳴っている電話

三田市 久保田 千代

おつき合い苦手で尖ること多し
損得は抜きが絆があたたかい
ありがとう私の願い届きそう
ああも言いこうも言いたい子の育ち
今日も無事終えて明日への水を飲む

三田市 福田 好文

忙しく廻る時にはぶれぬ独楽
投げつけて怪我せぬコップ決めてある
ワンコイン拾ったばかりに寝付かれず
人様はおしどりなんて無責任
歩道橋皆が渡るはずだった

蚊も必死急に涼しくなりました
足腰を和式トイレできたえます
いたわりの一言誤解されました
こけましたみんな素通りしてほしい
古稀になり青春謳歌する切符

西宮市 秋元 てる

老いを楽しむ柄ではないがでも逃げぬ
世の移り自慢の実家今重荷
事業成功後継教育不成功
譲り合いしているとドアが閉まる世に
一日中寝て居たかった頃恋し

西宮市 足立 茂

蟻地獄に落ちて潰れた朝帰り
運動の後に褒美の甘い菓子
クラス会名簿に目立つ赤い線
政界にうごめく金が通る道
戦争の辛苦を語る祖父のシワ

西宮市 緒方 美津子

夏薊不法投棄の中で咲き
ハードルを下げてチャレンジする八十路
救護所で笑ってくれるややがいた
出会いたい言葉に出会う旅仲間
妹は自分は後と決めていた

西宮市 片山 忠

眠剤を二種類飲んで寝坊する
体重増加はマーボ豆腐がきっかけに
柳友の活躍避けるように見る
兄弟が見舞いに来ても会わぬウツ
うつ病で少しにんげん丸くなる

西宮市 亀岡 哲子

法師蟬申し訳ほど啼いて雨
娘がなくて二人の嫁のやじろべえ
大病を癒す電話を聞いている
結婚の誓詞をふっと思い出す
掘って掘って自分の本音探り出す

西宮市 福島 弘子

亡母からの着物思案の三姉妹
ふらりふらり昭和の残る露地が好き
クレヨンの虹を渡ればすぐ会える
近すぎてあなたの良さを見過しそ
籬を緩め気の向くままの西・東

西脇市 七反田 順子

のめり込む趣味があるから生きられる
坂道を登る勇氣は母仕立て
ケンケンバ昭和を生きた全盛期
風習でお墓の花は枯らさない
発表会あてにされてる指定席

姫路市 古川 奮水

半夏生汗拭きながら西瓜食う
立飲みで連続ドラマ評価する
防災の訓練参加若氣出す
恩返し教えたはずのブーメラン
魔女になり淑女に化けてもう八十路

奈良市 阿部 紀子

お気に入り明日香の棚田曼珠沙華
幻想的ライトに映えて赤紅葉
栗ごはん柿なますの嬉しい日
銀杏並木ブランドシヨップ目の保養
薬貰いそれで安心置いたまま

奈良市 大久保 眞澄

写真写りよすぎて遺影決まらない
メモ用紙溜めてメモする用がない
なじめない造語は知らん間に消える
電子辞書と読み比べする広辞苑
低周波の音が聞こえる歳になる

奈良市 加門 萌子

又も天災治水が未だままならず
山紫水明の国の落し穴かも
生きてるといろいろ有って生きづらい
周辺を海に囲まれてる採め事
ダイエットなんて気にしない気にしない

奈良市 辻内 げんえい

休日も苦行のようなこの暑さ

風鈴の音で眠れぬ熱帯夜

週一の勤めは盆のすいた日に

邪魔な妻横に居ないと落ち着かぬ

半日で孫の保育に困り果て

奈良市 米田 恭昌

パパの手品種も仕掛けも見えている

タミミナル始発で帰る人もいる

青雲の大志育む巨樹古木

名月に指折っていた似非詩人

虎の夢紙吹雪舞う御堂筋

生駒市 飛永 ふりこ

解せない書の一文字の流麗さ

まだ匂うボルトの汗と白い歯が

笑つてない目が物悲しさ語る

思春期の声無き声が掬えない

ゴッホ展見入る引き込む黄の狂気

香芝市 大内 朝子

感謝する心にはっと灯がともる

負けん気も人肌恋し秋の風

不器用はわたしにとつて誉め言葉

萎んだらまた膨らます生きる意味

ミレーの絵の点描となり夕焼ける

大和郡山市 坊農 柳弘

医者嫌いくすり嫌いで酒二合

聞き耳を立てればはしゃぐ秋の虫

言いたい事たんとあります安保法

詩人には成り切れなくて秋夜長

ともすれば独り善がりになる詩人

奈良県 安福 和夫

象牙の塔避けてコメントする識者

ユニークで映えるデザイン待ち望む

パクリする他国を責める資格なし

国民が誇れるエンブレムを待つ

決めるまで一般人の声も聞け

奈良県 谷川 憲

飼い犬の名で声かかる散歩道

信号機いつも点滅過疎の村

喧嘩にも程を知つた昭和の子

いつの間にか期待の星も老いて駄馬

生き抜いてなお生き抜いて風になる

奈良県 渡辺 富子

月のしづく浴びて夫と歩を合わす

ブナの滴浴びていのちのリフレッシュ

友と居て乾涸びた夢笑い合う

美しく静かな老後だったはず

人生の佳境で何と電池切れ

和歌山市 磯部義雄

躓いた畳の縁に老いを知る

家系図を辿り先祖へ礼を言う

補聴器はまだいりません地獄耳

カラオケでプロポーズした恋の歌

老いらくの恋は消火器では消せぬ

和歌山市 上田紀子

優しさと厳しさ母の二重唱

無駄なもの省くシンプルイズベスト

深読みをしすぎ頭をリフレッシュ

宮任いどつぶり鬼とせめぎ合い

満月のスポットライト浴びる恋

和歌山市 柏原夕胡

わたくしを試す大きな水溜り

よそ見してあなたの大きさに気付く

白日夢苦いコーヒー飲んでいる

若作りしても引力邪魔をする

バージンロードを妊婦が堂々と歩く

和歌山市 喜田准一

夏バテは嫌で盛りもり飯を食う

冷房を掛けっ放しの夜が続く

残暑よりきつい小遣いの値下げ

閉店の町に乾いた風が吹く

まだ捨てぬ希望へ明日は拓かれる

和歌山市 楠見章子

マスクメロンは自分に買ったことが無い

リボンだけ豪華にしてるブレゼント

オカリナの余韻紅茶を飲みながら

激辛のカレーは若い味がする

口笛を吹いて青春呼び戻す

和歌山市 坂部紀久子

診察でポンコツ扱いされた膝

歳だからと言えば許されそうな狡

整理した手紙の束と恋に落ち

言わなければよかったやはり誤解され

八十路の引出し戦争の弾のあと

和歌山市 武本碧

リクエスト通りに伸びぬ豆の蔓

青カビもブルーチーズと洒落てみる

合カギで心の扉開きますか

ジョーカーを二度当ててから不整脈

向こう傷たくさんあって桐一葉

和歌山市 玉置当代

糠床がにぎやかになる夏野菜

思い出が満載孫と川遊び

夏休み提げて二学期駆けてくる

またふたり茶粥すすってゆく老後

コスモスが揺れる別れたひとを恋う

和歌山市 土屋 起世子

野分け去りやつと風鈴片付ける
補聴器をはずし喜楽に暮して
ため息で吹いた風船破裂する
潜んでる力を發揮した介護
丸洗いされて努力が陽にあたる

和歌山市 福井 菜摘

喜怒哀楽忘れた母の掌を温め
気配りがすぎて自由に羽搏けぬ
三猿のひとつたんで丸く老い
岐路に立ち選んだ道をよしとする
言い負けてよかった水が澄んでいる

和歌山市 福本 英子

内輪もめしてると雨が大降りに
皺の数だけ母に追いついた
銀行のタオルは腰がやわらかい
板前の無口が握る活きた味
銭湯が閉まり立話が増える

和歌山市 古久保 和子

暑かった夏も終うて金魚の尾
いちごケーキ元気になるおまじない
もう許してやれと水面の月笑う
お掃除ロボ連れてお嫁に行きました
両親のいない故郷の柿の木よ

和歌山市 堀 富美子

薄味に慣らされていた退院後
生かされてまたひと色の夢を足す
戻される度に凶太くなる命
その日まで臓器と妥協して歩く
翔べば金籠れほうつを持って余す

和歌山市 松尾 和香

ご先祖に来年までとごあいさつ
盆参ります夕べにかかる虹
暗闇に揺れる驚草影法師
夫婦道歩幅合わせて踏みしめる
丸い和に明日の希望を膨らます

和歌山市 松原 寿子

亡夫の鍵こころの奥へ抱いて置く
しり取りの続き還って来ないまま
趣味の種播いて未来を見詰めよう
ふと我に返って筆を持ち直す
決心の深さが壁を打ち砕く

岩出市 藤原 ほか

気楽さが滲み出ている玉の汗
この先は予定の組めない旅続く
宿命と思い予定を入れてない
スポーツに汗して根性座らせる
旅半ば見せ場を描く五七五

海南市 小谷 小雪

わくわくを日に一つずつ拵える
酸っぱさも恋しくさせる早生みかん
俄雨に遭ったか秋遅刻する
手の届く範囲に置かぬ蜜の味
涼しさにいきいきしだす随意筋

海南市 堂上 泰女

大人社会の縮図のような苛め
動物園逃げたペリカンの勇姿
ポジティブに生きる息子に学んでる
猛暑越えした雑草の心意気
鉛と鞭使い損ねた娘が拗ねる

紀の川市 宇野 幹子

結跏趺坐水が静かに満ちてくる
夾竹桃七〇年を語り継ぐ
一ページめくれば全て読めてくる
満月も母も零れる萩の寺
帯の位置甘い話は切り捨てる

紀の川市 北山 絹子

虫の声聞いて夜長を編んでいる
末席で父は空気を読んでいる
新品の鉛筆使うのが惜しい
欠けてゆく月と私を重ね合う
人間が出来ているなと思う嫁

紀の川市 楠原 富香

木洩れ日に昨日の鬱が消え失せる
引き出しにそっと入れてる昼の顔
健康を過信していた癌告知
幸せな明日を夢見る子の巢立ち
たつぷりの湯船に溢れ出る平和

紀の川市 辻内 次根

立秋の水面を過ぎた風に会う
悪い日も良い日もあつて飯を炊く
雰囲気で女の勘は鋭角に
脱ぎ捨てる自力残っているうちに
頬つねりながらこの世を生きている

田辺市 岡本 昇

無駄なこといっぱいやって生きてきた
ありがとうの気持きちんと伝えたい
しくじりを悔いてあしたに持ち越さぬ
自分との付き合い上手丸く生き
安本法の裏に戦のすかし文字

橋本市 石田 隆彦

絶頂期花火のごとく消え失せる
変な癖験を担いだのが因果
瀬戸際で踏ん張る家計にも限度
家計簿の赤字を埋める術が無い
被災地の笑顔に学ぶ生きるとは

鳥取市 池澤大鯨

蛇の目傘やはり和服に下駄でしよう

相合傘いたずら書きは羨望だ

ゲリラ豪雨傘はあつても邪魔になる

傘持たせ返つて来ないものとする

お迎えは傘ではなくて乗用車

鳥取市 加藤茶人

往生はしたはず悔いのない介護

DNA良くも悪くも俺の子だ

優しさが少し私に重荷かも

温度差に我を忘れた恋を告げ

特養で私死ぬまでカゴの鳥

鳥取市 岸本孝子

棚経が済んで私も膝くずす

迷わずに五年日記と決めている

バイキングの据え膳がいいバースデー

敗戦の記憶うすれる世が怖い

生きてれば苦勞の種はたとある

鳥取市 岸本宏章

ご先祖がさせる民族大移動

先生がクールで誰も笑わない

原発の近くは誰も居たくない

生まれても消える新党シャボン玉

戦争のお詫び曾孫に罪はない

鳥取市 倉益一瑤

挑戦へまだまだ熱い息を吐く

不覚にも後に戻れぬ握手した

黄昏に強情と言う虫を飼う

酒二合飲んで夫のすきだらけ

遊び疲れひっそりとした玩具箱

鳥取市 鈴木一弘

法螺吹いて百歳まで生きるつもりかも

夏夜空水中に咲く大花火

節目には旗振りをして亡父こいし

花火降る夏はシャンシャン傘踊り

ともしびを提げて老後を好きに生き

鳥取市 棚田大

お盆来る手合わず孫が美しい

二度とせぬそのあやまりも三度目だ

物忘れでもラブコール覚えてる

汚れても心の汚染しちやならぬ

胸キュンの体験だけは隠しとく

鳥取市 谷口回春子

欲望が無限に続く修羅の道

語っても語り尽きない過去未来

心の内もそのまま映る三面鏡

一步先読めば人生別の道

ダイエツト妻のお古がよく似合う

鳥取市 中村 金祥

前線の縄跳び老いの身がつらい
止めることは出来るが後が続かない
サボートの良し悪し分かる渡し舟
ひっそりの村も祭は賑やか
面接で五体満足主張する

鳥取市 夏目 一 粹

子どもってみんな可愛い世界の子
生命線なんか当てにはしていない
ステッキのお世話にならず死にたいの
ミミズでも居場所失い干からびる
ああ無職約束手形切れません

鳥取市 永原 昌 鼓

天命を生きて穏やかデスマスク
ひっそりと暮らす地球の隅借りて
ときめきも疼きも過去へ置いて来た
うるさいが聞いて安心する魘
熱い胸残していますまだ少し

鳥取市 西川 和子

北風に忍忍忍と言い聞かす
先が見え脇目振らずに生き抜こう
四苦八苦これも人生だと思ふ
振り向けばいつも楽しく耐えていた
ご先祖を偲び家訓を孫たちに

鳥取市 春木 圭一郎

身の丈に合った言葉で話したい
会合へ肩の力を抜いて出る
さりげなく困っている人助けたい
いるだけでいいと言われる人目指す
これからはイヤな人には会わんとこ

鳥取市 平尾 菜美

減反を忘れた振りの花が咲く
夢を追う子等のまなざし宙を舞う
手話交え歌う仲間と熱くなり
死に目には会いたかったと懺悔する
未来へと巣立つ子等の背大いなれ

鳥取市 福西 茶子

久し振り冬將軍と立ち話
宴会のどじょう掬いで顔を売る
二人三脚夫の速度が落ちてきた
大声は愛なんですよ遠い耳
やり切った満足感で棺に入る

鳥取市 前田 楓花

森を出て一本の木になるケヤキ
青竹を踏んで気合を入れてみる
人間の底を流れる村訛り
戦争がたったの七十年前
ヒロインになれない薔薇でいいのです

鳥取市 山下 凱柳

小包便母の温もり詰め届く

曼珠沙華ひときわ目立つ無人駅

森荒れて獣出没過疎の村

七〇年平和論議が沸き起こる

ドキドキし川柳塔のページ繰る

鳥取市 吉田 孔美子

退去時を電話にセット介護ベル

電話一本だまされて見る美容液

劳いの言葉がボンと出て行った

膳運ぶそれがあなたの劳いね

劳いの言葉共有して凌ぐ

鳥取市 吉田 弘子

年一度の行事他人は慈雨と言う

一浪とや永い人生苦にならぬ

姥捨山なぜ女偏なのだろう

ハングル文字出合う秘境の温泉地

青春の思い出拾う無人駅

倉吉市 猪川 由美子

防犯カメラすべてを捉えああ恐い

先ずは子の夜間徘徊問題だ

肩車だけは母親できません

ピピット婚やはり破局も早いわな

やっぱりな維新バラバラ分裂だ

倉吉市 牧野 芳光

手の中に何も隠さぬ勝負の日

雨の音ひと目ひと目を編んでいる

野良猫の方が綺麗に見えてくる

年金でヒリヒリとした世を渡る

軍神が葛の葉っぱに埋もれている

倉吉市 山中 康子

実る秋柿がわたしを呼んでいる

わたしに似てスローモーターの血が宿る

語らずも凡て経験ものをいう

恋人はライフワークと決めようか

悪役のおかげ舞台上に後光さす

米子市 後藤 宏之

枝打ちのように身辺整理する

やさしさを遠回りしてつかまえる

妄想の散歩しながら遊んでる

合唱団少し若いともっといい

あぶない芽年がいもなく出てきそう

米子市 後藤 美恵子

水引き草長寿を祝い庭に咲く

皺おそれず笑って暮らすことにする

これからはさよならの数かぞえない

遺伝なら個性にします団子鼻

使い切れれば遺産で採めることはない

米子市 竹村 紀の治

歩行器のように買い物カート押す

録画して勝ったときだけ観る野球

諫言に甘いムースを掛けてやる

湯豆腐がプルルとゆれて酌をする

秋を連れベニズワイガニ呑みにくる

米子市 中原 章子

渋滞のそこまでも会いに来る

敬老会楽しみ待つ歳になり

良い事の次も良い事あるように

和平へと蟬絶叫のありつたけ

健康の管理知識と謙虚さと

米子市 成田 雨奇

自己採点向上心にマルをする

さつと出す粋なジョークが和ませる

散歩するヒト長生きをしたいんだ

イエスマンなんでも受けてヒマがない

地図見てもひょうたん島がわからない

鳥取県 石谷 美恵子

五体休める小さな城が待っている

若返る気で聞く歌がなじめない

信仰のお蔭で巡る観光地

盆帰省跡目のことに息子等触れず

人間を脱いでやさしいデスマスク

鳥取県 岩崎 和子

この夏の空の青さが冴えませぬ

卓上にひんやり求め猫眠る

あらそうと半分開いて笑つてる

大晩年永六輔の本を見る

洗い物ぶらぶら下がる雨の午後

鳥取県 斉尾 くにこ

性格はちよつといびつで隙ができ

ありがとうありがとうつて泣けてくる

はんなりと納涼床で酔いました

お金では酔えない孤独うめれない

反論のことは選んで時間切れ

鳥取県 竹信 照彦

種蒔きをするのは十日までと妻

草取りか安保法阻止デモ行きか

草刈つて平和育てる畑作り

園芸も文芸も締切りが追う

人生の締切りはあるようで無い

鳥取県 西谷 悦子

私でいるため過去は忘れない

振り向けば苦勞の過去が糧であり

無言より怖い言葉は見つからぬ

代替り古里疎遠墓参る

夫の苦言理屈をこねてホイ返す

鳥取県 松川行男

火吹竹あるよで無いぞ竹はある
補聴器をつけて不穏な事を聞く
掬われた金魚が先に死ぬ定め
鈴虫を孵化した五十眠らせず
一夏を袖すり合つて梨送る

鳥取県 山下節子

戦場で平和を祈るデスマスク
この汗でUVカットなど塗れぬ
キッチン私の城だまだ続く
石橋をたたく余裕を見逃した
孟蘭盆会先祖も人も集う過疎

松江市 石橋芳山

行き先は不明掻き混ぜられている
鮮烈な記憶となつて落ちる滝
饒舌に笑うゼリーの揺れる肩
納豆が腐つて亡国の兆し
復讐を考えしなやかなたわみ

松江市 小川注湖

春はいろいろな人がにこやかだ
過疎の里縁に生きると嫁が来た
うっかりがないように見てるカレンダー
張り子の虎まだまだ首を横に振る
地球の裏頼もしい人自衛隊

松江市 藤井寿代

雨水も逃げ場失くしてかわいそう
どこまでも九月の雨は重すぎる
風変わる秋の匂いの淋しい日
亡母の好きなりんどう下げて小半日
弟来て仏壇持つて帰つていく

松江市 松本知恵子

ぶな林の秋を満喫スニーカー
鋭角も少なくなつた秋の章
ペタ靴で歩いて敵が居なくなる
朝々の楽しみ無花果をもぐ
とんがった言葉へ返す年の功

松江市 松本文子

ドンと花火バツと税金が散つた
送り盆済んでぺたんと腰下す
友は病気なのに私は飲んでいる
政治とは別に私は生きている
ポランテアのように花も咲いている

松江市 三島淞丘

つむじ風八十路の足に絡み付く
週一の外食老いのランデブー
嘘をつく相手は妻と決めている
一手先読んでる妻の隠し玉
八十歳こころの鍵を掛け直す

出雲市 伊藤 玲子

月一回遠所の墓参君に会う
独り居を見舞つてくれる秋茜
秋の陽を浴びて命を笑わせる
転んだら亡母そっくりな叫び声
悲しい朝もキチンと回る洗濯機

出雲市 岸 桂子

男はいいな水に流せる酒がある
身辺整理猫の器は猫の物
良く笑うきつと至福の人だろう
はなやかな裏で目刺を焼いている
予定みな崩れストレスだけ残る

出雲市 小白金 房子

星月夜六十年忌の父探す
古き門主を偲ぶ花八つ手
涼風へ一筆心情さし上げる
五節句の早さ暦の中に佇つ
カラクリは見せぬわたしの舞台裏

出雲市 多久和 敬子

同じとこぐるぐる回り黄昏れる
まぶしくて穴の中から出られない
ロボットとじゃんけんをしてまた負ける
年金を妻に任せて丸く住む
回り道にはまっかな花が咲いていた

出雲市 竹治 ちかし

ハブラシのタクトが告げる日の始め
親の歳越えて自分という仕種
たればの世界でほけたことを言う
団塊の余生行き交う散歩道
気が付けば老いの仕種の影を連れ

出雲市 富田 蘭水

親鸞のいきがい読んで目を開く
延命の自作体操いそがしく
身障の子に愛が一人歩きす
大根の芽少し出た頃里祭り
生きる為青い野菜の種子をまく

雲南市 松本 昌

年月の過ぎる早さが平和なり
人間に欲しいと思う充電器
特売日賢妻がいて並ばされ
血圧と年金くすり同窓会
統廃合スクールバスにはしゃぐ声

島根県 伊藤 寿美

今は触れずにおこう気付かぬ振りをして
みぞおちにずっと動かぬ石がある
柔らかな眉で梃でも動かない
しきたりもわたし限りの墓の守り
むき出しの梁から亡父の声がする

広島市 岸 本 清

宇部市 平 田 実 男

笑うつていいな心が前向きに

好きなことするとパワーが湧いてくる

イエスマン貫いてから波立たず

核のゴミ行き場のないに再稼動

生き生きと暮らせば老いを遠ざける

竹原市 石 原 淑 子

脚腰がすがる思いのスクワット

御灯明母に甘える日がつづく

講演会スマホの怖さ話し合う

曇りがち笑い袋がはなせない

可能性のかたまり孫の靴が翔ぶ

竹原市 岩 本 笑 子

ちよつと待つて葉を五つ飲んでから

鏡よ鏡若さを返してくれないか

初めてのメガネ山々のみどり

自分へのご褒美メガネ一つ買う

流れ作業で白内障の手術

府中市 藤 岡 ヒデコ

虫の声涼しすぎると窓を閉め

酒二升買った彼女は八十五

何も彼も事後報告で味気ない

定食を完食出来て大丈夫

敬老会新入会者の若いこと

また土産物産へ止まるツアーパス

失言は取り消せば済む永田町

挨拶にひと言添えて輪を広げ

自給率40飢えがきつと来る

憲法も数の暴力には勝てぬ

東かがわ市 川 崎 ひかり

亡母さんの日記私の智恵袋

予定などないが忙しいふりをする

薬師さま頬に優しく浮く木目

茶断ちする細くまあるい老母の背な

ドクターとナースさまには逆らわぬ

松山市 古 手 川 光

完璧なお方面白ないお方

意地が無くなった元氣も無くなった

お巡りさんがお巡りさんに逮捕され

監査法人が監査をされるいうまさか

さわやかでいいなスキもコスモスも

大洲市 中 居 善 信

切る気なら何時でも切れる薄い縁

聞こえない訳ではないが聞いてない

僕はそんなに綺麗事では語れない

株価どうあれ放置農地に廃屋と

母の背は丸あるくなって温かい

西予市 黒田茂代

エレベーターの要らない町に住んでいる

大掃除失せ物あちらこちらから

正しいこと言われているのに腹が立つ

自信喪失の魂抱いたまま

スポットの眩しさついに知らぬまま

高知県 小川てるみ

ハグロトンボ飛ぶ川筋に住んでいる

脳味噌に柔軟剤が欲しくなる

価値観の相違食事がまずくなる

新涼の風に解れてくる痲り

着物帯断捨離できぬ母の恩

高知県 小澤幸泉

生きていてよかった僕の誕生日

愛という列車に乗れず灯に戻る

老いの坂で未練嫉妬とともに消す

罪深いいのちの果てにある平和

近く朝は海がきれいであればよい

唐津市 坂本蜂朗

恥の上塗りをしながら旨い酒

玄関で笑顔の仮面確める

黒い腹正義の鎧身にまとう

父の歳越えしげしげと見る鏡

小煩い妻の不在は静か過ぎ

唐津市 山口高明

実弾を撃つ隊員は身が竦む

球界の寵児を探す甲子園

秋夜長夫に寶石鏤める

最悪が起きな警察動かない

赤銅の肌がわたしの履歴書さ

熊本県 岩切康子

額の瘤予定狂わす二週間

検査予約しただけなのに楽になる

杖の場と足場探して坂登る

見舞客昔話にふんふん

会いたいと故人の写真ご持参で

札幌市 小沢淳

百歳が好きなコンビニのおにぎり

格差から社会がぐらり揺れてくる

野性の知恵は必ず種は残しとく

人情が涸れた砂漠が広がる

孫に背を押して貰うと二倍効く

札幌市 三浦強一

週一の宅配を待つ冷蔵庫

折りたたみ杖をバッグに忍ばせる

経帷子の色はピンクと決めている

年寄りを切り札として生きている

自分史の推敲がまだ終らない

黒石市 相馬 一花

傘寿から一日一句を吐くつもり
絶倫の証し欠かさぬ生卵
難病を三つかかえて生きている
緊張の美女はミサイル発射する
メタボ猫道路横断練習す

弘前市 浅田 隆樹

ねぶたからねぶたの色になるりんご
まずいものたまに食いたいマクワウリ
穏かな一日テレビ消してから
嘘言えぬ私は女にはなれぬ
秋雨が半熟にする恋心

弘前市 稲見 則彦

表現はどうあれ僕は僕である
内助の功打率八割五分はある
こわごとと渡った土橋里の川
爽やかな風だ空には羊雲
告白の返事は平手打ちだった

弘前市 岡本 花匠

身辺整理身軽に生きて事足りる
振り向けばわたしの影も消えず居る
玄孫とやわれもびっくり期待する
機能回復運動に汗こち良い
デイケアの昼食感謝至福な日

弘前市 今 愁女

シルバークライク墓参りには晴れ渡る
エンブレム赤い日の丸添えたのに
マイナンバーも看視カメラも覗かれる
おもてなしギリシヤの次にならぬよう
悪戯から良い子になったドロオンです

弘前市 須郷 井蛙

冬野菜しっかり植えて農具研ぐ
髪と髭伸び身長減って行く
少子化でもう酸欠の街が見え
八十歳やはり自筆の年賀にし
朝一番今日の手足を確かめる

弘前市 高橋 洋子

歩幅から今日の元気度確かめる
失態もさたり宥める友の海
ルンルンの時は耳鳴り忘れてる
度忘れや時々脳も骨休め
職業は無と書き慣れた楽隠居

弘前市 福士 慕情

台風の目の中にいる四面楚歌
僕のこと案じて叱る人がいる
腹回り窮屈な服とってある
運動会負けて宴会盛り上がる
炎天に負けじと燃える七竈

川柳塔の

川柳讃歌

⑬

木津川 計

重心は西に傾く八十歳

山 本 希久子

ある日帰ると家内のメッセージがあった。「迎えが来たのでお墓へ参ります」。ええーっ!と愕然、心境にどのような変化が起つたのか。慌てて携帯電話をかけると息子の車で墓参りに行く途中だという。

それでなくとも「重心は西に傾く」老夫婦である。人騒がせなものを書くなど怒つたのだが、よく考えると僕が勘違いしただけだ。お元氣な希久子さんは2、3度傾かれるの

だろう。が、僕は10度。西に倒れそうなんだ。とうさんがじっと見つめている両手

宮 本 かりん

實際啄木は貧しかった。「はたらけど／はたらけど猶わが生活業にならざり／ちつと手を見る」。友人にこんな手紙も書いた。「紙はなく米はなし、本月分の月給は既に／前借してあり、如何にせばやと首傾げ居り候、こ

の月はダメなり、人生常に意の如くならず、五人一家のいのちをつなぐ方法に就いて考へつつあり候。じつと両手を見るかりんさんの「とうさん」が生命線だけを褒められる貧しさだとしたら、察するに余りある。

少年よその一日を俺にくれ

太 田 昭

少年の日の一日は長く、一年はさらに長かった。が、年をとるにつれ一年が早く、あっという間に過ぎるのはなぜか、人間の一年は年齢分的一年であると以前にも書いた。十歳の少年は1割10だから0.1の長さだが、八十歳の僕は1割80故に0.0125でしかない。

年をとると少年の長い一年が羨ましい。昭さんの頼みは老人すべての願いでもある。昭さんは闘病中と仄聞した。少年の元氣な一日をもらったつもりで病魔を追い払って下さい。

帰省する列車は海の見える窓

竹 村 紀の治

丸山薫は海の詩人だった。処女詩集「帆・ランブ・鷗」から「点鐘なるところ」や「日本海洋詩集」の編纂まで海を思慕し続けた。詩集「連れ去られた海」の中の詩「海という女」である。「どんなに好きかは／もりあがるその乳房の量ほどに／或はまた／十万ト

ンのタンカーをさえ揺さぶる／その胸の熱いあらしのほどに」海を愛した詩人も珍しい。紀の治さんは紀州出身だろう。「海の見える窓」に座ると、かくの如く川柳ができる。

想い出を確かめに寄る法善寺

奥 澤 洋次郎

二つの歌が昭和55年にヒットした。一曲は藤島恒夫の歌つた「月の法善寺横町」、もう一曲は和田弘とマヒナ・スターズの「お百度こいさん」だった。ぼくは後者の方が好きだ。どちらも法善寺をうたつたが、水掛不動は女性のためと思うから板場志望の男には似つかわしくない。へくすり問屋のあの人に／どうぞ添わせておくれやす。がいい。

洋次郎さんの青春、あのひとが生ききている。また杖で歩けるうちはいいとす

須 郷 井 蛙

「また杖で歩けるうち」は三本足だが、四つ足で這うようになったらどしどしもうもない。僕はまだ三本足だが、その様子を初めて見た人はびっくりするらしい。「こいつはもうアカン」と見放しても「また杖で歩けるうちはいいですよ」と井蛙さんの句と同じような慰め方をしてくれる。確かに四つ足の先には立ちも這いもできん寝たきりを控えている。井蛙さんの「いいとする」をいいとする。

(上方芸能) 発行人

自選集

小島蘭幸

盆灯籠父とはいつも夢で飲む
もう無理はしない眠たいとき眠る
疣一つ隠してくれている眼鏡
眼鏡替えてもテレビ写りは変わらない
何度見ても笑えるエキストラの父よ

小西雄々

乗り心地よいのか来世行き電車
神様も見逃さぬもの酒肴
白線をはみだすような動悸する
招き猫置いても客は来てくれず
剪定へ明るくなってきたわが家
素朴さを語り継いでる蕎麦の花
童心へ誘ってくれるとんぼたち
真つ直ぐな胡瓜ストレスあるだろう
かたつむりアンテナはまだ錆びませぬ
雑草にだって名前はあるのです

斉藤 荔

月曜の朝がいちばんつまらない
折りたたみ傘をカモメに啜られる
和やかなひととき和食から貰う
ふっくらの煮豆つまんで月見酒
おしほりと白湯でよろしい二日酔い

新家完司
津守柳伸

情けない事も鼓舞して70年
善人の檻善人がうごめいて
プチトマト育てた母が病んでいる
妥協する事で折れ合う象の鼻
阿吽のかたち崩さぬ門構え

遠山可住

来年の螢へ残す岸の草
かあちゃんの腰が二十才の盆踊り
娘が呉れたお守りだから離せない
先代が捨てた歴史をぬり返す
一と夏の古着を捨てる父の汗
台風があわてて秋をかき回し
どうしても足が無理だと盆の墓
生年月日なんの刺激もない書類
足あとがあいまいになる八十路坂
缶詰もビン詰もない冷蔵庫

都倉求芽

土橋 螢

何となく無駄が楽しい日本晴れ
人並みに大根の種子蒔いている
恩返しできない分を供養せよ
哲学のかたちに栗の皮をむく
カーナビに案内されて北へ行く

西出 楓 楽

等身大の穴を掘ってる林住期
四コマ目どんでん返しないように
らりるれる孫はただ今イヤイヤ期
これからは出来ることだけ数えよう
舵をどうとろうか喜寿という薄暮

仁部 四郎

風評の無残予約が取り消され
取り消した処分の責めは未発表
内定の取消しよその株のせい
失言の取消真意よくわかり
取消しが利くなら嘘は申しません

林 瑞 枝

にっこりのお医者さんに心癒される
巨樹の花大きな空を指し伸びる
ベレー帽飛んで蓮華の花に落ち
物言わぬ私に問うた市場菓子
過ぎし日の歎び今日も瞑想す

前 たもつ

大阪城何年ぶりの赤トンボ
着飾っても野辺の花には及ばない
飯の世を高々生きて百余年
異状無い血液検査妻感謝
心満ちゆつたり回る二十四時

政岡 日枝子

亡父の背で聞いたと同じ森の風
朽ちた屋も分け隔てなく風が来る
にらみ合う二人にする風は抜け
森のやさしさ風がそつと抜ける道
林の風はふたりを包む軟らかく

三宅 保州

あせらずに治しましよと言ふカルテ
飯でもと社長がくれたワンコイン
信頼か無謀か白紙委任状
串という字は象形文字に違いない
いやかなんどすえと怒る京女

宮西 弥生

公園でゆらり怒りの消えるまで
きっかけもチャンスも逃しまだひとり
耳障りな音も透明して秋に
月下美人女を華にして消えた
いたずらな風は会わせたまま消えた

起きる

八木千代

在宅のまままで死にたいから起きる
起きたら動く素敵な朝を持つために
昼寝するまるで総身を干すように
とろりとろり眠る至福もいただけで
だから起きるわたしの今日は今日だから

両川洋々

ハートのひだにあなた一人を刻み込む
葬ったつもりの恩が目覚ます
わびしくて孤独死だけはしとくない
故郷の海に俺は散骨して欲しい
国会解散ハローワークへ秘書が行く

板尾岳人

居酒屋に酔ダコ一皿処刑され
木の下に下駄あり柘榴採る少年
堅い目の糞よ何処へ漂流か
新聞紙しつかり揉んでする手水
秋刀魚には別になりたくない鯛

奥田みつ子

荒れた世に天使のような月の顔
ぶらり散歩思わぬチャンス待っていた
戦ない七十年は貴重です

和太鼓の村中ひびき月冴える

新幹線見守る古い古い滝「布引の滝」

川上大輪

ぼちぼちでいいよ半音下げておく
浅漬の茄子も胡瓜もよく喋る
惚けるにはちよつと早いがまあいいか
吹っ切れたらしいびきをかいている
時どきは寄り道もするプーメラン



(つづぎ)

青森県 松山芳生

身綺麗な星が遊んでくれました
父の日に何も期待のない孤独
ひび割れのコップに君は気付かない
切ってもきれない腐れ縁の根っ子
おくやみ欄朝から命のはなしする

第151回 大阪川柳の会

日時 12月1日(火) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市北区梅田 駅前第二ビル5階
大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△「過ぎる」平山 繁夫 △「欠」点 菱木 誠
△「なんとか」河内 天笑 △「便利」森中恵美子
会費 1000円 欠席投句(切手82円5枚同封)
11月30日到着分まで 会員に限る
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706
本田 智彦 宛

第34回 鳥取県没句川柳供養大会

とき 12月20日(日) 午前10時開場・受付

ところ 新日本海新聞本社ビル 5階大ホール

JR鳥取駅南(駅裏)徒歩3分

会費 2000円(昼食・作品集呈)

精進落し 3000円(懇親会希望者)

兼題 「敗者復活吟」 古今堂蕉子 選

(この一年間で没になった句から2句吐)

「火のページ」 池上 英之 選

「胸キュン」 長島 敏子 選

「浄土」 目賀 和子 選

「洪々」 藤原 鬼桜 選

「罪一つ」 坂本とも湖 選

「棘(トゲ)」 河原 清流 選

「色々」 秋里千枝子 選

席題なし 各題とも2句吐

投句締切 11時半厳守

欠席投句 1000円(切手可・作品集呈・
11月末日締切)

投句先 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3

中村 金祥 宛

電話 0857-59-1056

主催 川柳ふうもん吟社

第39回 寝屋川市民川柳大会

とき 11月15日(日) 開場 午後1時

出句 2時締切

ところ 寝屋川国松会館

寝屋川市国松町19-2(春日神社前)

(京阪寝屋川駅下車 バス東口④番乗り場
No.22バスで国松北 停留所下車すぐ)

TEL. 072-823-9859

会費 1000円(投句 82円切手5枚)

題と選者(各題2句 席題なし)

「ブランド」 寺川 弘一 選

「騙す」 吉岡 修 選

「知る」 黒田 能子 選

「透明」 大内 朝子 選

「涙」 三村 一子 選

「ドクター」 水野 黒兎 選

投句 11月12日必着 下記事務所宛

〒572-0063 寝屋川市春日町9-9

高田 博泉 方 川柳ねやがわ

主催 寝屋川市川柳協会

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

大阪弁あとから腹が立ってくる

給料のうちなりじつと小言聞く

自由にはなつたが年金では食えず

極楽の名簿に僕が載ってない

好きな子の足音を待つかくれんぼ

週刊誌ほどの知識で文化人

女房に謝ることがまた一つ

年金のベンチへ鳩も近よらぬ

正面から来る盃は果し状

織田作が口縄坂をおりてゆく

髪型を変えてみたとして妻は妻

空模様でてる坊主ねむられず

月末の妻は魔法をよく使う

縄のれん

如月や江下 北川 作江たち

新聞の寝床で人が生きている

飢え遠く青年の脚長くなる



川上大輪選

塩竈市 木田 比呂朗

にんげんの音が途絶えていく過疎化
過ちを悔いて再び繰り返す
企業戦士が明日に備えた大厭

可も不可もない霜月をまた焦り
物忘れ認知症との線を引く
結論はいつものように変化球
饒舌なハーフスイング咎められ

十八で大人八十では子供
消費税精一杯の納税者
昨日の事忘れ七十年前話す
呑む話になると仲間を外される
税対策貯金はしない事にする
年金の暮しで物がふえて行く

佐渡市 高野 不二

愚痴る酒マナーモードを押し付ける
言い合いが結露のように凍りつく

箕面市 中山 春代

原産地やつとみつけた虫眼鏡
達筆で刻んだ句碑を指でよむ
朝顔の種かき集め夏仕舞う

幸せは秋刀魚を二匹焼いている
予定表どんどん埋める寂しがり
また来てね一筆箋に花模様

岡山市 藤成 操江

4Bで綴るわたしの懺悔録
オギャーから始まる冒険の旅路
旅の空アバンチュールに誘われる

三原市 鴨田 昭紀

盆過ぎて夫が帰ってゆく銀河
見覚えがあつて会釈で擦れ違ふ
身に余る話の後の猜疑心
オアシスが欲しくて帰る秋祭り
この先を問えば朧な風ばかり
雑踏の中で一日浮いてくる

松山市 栗田忠士

窓開ける今日一日のプロローグ
ヨイトマケの歌が聞こえるアリの列
徘徊のハートに鍵を掛けておく
どこへ行っても影が私を恋しが
ポケットの夢を零したほつれ穴
うちの猫時々薄目開けて見る

瀬戸内市 東 横 ますみ

日傘クルクル仕掛けた異はもう時効
聞く耳を持つて余生を立ち泳ぎ
過去形で咲いた花なら許そうか
ふわわり老いとはこんなものだろう
進むから胸が軋んでくるのです
バキバキと未来の折れる音がする

山口市 中前 幸子

目を閉じてゆっくり自分だけの刻
各駅停車のこち良い自由席
土偶一つころんと秋風の中に
道化師の影は涙の形して
九条の揺れに突っつい棒をする
ほのかな思慕を紙飛行機で飛ばす

愛媛県 西田 美恵子

虹の彩が段々褪せてくる挫折
老々介護キャッチボールをするように
争いの絶えぬ街にも虹は出る

無になると背に吹く風も読めてくる
哀しみを押し込む母のポケットだ
アンテナをゆっくり畳む失意の日

尼崎市 清水 久美子

古稀過ぎて八頭身が邪魔になる
独身を貫いてきた訳じゃない
便利屋にされて気付いたお人好し
毒舌に助言足すこと忘れない
預金帳見せてギャンブル止めさせる
短くと言ったら刈り上げにされた

豊橋市 藤田 千休

服薬をころり忘れた回復期
懐がタオルを投げるトイザラス
粗彫の郷土玩具にある温み
丸腰の私を攻める妻の口
鉛筆を武器に闘う五七五
間違えた助詞が話をこじれさす

池田市 上山 堅坊

私のナンバーワンは没句数
亡き妻と敷いたレールの上を行く
理性など捨てて飛びたい夕茜
矢面に立ってじっくり空気読む
ほろ苦い恋が顔出す同期会
乾杯を待てない喉が鳴っている

伊勢原市 小田 幸子

ひと時を犬と遊ぼう荷を降ろし
かた時も離れぬ犬の背が熱い
少年の一途な心音に映え
ライト浴び少年甘えを脱ぎ捨てる
新築の家の窓辺に夢ともる

横浜市 川島 良子

領きながら目線の先にある景色
バランスが崩れはじめた三年目
かけ違い戻せぬままに秋がくる
同情をされると傷が深くなる
はみ出した個性どうするどう伸ばす

横浜市 長島 亜希子

穴あき靴下 靴は脱がない履いていこ
自由研究親の力量試される
ご近所さんとまた会うお暇なんでしょね
元氣だから終活してと言うのです
あなたの為よちよつとうるさい事も言い

大阪市 高杉 力

今ほもう秋か人生カレンダー
フェイスブック近くにいつもいるみたい
カップルで居酒屋に来てスマホする
ねえさんと呼んで値引きを期待する
口数の多さで嘘がばれている

大阪市 田中 廣子

白鳳の仏と出合う二人旅
花火見て匠の技に惚れました
幸せに包まれここに二人居る
豪雨禍に思わぬ被害胸つまる
タイガースいざという時ボカがでる

大阪市 田中 ゆみ子

敬老日いつまでするか白髪染め
夜があげたらなかったことにするつもり
ハイハイと素直にすると思えない
借り物の言葉でなごやかな集い
これでもかどのチャンネルもグルメ旅

大阪市 橋本 典子

楚楚と咲く雑草人の手も借りず
優しさの裏に脆さのあるを知る
プライドも欲も薄れる母愛し
どしゃ降りて日本の山河悲鳴あげ
この所自分へ褒美多すぎる

大阪市 宮村 満寿恵

菜園の芋と自慢のおすそわけ
友と旅ふくらむ荷物減るお金
監督はベンチに座り仁王顔
クーラーに懐までも冷される
猛暑でも体重計は回わってた

堺市 羽田野 洋介

富田林市 小出修三

二度三度つまずいてから真つすぐに
結びはと言うたその後長々と
初めから小さな予算削れない
渡る世間楽に泳げば済むものを
顔見せず来るのはいつもメールだけ

堺市 大和峯 二

寝屋川市 岡本 勲

本心を語れぬままで幕を閉じ
許すことできて心を実らせる
心から発する言葉忘れない
苦も楽も運命として腹にすえ
微笑みは世渡り術と心得る

貝塚市 吉道 あかね

虫の声や々と私を取り戻す
まだ姑の味を覚えている夫
本箱の小さい文字から整理する
生きたとは悲しいものと知る野菊
ジョーカーを持って静かに燃えている

豊中市 荒木 郁子

ギブアップ性にあわなない頑張り屋
思い出に浸り断捨離はかどらぬ
老い二人めつきり会話弾まない
頼り合い愚痴を言いつつ歳重ね
欲を捨てひたすら生きる女坂

東大阪市 織田 登子

菜園の話になると饒舌に
期限切れ妻は平気で毒味する
たった今来た道迷う星明かり
汗流し勇氣根気で農作業
じつくりと口説いた人が側に居る
かがんだら一段ふえた妻の腹
きのう買った服が半値で寝込む妻
仕事より上司の趣味をまず憶え
明日もあるその気が俺をダメにする
いたずらも背負って軽いランドセル
茄子の花母の小言もなつかしく
猛暑過ぎ雑草虫のパラダイス
土瓶の中で鱧と松茸出合う旅
ヴィーナスの笑窪は恋の落し穴
飛魚は鳥への進化夢見てる

羽曳野市 中川 ひろ介

若い日のマタニティ服丁度合う
神棚で発表を待つ宝くじ
孫独りお泊り出来て自慢顔
三世代盆おどりの昔
ゆるしてネ夏の仏花は造りもの

枚方市 河田 洋子

胃袋が満ちてその場で眠りこけ

孫の顔見ればやりたいポチ袋

福袋期待の割に当てはずれ

お食事の後でも入る袋菓子

惚けたのか思い出せずに今日も暮れ

大阪府 小栢 こそえ

あと少し女でいたく紅を引く

程の良い妬みもあつて伸びる知恵

老いと言う孤独の日々をする戦

巻いたネジいつの間にやらゆるむ老い

川柳が無いとゆっくり休む脳

大阪府 神野 千恵子

秋日和色鉛筆もおしゃべりに

片付かない家でなぜだか落ち着ける

ライバルは鏡の中にいる自分

どうしてもつぶやく時は下を向く

野次飛ばす総理頂く軽い国

大阪府 平井 美智子

荒波を越えて小波にすくわれる

淋しがりですが時々人嫌い

残高のない通帳を抱いている

秋の夜の少し多目に飲む寝酒

葬式の帰り明日のパンを買う

神戸市 玄 番 美恵子

やわらかい土で根っ子はたくましい

回復に向かう嬉しい七分粥

針と糸日がな一日手が遊ぶ

やわらかい日ざし介護の手が温い

素っぴんで白いエプロン似合う嫁

神戸市 富永 恭子

何もかも美味しい胃腸元気です

飲み込んだ我慢が喉を越さぬまま

死んだふりして私に猫じゃらし

羞恥心動線に居て邪魔をする

愚痴ひとつ鳴門の渦に棄てました

神戸市 山根 弘子

落ちこんで母のつばさの中にいる

百歳をめざし句作り夢にみる

プレゼント例えばなしでねだる妻

病いえ千羽の鶴がとび立つ日

川柳のネタを探しにチョイ散歩

小野市 藤原 泰宏

好奇心あるから身体よく動く

熱帯夜過ぎてお布団引き寄せる

逢った日は心も和み気が晴れる

歌手の名がやっと出てきてほっとする

にっこりと声かけられて誰だった

三田市 今 西 廣 子

和歌山県 森 下 よりこ

外出日コンビニおにぎりおみやげに

ケイタイで繋がつてるといふ強気

モロヘイヤジュースで活を入れている

雨多い今年の夏の草の伸び

宝くじ私は買った事がない

鳥取市 近 藤 秋 星

生まれて来た証し残してから死のう

歳はもう重ねたくない神様よ

虫でさえ子孫残して死んでいく

なるようになる神様に任せてる

明日のことよりも先ずやれ今日のこと

鳥取市 坂 本 とも湖

巡礼に出たが煩惱一つ増え

涼風がわたし無視した様に吹く

失業へときめく恋もしておれぬ

癌二つ見果てぬ夢を子に託す

三段腹見るも嫌だと鏡拗ね

倉吉市 堀 かずこ

ひとり者出る金いつも三人分

やりくりが大変財布軽くなる

叱るよりさとすやさしい母の声

近ごろは忘れることが多すぎる

雑草も小さな白い花が咲き

商売のこつを覚えた自動ドア

悪しからず試食の好きな皮下脂肪

昔はジュリー今は諭吉にときめいて

盛上りないまま終る少数派

生き方も散り方も大きなお世話

三田市 上 田 ひとみ

優しいという字をじつと見てごらん

側に居て話を聞いていたいひと

この荷物わたしと同じ寂しさで

君だけに精一杯のちからこぶ

知っている頑張ったこと泣いたこと

三田市 九 村 義 徳

青い目が和食のマナー指導する

うるさいと言えずゴホンと咳払い

ピンチには月光仮面やって来た

味見するうちの父さんシェフ気取り

キムタクと一寸バランス違うだけ

奈良市 尾 畑 なを江

赤トンボ何か良いことありそうだ

亡母が居た頃に戻れる夢の中

消さない寝れない人とよく揉める

新制度すぐ犯罪の芽が生える

要するに自然の力には勝てぬ

米子市 野川宣子

手助けの出来る両手を空けている
片寄らぬバランスを取る両の手だ
欲のない人に当たらぬ宝くじ
へそ曲り操縦法にこつが要る
値上がりに間口狭める老いぐらし

米子市 見山温子

食欲なし梅干し一つ茶漬けする
子沢山うなぎは刻みばらずしに
老い二人へそくり探りあいをする
老妻も当てにされませす貼り薬
味噌汁が妻の機嫌で違う味

雲南市 菅田かつ子

五十年苦楽を共にティーカップ
道草に花の名前がでて来ない
ひよつとしてそんな気持の回り道
年だから自分勝手に使い分け
雑草の強さ敬服するばかり

松江市 武島千代枝

子がこぼす愚痴はわたしの受皿に
痛いところ次とまあ出来ること
ひと言があちらこちらにとぼちちり
ゴキブリの逃げ道開けていた迂闊
字余りを何所に捨てよか思案中

松江市 山根邦代

熱中症心掛けてたおかげさま
在来でいじめられてる花のグチ
豪雨被害お見舞言えぬもどかしさ
熱いお茶心ほぐしてくれている
重ね着を教えてくれた風の声

岡山市 伊藤寿子

いい人と言われ苦言をひっこめる
冷蔵庫鳴ったブザーに返事する
荒れた日も風いだ日もある夫婦岩
労りの言葉に弱い老眼鏡
颯爽と歩く夢みるカタツムリ

岡山市 丹下凱夫

一日中テレビ見るのも草臥れる
早起きしても八時間は寝ている
七十七年余所見ばかりをしてきたか
点滴の前に小水出しておく
こだわっている水割りの自然水

岡山市 永見心咲

もぐらにも事情があつて深い穴
批判連発妻は噛み付き亀になる
妻の蔓が絡みつくので遊べない
ネタ切れを詫びてポケット裏返す
明日開く蕾が力抜けと言う

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

朗報に私の手鞠弾みだす
人肌の便り元氣をもらいます
躓いてはじめて開く亡母の辞書
妥協ぐせついて自分を見失う
聞き上手話上手で輪が丸い

竹原市 土井 輝 恵

美容院変えて心の掃除する
イケメンに弱い私のお買物
これだから五七五は止められぬ
頑張れという言葉すら辛すぎる
白髪で上品な女真似たいな

竹原市 若年 幸子

おしゃべりを数えていない万歩計
クルーズへ白いかもめになる私
その昔山ガールだったお母さん
町内会正論吐いて疎まれる
久びさのデパート巡る解放感

岡山県 池田 たか子

体操の五分で今日の調子知る
見送った旗を悔やんで終戦忌
オニヤンマ囓まれて泣いた日はおぼろ
束ね髪二本の指に余る八十
悠ゆうと見せて浮雲にも苦勞

岡山県 田中 恵

かぶと虫餓鬼大将を呼んでいる
うるさいが律儀な風が憎めない
招き猫のかたちで寝てる花むしろ
正座して尻の重さに耐えている
一本の鉛筆がある夢がある

福山市 藤後 卓也

原爆ドーム色なき風の私語を聴く
わだかまり捨てると見えてくるあした
脚色が過ぎたか鳩が寄りつかぬ
置き葉男独りの秋に来る
喧騒の街で独りのにぎり飯

山口市 増田 めだか

美しい嘘から転ぶ赤い靴
札幌の好きな女でよく転ぶ
ただ今の声に安堵の旅土産
共稼ぎ夫婦に軋む音がする
サギ電話見抜いたババの得意顔

岩国市 上村 夢香

国民を置き去りにして知らんぷり
警鐘を鳴らし続ける大自然
検診は異常なしです寿司にする
変身のわずかな望みエステ行く
東北の安らぐ日々はいつになる

大洲市 花岡順子

ほけ封じ少し寄り道して拝む
塩水につけるとわたし砂を吐く
頼まれて背中を押した悔いがある
旅慣れて人の行かないところが好き
故郷はもう空っぽになった家

高知市 三谷松太郎

お前さん素焼土偶のままでもいい
風が出て君のしぶきが虹になる
アボカドもあなたもけっこう意地っ張り
いろいろとありましたので分骨で
間をおいてづんと響いた遠花火

佐賀県 真島久美子

生き残る道だ迷路を突き破る
エネルギー不足で辞書の中にいる
子と生きる方角がまだ定まらぬ
夕暮れの風に私を干している
着信を待つだけですかヤジロベエ

山鹿市 柳田白沙

スパイスは君の毒舌天下
お料理も愛も小出しの自信作
内緒ですいつに咲くかは君次第
にじみ出る人間力をそっと見る
生き方を照らす鏡を作る人

山鹿市 米加田恭代

ガチョウなら高値つくはず脂肪肝
医者いわく血圧だけは二十代
お人よしそんな貴方に惚れました
お土産は多くの笑顔と言う息子
遅咲きの花を見るまで戻れない

沖縄県 森山文切

水たまり跨ぐか跨がざるべきか
もはや底いままさら薬は掴めない
足音が伝える父の勤勉さ
きっかけを拾い集めて生きている
飽きられた私にそっと溜まる蠅

シドニー 坂上のり子

ふざけてる税金何と見る政治
ちよっと立った隙に鳴り出す電話
アメひとつ上げて隣と出た会話
吹っ切れた途端虚しさつのり出す
忘れよう忘れようもう過ぎた事

弘前市 吉川ひとし

この先の暑さを読めぬ風知草
炎天下ハイビスカスが咲く津軽
秒針に首を盗られた花時計
わだかまり膝に残したまま土下座
終着の駅より先はけもの道

つくば市 嶋本 喬

相続と一周忌すみ他人様
好評のいつまで残る分譲地
涼しさに最後の一刺し蚊がふらり
法師ぜみ震え泣きして夏終る

八王子市 川名 洋子

じいちゃんが食べてくれぬと仏まえ
読み終えて心の隅に山頭火
ひまわりが一斉に見る照れてくる
蟻だつて侮られると牙をむく

東京都 高岡 弥生

分かつてる思い通りにならないと
履歴書を何枚書けば内定か
家独り何年振りか朝寝した
他人から見れば私も良く見える

横浜市 巖田 かず枝

後いくつ夫婦仲良く暮らせるか
リニューアルしたい頭と手と足と
子や孫が栄養剤になつてくれ
痛いのは夫の耳に出来たたこ

静岡市 渡辺 芳子

この酷暑よくぞ生きてた虫の声
汗ぬぐう目の前よぎる赤トンボ
なまけぐせなまけつばなしのこの暑さ
脳なしのタカでかくしたツメがない

江南市 脇田 雅美

畑一枚売って介護の足しにする
本音たてまえ上手く使えば採めもせず
アスファルト歩いて暑さ知る小猫
保健額前納するもまだ不安

京都市 櫻崎 篤子

平成の子は夜中に歩くのも平気
日本海くらがげが浮かび秋を知る
若者に未来は有るか総理殿
少しずつ秋が増えてく台所

大阪市 磯島 福貴子

金婚終えダイヤ婚へと舵を取る
青空にすくつと背伸び曼珠沙華
あれもこれも断捨離出来ず山築く
鼻に栓ギンナン拾いご満悦

大阪市 梅里 南天

ジャンケンをすればあいこを3つずつ
母傘寿少女のようなことを言い
今何をするか忘れて立っている
ひたすらに恐竜の名を暗記する

大阪市 大治 重信

大欠伸遠慮はいらぬ無位無冠
敬老日いつもの酒に多く足し
日の丸を味方につけてラッパ吹き
おたがいが嘘を承知で五〇年

大阪市 柴 本 ばつは

免許証返した父の散歩道

勘当じゃあの頃は父は強かった
子供よりスーパーマンのすきな父
父の木も母の木もある森へ行く

大阪市 中 島 栄 子

幸せだった尋ねてみたいかあさんに

私幸せ伝えてほしいかあさんに

亡き母の手を今日もまた探してる

親の愛子燕元氣旅立った

大阪市 平 賀 国 和

子の結婚聖地となった軽井沢

平成を昭和前期に戻すまい

諸行無常不意の別れが増えてきた

被災者の苦難を思う水害禍

大阪市 藤 田 武 人

改札に仕事疲れを置いて出る

背伸びした足が疲れて下駄を履く

微笑みを忘れた顔も美しい

さっぱりと忘れたいのも未練だな

大阪市 前 川 善 之

小さな嘘嘘は嘘生む先が無い

九条が有れば登れる平和塔

大器と言われ期待に背く星多い

今があるのも親のお陰と忘れない

大阪市 松 田 聰

真夏日にお節広告面くらう

新聞を見たくなくなる記事多し
番組がつまらないから本を読む
マイナンバー便利なようで不安増す

大阪市 横 山 里 子

里帰り母の味です秋刀魚寿司

枝豆はあなた好みの塩かげん

鬼灯も鳴らず不器用まだ一人

お手玉に恋のかけらを入れて投げ

大阪市 吉 田 知 之

棄権して文句たらたら無責任

人のこと気にしすぎると動けない

好き嫌い世間を狭くしてるだけ

酉年は年をとってもバタバタと

堺 市 山 崎 早 苗

ふらついて一人壁ドン苦笑い

強い「我」が病氣の前でなり潜め

八十で自立の母に教えられ

テレビとの会話日ごとに増えていく

泉 大 津 市 助 川 和 美

給料前毎月スリルある家計

新聞を広げ読みつつ爪を切る

節約をケチと言われて奮起する

なんでやねんおせちの予約する真夏

交野市 田岡久幸

予期せるも茫然と聞く義弟の計
川遊び帰って聞いた終戦日
千円の本で一行智恵を買い
このオレでさえオレはカシコイ思うてる

河内長野市 穂口正子

言われてる内が花なの聞いているの
人のこと聞かんといつも困らはる
めかしてもとんと変わらん歳になり
バスの旅可愛い妻も皴白髪

河内長野市 森田ひろこ

打ち上げた花火しほんだ都構想
夢を持ち抗ってます老いの坂
迷子札つけて恋しい亡母を呼ぶ
すらすらと答える夫眼は泳ぎ

河内長野市 渡邊修

片隅のやせた秋刀魚が高値呼ぶ
今年こそ焼きマツタケとどびんむし
爆買いで道頓堀も新名所
元氣ですかパソコン片手聞く主治医

高槻市 鳥居宏

七十年八月の空晴れぬまま
父と二人敗れた国に芋植える
災害に遭うまで高を括ってる
川沿いに住んで豪雨に肝冷やす

高槻市 三谷白黒

やっぱりね好きという字は女の子
姉さんは耳遠くなり手紙増え
あと少しケンカしないで終りたい
猿のためトマト育てるお人好し

豊中市 荒巻夢

正座して天然鮎をいただいた
しゃれた靴履いたおつりか痛み出す
思い出を手練り寄せてる夢現
人も味もそのひと癖がたまらない

豊中市 上出修

階段はクスリクスリと一二三
胃の中でおはじきしてるクスリ漬け
i P S 人生地図を塗り替える
防災に想定外は禁句です

豊中市 貝塚正子

やせるほど抱かれていたい秋の夜
嘔みつきはせぬがともかく良く吠える
考えると言うた返事はきつとNO
ふと思ひ動いた時は忘れてる

豊中市 源田啓生

縁かいな介護する人される人
お互いの残り歯数え自慢する
日本のおしめ欲しがる国がある
戦争は出来ない筈だ長寿国

寢屋川市 大同 美江

知らぬ子に挨拶されてあらどうも
ボケ防止クロスワードで暇つぶす
縄とびで遊んだ友が里に居る
敬老会ひばりの唄で座をにごす

寢屋川市 守家 尚世

二日なら良き婆振りがうまく出来
濁流の命掛けへり怖さ知る
景色良い山川近くに住む不安
日々増える室内入り日に秋感じ

羽曳野市 磯本 洋一

辛くても耳を澄ませば明日が来る
老いらくの出合い求めて旅途中
捜し物不用になって見付け出し
ときめきを友と競った通学路

羽曳野市 安本 美喜

ハルカスの肩より昇り今日の月
人いちばい苦手なものよ稲妻よ
国勢調査インターネットはございません
人ごとでない水害の雨憎し

枚方市 坂本 ミヨノ

赤とんぼ追っかけ坊や今白髪
秋の夜虫の音弱く丸い月
萩の紅すすきゆれてるさわやかに
繰り返してマナー欲しいと口もぐり

枚方市 松原 保

蟬の声消えてトンボが秋を呼ぶ
代議士さんそれを言ったらおしまいよ
詐欺バクリコピペ盗撮ここ日本
発泡酒ビールと違い判るかな

箕面市 大浦 初音

猛暑日と聞いてにんまり避暑の夏
花を供え洗った墓石そつと撫で
もめ事のうらを返せば欲の皮
人の道親の背中に教えられ

箕面市 寺井 柳童

神さんに本音ぶつつけ気が晴れる
辛口のコメントが好き心地よい
三つほどサバよんでたの若いでしょ
台風の進路に地名教えられ

八尾市 田邊 浩三

とりあえず並んで見よう長い列
傘寿までよくぞ泳いだ荒波を
腰痛でプールは歩くところになり
縄暖簾くぐると気力湧いてくる

八尾市 前田 紀雄

定年後三食付きの昼寝付き
古希半ば未だ人生を模索中
誕生日祝って貰う内が華
根なし草港探しに日が暮れる

チエックイン重量オーバー店開き
八尾市 山川 寧

さあバリだカフエでわくわくボンジュール
ブルサイドいきかう声が子守り歌
ばあちゃんと呼ばせぬように名を思案

大阪府 高木道子

台風を耐えた樹樹らの息づかい

半世紀前の五輪の靴が鳴る

気まぐれな雨も暑さも許す初秋

ゴチャゴチャと変哲も無い暮らしぶり

大阪府 畑中節子

畑菜し野菜きつちり返事くれ

息子の成長亡夫の横顔偲び見る

曾孫の目見澄み笑顔華となり

楽隠居テレビドラマで涙する

神戸市 輿水 弘

去り際はいいことだけを言っておく

雲行きに気ばかり取られ蹴躓く

嘘と見栄ネオンの迷路で啜い合う

国訛りふる里近し駅数え

神戸市 井上 忠貞

反論も軽く笑顔で受け流す

白黒をはっきりさせぬ知恵もある

芸の道遊び心を少し入れ

天気良くバスを待たずに歩きます

てきばきと進む葬儀の香の列

残り日は微笑集めの旅とする

貯め込んだ優しさ少しづつ使う

痛む恋が秋の優しさに触れる

神戸市 近藤 勝正

墓参り我が孫ほどの兄いとし

秋天へ煙ひと筋父が逝く

秋晴にきりつと映える彼岸花

スマホ買ひ孫が一躍先生に

神戸市 福原 悦子

執着をすてた言葉が美しい

千枚田会話楽しむ小鳥等よ

因習に反対する嫁たのもしい

苦も楽も食べて勇気が湧いて来る

神戸市 細川 花門

ほろ儲け話の舌はよく動く

バスポート栄転先と限らない

整理下手いつもなにかを探してる

流れ雲意地を通さず角立てず

伊丹市 平井 富夫

介護ロボいつも笑顔で素直です

金返す息子とギリシャ本当か

慣れっこさいつも家では脇役よ

努力せずたどり着いたよ老年期

川西市 日野岡 和之

出来不出来あらぬ噂は自然体
守るのは国民いない国土だけ
校門を出ればそこから有権者
ありのまま生かさされ老いの底力

篠山市 佐々木 勇

私より真面目なんです洗濯機
新聞が頼りなんです遠い耳
老夫婦互いに寄つてくる会話
たくさんの葉を前に手を合わせ

篠山市 永井 かほる

盆掃除遺影手にしてひと休み
千の風やさしく撫でる盆の墓
坊さんの声高々と盆の経
この暑さ体力もつか気にかかる

篠山市 藤井 美智子

惜しみなくありがとうとすみません
近頃の自信のなさは老いの所為
これでよし決めたからには振り向かず
チン故障しばらく不意味わおう

三田市 多田 雅尚

試してるつもりが逆に試される
マネキンの様には見えぬ試着室
もがいても這い上がれない蟻地獄
買い物も値切り役にとついでゆく

三田市 辻 開子

夏終わりゴーヤのグリーン役おえる
目覚めたら今日一日の無事祈る
する事はたくさんないが明日におき
日日介護頑張りすぎた今のつけ

三田市 東内 美智子

人の上に立てる器を割った人
風邪かしらちよっと休めと言うことか
桐箆筒親の苦勞もお蔵入り
この人でなけりゃ嫌だと言うたかな

三田市 野口 晶子

天秤座女と母が揺れている
小じんまり年金内でダイエツト
気がつけば演歌ばかりを唄つてる
炎夏日の伸びきった麵姦しい

宝塚市 井上 風花

彥星を探しあぐねてアラフォーに
結び目が解けず一生棒に振る
結ばれた糸は赤だと信じたが
歯並びのいいのが売りの総入歯

宝塚市 太田 としお

国守る言葉か武器か知恵を出せ
デモ行進ここは日本で良かったね
亡くなったサプリメントに囲まれて
原因のない結果どこにもありません

宝塚市 丸山孔一

素足にも色気が増して子が育つ

旅の膳数より質の気の配り

水着とは水辺を歩く為のもの

陽炎の先におぼろな我が未来

西宮市 株元玲子

猛暑も何のその孫の羨まし

悲しみは心の奥にそっと置き

真つ青な空を見上げて深呼吸吸

励まし励まされ恙無く暮れる

三木市 山口久子

まめらしく元気に動くお嫁さん

時流れ自分の歳を忘れがち

秋晴に菊花かおりし文化の日

秋風にスキおいでとよんでいる

南あわじ市 萩原狸月

雑踏へまたも迷子のアナウンス

国民の代表と言う独裁者

空家増え人の景色も変る村

桜よりもみじの寂に気が和み

和歌山市 北原昭枝

それからは空気のように横にいる

あべこべも時に楽しいピエロの目

逆らえばさみしくなっている心

火も水も夫婦茶碗が知って秋

和歌山市 平田元三

水溜り避けよ中には月がある

二番からラララが混じる古い歌

三十一が浮かべばすぐにメモに取る

放火魔に恰好の的ゴミ屋敷

岩出市 村中悦男

庭の草私の根性ためすのか

昭和に生きた二年生まれは何残そ

戦争と平和を生きて今米寿

銃後では勝った勝ったと聞きました

田辺市 大峠可動

八月の挽歌背後で風を受け

慟哭のうたばかり書き原爆忌

影を奪われて枯葉の吹き溜り

素晴らしい彩を背負ってゆく夕陽

鳥取市 大前安子

散歩道鳥が呼んだかつい答え

散歩路でトンボは先に秋を告げ

散策へブライド捨てた人が寄る

メイクにもドラマがあつて今日休み

鳥取市 奥田由美

今はもう夫の行動無感動

ここですと顔を見ながらシニア席

腫れた指痛いですかと医師がもむ

ブライバシーは共有させる雑居部屋

鳥取市 高原 かおる

寺の門くぐり法話を聞いている
シルバー席とまどいのない歳になり
好きな酒多分飲むと言ふカルテ
もしもしと早朝電話不安乗せ

鳥取市 田中 天翔

ごめんなさい新米なのでかい面
盆が済みもぬけの殻になりました
嫁さんに早くこの城渡したい
光るかも知れぬわたくし磨きます

鳥取市 津村 律子

腰痛庇いごみ拾う足の指
お隣へリハビリになる回覧板
麻痺訓練のあいうえおバビブペポ
疲れとる大根足の浮かぶ風呂

倉吉市 岡崎 美知江

骨粗鬆症一寸身軽になりすぎた
三色ペン黒色だけが忙しい
誉めるのが上手やる気を起させる
化石から過去のロマンが見えて来る

倉吉市 田中 紀美恵

赤子の目キラキラ光る美しさ
ストロ―で次の言葉を練っている
練りすぎて没の句ばかりトホホホ
戦中のおやきの味はほろにがく

倉吉市 中村 毅

ノ―サイド夫婦喧嘩のその後は
図書館が招く居場所のない子ども
熱中症否二日酔いかも知れぬ
一生に一度爆買いしたいもの

境港市 中井 虎尾

鳥取じゃ新甘泉にんかんせんの味走る
青い空式典終りまた汚染
サミットだ鳴き砂青谷キユツキユ
可愛くて問題答教えたの

米子市 生田 和之

言い訳を用意して出る班会議
スキップで通えぬ孫の通学路
デミグラスよりもボン酢が口に合う
がむしやらに振ったバットに神が乗る

米子市 池岡 たけし

暑くなく寒くもなくいい日より
長らえて身体も古くなりました
一日は世のため人のために生き
幸せをよくよくかんで長く生き

米子市 田村 周子

敵しいが伝わってくる母の愛
民の声聞こえないのか民主主義
孫娘嫁に行くのか秋の空
むし暑く激しい雨は止みもせず

絵日記に叱る私の顔かかれ

米子市 永井 三津子

子に甘い姑嫁には辛すぎる

振り込め詐欺あなたに親は居ませんか

高齢の出会いサイトが焦げ臭い

鳥取県 飯野 菖子

秋の風動かぬ体蟬時雨

よくのない道に來ました八十路

ああよかつた医者信じて帰路につく

思い出す母の言葉は生きていた

鳥取県 岡村 孝明

妻旅行沢庵味噌汁玉子かけ

米寿迎え余生をとくと考える

月光へ二人楽しく散歩する

老いた身は重労働へ気が乗らぬ

鳥取県 下田 登茂子

川柳があつて何とか気を戻す

有名校それが何だと叫びたい

農道に警察三人待っていた

捕えられたのは八十路の老女家の前

鳥取県 田口 清帆

無駄づかいタンスのこやしいっぱいだ

川柳がご縁貴女とお付き合ひ

出る杭の打たれ上手で和を保つ

欲の皮剥けばきれいな輪になるよ

人生へ友との出会い宝物

鳥取県 橋谷 静江

嘘だけは一度も言わず生きてきた

お喋りが長くなりそう顔馴染み

旅に出る勇氣は湧かぬ八十路

松江市 相見 柳歩

クラス会いきなりあだ名跳びはねる

脱出を雲の姉妹に笑われて

リアルな戦い今の子スマホ中

本当の優しさもらうありがとう

出雲市 黒目 英男

反骨の意地を通して古稀の坂

アイデアが枯れないように本を読む

日々新たな未知な明日に期待する

母に感謝やつと戻った脳回路

安来市 原 煩惱児

一合の酒が余るよ盆正月

味噌汁に卵落としてパン齧る

戴いた書をお宝に日日勉強

退院に日日のリズムが整わぬ

岡山市 工藤 千代子

迷ったら耳は痛いし目も痒い

それ以後は語らぬ箸を折っている

箱のみかんは減らぬ同居はお断わり

ただ甘いだけの苦言は聞かせぬ

岡山市 前田 恵美子

主婦として家族の声を拾う日々
許さない言ってるその目笑ってる
旗振って応援したい里の父
見栄張ると肩が凝るので自然体

笠岡市 藤井 智史

クチャクチャと食ってデザートをぶち壊す
最高で三回会ってさらば恋
街コンで飯だけ食って幕を閉じ
合コンの数合せでしょオレを呼ぶ

倉敷市 安東 モモ

友越して煩わしさが消えていき
外見はポエムみたいな人だった
パソコンで国勢調査出来ました
去勢手術ネコの気持聞きませず

玉野市 片岡 富子

鈴虫と蟬が交互に鳴くお宮
会話してやっど解けた蟬り
とっておきの話を仕舞い忘れてる
認知症予備軍の席譲ります

岡山県 高岡 茂子

食洗機百均の皿われません
気がつけば手抜き料理の腕あがる
わびを言いトンボ返りの墓参り
ナビゲーターは友ドライブも人生も

尾道市 小畑 宣之

歎振るう花咲爺の気持です
手作りの葉で告げる恋心
スイーツを見て別腹の虫が鳴く
虫の声名は分らねど心地良し

尾道市 日谷 寛

無駄のない心少しも曇らない
あたたかい心が無駄を包み込む
無駄食いを止めて血糖値が下がる
美しい心だ無駄も影もない

三次市 伊藤 寿子

お見舞へシヨーツ3枚入れる仲
冷静に我が体調を問う体
きれいになる化粧品より強壮剤
三婆会あすは三つ四つ若返る

宇部市 高山 清子

老いの智恵白黒つけず和解させ
ひとつ捨てひとつ拾って世を渡る
老い卒寿独り腹立つ勘違い
閻魔の前長くて言えぬマイナンバー

防府市 坂本 加代

国防は一致団結いつの世も
九条で世界遺産になる日本
殊更に産んでくれてと言わずとも
動体視力鍛えて脳も若返る

松山市 神野 きつこ

朝シャワー起きろ起きろと水が言う

フィクシオンに蔓を伸ばした好奇心

大根の一本買いは贅沢だ

老後破産チラリ頭をよぎります

今治市 渡邊 伊津志

どんな子になるやらネット依存症

裏の裏は表と思う事にする

冗談の握手が運ぶ赤い糸

チココレイト無職の人は通過する

北九州市 小松 紀子

七十五知らない事がいっぱいだ

今が大事明日は判らぬお年頃

心安らぐ友がいて無駄話

出来ないことの言い訳はさがさない

福岡県 本田 さくら

荒れ狂う嵐よ何が気に入らぬ

雨風に案山子うなだれ風邪ひくな

ゆううつな心を隠す化粧する

不用服ボタンはちゃんと取っておく

唐津市 岩崎 實

よろけ出す足いとおしくたださすり

出来ること精いっぱい負け惜しみ

換気扇回り続ける知らぬ間も

今年まで田んぼ見回る老いの背な

唐津市 吉富 節子

期待せぬ奉仕のあとの笑顔です

終点も近し後悔せぬ暮し

クラス会終り電話が多くなり

古里のある幸せを知りました

佐賀県 門井 孝

夏終り味覚の味を待ちわびる

レシビより上手に出来る男味

虫の音が秋だ秋だと嬉しそう

孫帰る温もり残すおもちゃ箱

熊本市 杉野 羅天

レポーター旅でセレブになっている

1×1フリーハンドの旅に出る

チュニツクでも胸よりお腹出ています

株乱高下誰がやってるんでしょ

山鹿市 前田 幸子

ハイ何てナア補聴器はめよと子に言われ

バレエ中継次につなげと拳あげ

戦中の苦勞の思い出今笑顔

台風ハハウスはがれて西瓜泣く

山鹿市 三谷 直男

親の背は絶対見えない子たち

おもてなし上手に人を騙すのか

台風だ噴火放火だバカ親だ

いつまで夏どこに秋明日は雪でもおどろかぬ

終電車佃煮のような親父たち

札幌市 齊藤 宏子

紫陽花の浴衣をたたみ惜しむ夏

焼きサンマ昔がおう路地の裏
はかなげに秋桜群れる廃校舎

札幌市 富永 恵子

宝くじ買った積もりでりんご買う

ひとてまを掛けて夕餉の笑い声

夏祭り過疎の村にも人の波
虫食いの野菜が届く垣根ごし

登別市 小林 碧水

これ以上開ければ困る人がいる

少子化を笑っています葡萄房

レコードを回し昭和を食べてます

七十年平和も僕も骨粗鬆症

弘前市 高森 一吞

コスモスに逢いたくなくて遠回り

お喋りな案山子と話す蕎麦の花

偽りを確かめてみる足の裏

すすき揺れアップルロードリング色

(前月分) 大阪市 田中 廣子

夏祭り無事に渡れた太鼓橋

姫達と楽しいランチ夢のよう

喜寿祝いもっと長生き願います

星座見て宇宙の旅に孫達と

第57回 豊中市民川柳大会

日時 11月23日(祝) 12時開場
場所 豊中市立中央公民館1階
阪急宝塚線曾根駅東100米
会費 1500円(記念品・発表誌呈)

課題と選者

「紅」 瀬川幸子 選
「問う」 天根夢草 選
「疼く」 竹森雀舎 選
「サロン」 確井祥昭 選
「トライ」 久保田半蔵門 選
「ほのか」 田中螢柳 選
「きれい」 柿花和夫 選

出句 各題2句 13時締切
賞 豊中市長賞ほか
連絡先 〒560-0033
豊中市蛭池中町2-3-1-411
田中 螢柳
TEL・FAX06-6853-0470
主催 豊中川柳会

出雲総合芸術文化祭

第37回 出雲市川柳大会ご案内

日時 11月14日(土) 10時 開場
会場 パルメイトホール 4階

兼題 (各題2句) 出句締切 午後1時

「香る」 森山盛桜 選
「善」 長谷川博子 選
「穴」 熱田熊四郎 選
「粒」 渡辺康乃 選
「キラキラ」 荒木ひとみ 選
「器」 杉本夢生 選

席題

「 」 竹治ちかし 謝選

会費 2000円(昼食費含む)
主催 出雲市・出雲市川柳連盟 他

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

乱れ髪

乱れ髪式部の世より恋は憂き
乱れ髪恋の甘さは遠い過去
カナリヤもいてアパートの新世帯
病める子に母は茶断ちの思いやり
苦勞人孫には甘い爺であり
肋骨のふくらむ程の若い夢
菜っ葉服着て春泥をためらわず
地震にも煙草を吸うて居った父
悲しさに酔う幕切れの紙の雪
宮様も昔崩さぬ鬚を持ち
牛の背で笛吹く恋がしてみたし
言い当ててさびしいものに人の齡
陽は高し青鞥もよし花もよし

そのうちに影におびえることだろう
鏡には美形水には魔女の性
翼やや異なる北帰行南帰行
わが家にもロンドンからの客がくる
ライバルが面を外して飲んでいる
賽の目にわたしもお島千太郎
一瞬というは賽振る今の今
紙コップいまだに伏せたことがない
隊長は依怙地に横に並ばせる
考える人考える雨宿り

橘高 薰風（きったかくんぼう）

本名 橘高 薫

生年月日

大正十五年七月十一日

昭和三十年一月

川柳作家として活動開始

昭和三十三年二月

麻生路郎に師事

昭和四十三年二月

『川柳雑誌』編集に従事

昭和四十年十月

川柳塔社創立委員として『川柳塔』発行

平成 六年六月

川柳塔社主幹に就任

平成十二年十月

川柳塔社名譽主幹

平成十七年四月二十四日 逝去

新川柳鑑賞 (45)

麻生 路郎

モーニング煙草を入れるところがなし

(法泉子)

作者の実感であろう。ほほえましい句である。モーニングを着て、しかつめらしい顔はしていても、タバコ喫みはタバコを放せないのであるところがモーニングにタバコを入れるようなポケットがないので、思わず苦笑した。そこを捉えたのがこの句である。調子の軽い穿ちの句。

モーニング着ても

おつちよこちよいに見え

(しげお)

婚礼か葬式か、それは判らないが、兎に角厳肅な集まりへモーニング着用で出かけた。ところが元来おつちよこちよいの男なので、モーニングを着ても、おつちよこちよいに見えたというのである。おつちよこちよいとモーニング、それだけでも、充分にユーモア味を感じさせられる。

縫目あるので素足ではないらしい

(方 大)

オヤ素足のままで、ハイヒールなんか穿

いてどこへ行くんだろうと思つて、ハイヒールから眼を脚のウラの方へ移すと、縫い目がある。足に縫目がある筈がない。思わずウフと笑えるのである。面白い発見と云える。

サックドレスポストのように

ひとを待ち

(知恵美)

赤いサックドレスを着た女性なのだろう。ソレがポストと街角に立っている姿は恰度ポストのように見えたと言うのであるが、この比喩法はそのものズバリと云いたい。ポストに見立てられるなど余りいい恰好ではないが彼女自身は流行の先端を行っている気であるから世話はない。

こんどめはニューモードなる袋を着て

(沐 天)

フランス仕込みや、そうでないのも交えてのデザインナーが次ぎ次ぎに、ニューモードなるものを世の中へ送り出すが、それを若い女性達は臆面も無く着て歩いているのである。

「こんどめは」どんなものかと思つたら、サックドレスと称して、袋を着ているので一驚を喫したのである。「袋を着て」の下五に作者の皮肉が横溢している。

繼ぎあてて天地に愧じぬ作業服

(水 堂)

汚く働いて奇麗に食えという言葉がある。油じみた作業服で今日を生き抜く。あちこちに繼ぎが当たつていようが誰に遠慮があるであろう。「天地に愧じぬ」はいささか大げさな云い方であるが、誇張法の句として面白い表現である。

湯豆腐で一ੱときUSA忘れ

(草一郎)

アメリカに居ても、一世にとつて湯豆腐の味は忘れられない。そこでアチラに居ても天ぶらも喰べるし、湯豆腐も喰べる。周囲の環境がすべてアメリカではあるが好きな湯豆腐の一つときは全くここがアメリカであることさえ忘れてしまうと云うのである。いくら帰化していても斯うして折にふれ、物にふれては祖国を忘れ得ない人たちがかなり多いのである。

かんと煮き背中の風は氣にならず

(水 客)

さむざむとした冬。かんとどき屋の湯気が街へ流れている。こは庶民階級にとつての天国には違いないが、風がノレンを吹きあげるたびに背中へまともに風が当たるのである。しかし、いける口にとつてはそれも氣にならないほどに、朗らかに氣焔をあげていることが、うなずける句である。

英語 de Senryu ④7

麻生路郎句集 『旅人』

英訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

売る土地があつて 老人折れて出ず

*the land he can sell
the old man keeps
his way of living*

まだ嘘が ^{はんぷ} 半分まじった辞世なり

*his death message---
still remains
half of lie*

and 土地 *sell* 売る *keep* 固守する *way of living* 生き方
death message 辞世 *still* まだ *remain* 残る *half* 半分 *lie* 嘘

〜リバーウィローのため息〜 R.H.ブライスによる川柳の解釈と英訳⑩

ブライスは著書の *SENRYU* (北星堂書店 1949) で、*Wives* (妻) の項目を 23 句、*Husbands* (亭主) を 12 句翻訳していますが、*Mothers-in-law* (姑) は 5 句のみです。嫁と姑のこじれた関係は世界の既婚女性にとっては悩みの種です。ブライスは日本で家庭を持ち、彼の母は英国で一人暮らしの生活でしたので、家内で起こる嫁姑問題は身近には生じませんでした。それゆえに翻訳の数も少なかったのかも知れません。あんまよりうまいうまいと姑褒め (芥子郎)

(*"Much better than the masseur, / Much better!" / Praises the mother-in-law.*)

文法的に云えば、*Praises of the mother-in-law* (姑の褒め言葉) で *of* が入ります。「嫁のあんまがあまりにも気持ちよくリラックスできて、姑は日ごろ抱く嫁に対する妬みや意地悪を忘れてほめそやすなどの普段にはない態度」とブライスは解説しています。作者の芥子郎は、『川柳総合事典』(雄山閣) には見つかりませんでした。森英一氏の論文「北国新聞」文芸関係記事年表稿 (明治・大正篇) (金沢大学教育学部紀要第 29、1981) で、芥子郎の「創作二つの死」(大正 9 年 11 月 18 日) が紹介されているので、芥子郎は北陸に居住する川柳人ではないかと推察されます。

口に稱名眼には嫁をねめ (古川柳)

(*In her mouth, / The name of Buddha,-- / Her eyes glaring at her daughter-in-law.*)

稱名 (しょうみょう) は『南無阿弥陀仏』などのように念仏を唱えることです。この川柳は、口では念仏を唱えて仏教徒らしいふるまいをしています。一方で眼は嫁をにらみつけているという姑の姿を突いています。(ねめ) は睨みつけるという意味で、(睨め掛く) や、(睨め殺す)、(睨め付ける) といった語もあります。今でいう (眼 (ガン) を付ける) というのでしょうか。ブライスは姑の持つ二面性を、「男には奇妙だが、女の善悪は裏表の取り合わせ」と解説しています。

参考文献: R.H.Blyth, *SENRYU* (北星堂書店 1949) p.102,103.

誹風柳多留一二篇研究 29

山田昭夫・石川道子

小栗清吾・細井龍夫

伊吹和男

清 博美

232 西行もやろうあたまで一首よみ

山田 野郎頭は「ちよんまげ」(「日国」)。西行は優れた歌人であったが、その西行がちよんまげ頭で一首詠んだというのだ。それは、西行が伊勢神宮を参拝した時に詠んだとされる、

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

という歌。伊勢神宮は僧形の者は参拝出来ない(古い時代は必ずしもそうでは無かったという説もあるようだが)から、当然西行はちよんまげ姿で詠んだものという事になる。西行は出家前、佐藤兵衛義清という北面の武士であったから、その時代に詠んだということも出来る。しかし問題は「西行も」の「も」で

ある。僧侶は邪淫戒により、吉原などへは公然と行けなかった。それで、付鬢という一種

の付鬢をして「野郎頭」にして出掛けた。主題句の場合、あの西行さん「も」、破戒坊主たちと同じように、付鬢をして行ったんだよ、とドッキリさせるところがミソなのである。勿論伊勢神宮と吉原では行き先がまるで違う。もつともお伊勢さんは天照大神、吉原は弁天様だから、どちらも女神ではあるが……。

付鬢でなみたこぼる、る哥をよみ 五五五

忝さハ付鬢で詠ンだ哥 一四二三

清 賛。

233 寺をしてもらつてあけち又とられ

山田 寺をするは「寺屋をする。博打場を開く。賭場を開いて寺銭をあげる」(「日国」)こと。明智は明智光秀で、本能寺で織田信長討ちとるといふ大博打に勝たせて貰って、天下を手に入れた。しかし三日後に殺害され、天下は「又取られ」。

こんにやくやのこんにやくたと明智い、

安五礼5

— 雨譚註「取つて、又取られるを、こんにやくやのこんにやくといふと也」。

傍三8

清 賛。

234 下女が色大念仏で二度通り

山田 下女の恋人は、大きな声で念仏を唱えて「二度通り」。相手の下女を誘い出すための合図なのだ。これが粹ぶつた息子などなら、気の利いた歌などをサインに用いるのだが、所詮「下女が色」程度では、無理というものの。下女か色おなまめぶして二度通り

安七満2

おなまめぶしは、おなまめねんぶつ。「願人坊主などがとなえた念仏の言葉。なむあみだぶつ」(「日国」)。

清 賛。

235 むぞんほうかいで引ばくまくらがや

山田 無縁法界は「③でたため。めちやく
ちゃ」。枕蚊屋は「子どもなどの枕をとを
う小さい蚊屋」(日国)。

枕蚊屋は、普通の蚊屋に比べれば大変小さ
なものだから、ほんの片手でさっと取り去
ることが出来る。その素早さを「無縁法界」と
表現したところがミソ。

ちつほけな大の字形りハ枕蚊屋 一六四九

無縁ほうかい枕かやた、ませる 六一三

小栗 不明。類句を見るに、枕蚊帳はその
中に可愛い赤ん坊が寝ているということが前
提。とても「引っぱく」ような扱いをするも
のではないと思う。また、「無縁法界」も、

無縁法界壁際に五六人 拾七六

は、売れ残りの女郎の句だるうから、この句
では単に客に「無縁」といったまどと思う。
無縁法界の意味は「縁もゆかりもないこと。
またその人」(日国)でもあるから、赤ん
坊の親族でない者は、粗雑に扱う意かと思
うが、もう一つ腑に落ちない。

細井 枕蚊帳は赤ん坊ではなく、大人が顔頭
だけを覆っているものだから、無雑作に取り

外して「何時まで寝てるんだ」と起こしてい
るところ。

伊吹 細井説賛。

清 同右。

236 うつとしいかふるつつつとぞだつ也

山田 禿は十三四頃になって身体が一人前
になると、姉女郎の世話で新造に出る。いわ
ゆる禿立ちの新造出しである。これには大金が
掛かるから、姉女郎としては頭痛の種。それ
を知ってか知らずか、「禿つつつと育つなり」
それで姉女郎は「鬱陶しい」のである。

天からな禿ハ姉の頭痛なり 露丸明三乾一

清 賛。

237 一ト箱もくすねて置いて戸をたてる

山田 一箱は千両箱。戸をたてるは店を閉め
ること。千両の大金を隠しておいて、倒産す
るといふのだから、計画倒産、あるいは偽装
倒産であるう。普通なら、

品切れのするかぶんさん下夕地なり

明六宮一

など、何らかの前兆があるものだが、偽装あ
るいは計画倒産では、なかなか見抜けない。

あす仕廻ふ迄もりつばな呉服店 五二
小栗 賛。今一つ、すつきりしませんが……。
清 なるほど、計画倒産ですか。

238 みつもの屋下女におつはたぬけといひ

山田 三物屋は「古着類をかついで売り歩
く商人」(日国)。古着類を下女に見せなが
ら、下女に「一肌脱いで大奮発して買って頂
戴」と言っている図。

みつものを下女は直斗聞て見る 四四

小栗 賛。「おつ肌脱ぐ」は辞書には、「勢
よく肌ぬぎをする」(日国)、「思い切つて
肌脱ぎになる」(江)の意しか書いてない。
また「肌脱ぐ」も、「②親身になって助力する」
(日国)の意しかないが、これでは、解釈
できそうにない。ただ先人の解として、

小間ものや下女におつはたぬげといひ、

玉二六

という、似たような句につき「輪講」(川柳
雑俳研究会)で、そのまま「肌脱ぎになる」
の意見がある中で、佐藤・岡田両先生が「思
い切つて」の意とされている。磯大先生に敬
意を表して、この意見を頂戴し、礎賛とする。
清 賛。

第21回 川柳塔まつり

同人総会

平成27年度第五十期川柳塔社同人総会は十月三日午前十時からホテルアウイーナ大阪で開催された。総務部水野黒兔の司会で開会し、小島蘭幸主幹から主幹五年を経て塔誌の充実等成果も得たが、誌友同人の拡大が急務であり引き続き頑張る旨、平成27年度方針と合わせ挨拶をいただいた。その後小島主幹を議長に選任して議案報告を行った。

第一号議案の平成二七年度事業活動を片山かずお企画部長が報告した。

・第二〇回川柳塔まつり（塔誌創刊九〇周年記念川柳大会）を開催し参加者416名の成果となった。

・特集「川柳塔九〇周年」はじめ「六賞のあゆみ」及び印象吟「インスピレーションナビ」など誌面充実に図った。

・本社句会の充実に努め毎月平均一二〇名の参加を着実に維持できた。又、春の誌上大会も七〇〇名超の応募があった。・経費節減を徹底的に実践し会計の健全化に努めた。

次いで鈴木いさお会計部長から平成二六年度の収支決算書及び財産目録の提示と報告があり、西村哲夫会計監査が監査承認の旨報告した。特に質疑は無く、一号議案は拍手で承認された。

第二号議案の平成二七年度の事業計画について片山かずお企画事業部長から各別に活動計画を提案、また鈴木いさお会計部長が新年度予算案を提案、本件も質疑は無く二号議案も拍手で承認された。

第三号議案として、新家完司理事長より役員の新任、再任人事が提示され拍手をもって承認された。新任役員名は後掲。

その他として新家完司理事長より役員定年制について、規定に則し七五歳定年は踏襲するも主幹・理事長の合議裁量により特例として一年、又は二年の延長を可とし、人材確保に努める旨報告された。



同人総会の模様

又、総括質問も出席者より数件頂き、理事長はじめ適宜応答が為された。

新役員を代表し藤井宏造新任理事の挨拶があり、最後に川上大輪副主幹の閉会の辞で総会を終了した。

■事業活動報告

2014 (平成26年)年

10月4日 第20回川柳塔まつり(塔誌創刊

90周年記念大会)及び平成26年度同人総会開催。

11月8日 川柳塔碑合祀法要(高野山大

霊園。合祀者4名合計19名参

加)

(主な受賞・表彰)

*本社句会 月間賞永久保持者

木本 朱夏

*第八回太陽福祉文化賞

岸 桂子

(出版・句集の刊行)

小島 蘭幸 句集「再開Ⅱ」

永田 俊子 俳句・短歌・川柳集「野菊」

斎藤 苺 句集「大地」

横山 捷也 句集「歩を妻と」

坂上 淳司 句集「梅干しと干し柿」

早川 遡行 句集「山の句集 独標」

松尾美智代 句集「小さな芽」

須郷 井蛙 句集「蟻」
佐藤 古拙 句集「人畜無害」

(物故者) (七名)

山本 蛙城 平成26年8月28日没 94歳

神夏磯典子 平成26年10月28日没 83歳

近藤 佳子 平成26年12月6日没 91歳

永田 俊子 平成26年12月14日没 102歳

深田 俱久 平成26年12月15日没 91歳

土橋はるお 平成27年2月2日没 83歳

白根 ふみ 平成27年2月13日没 85歳

■新任役員(再任・留任は含まず)

常任理事 藤井 宏造

参 与 河内 月子

理事 池田 純子 初代 正彦
内藤 憲彦 松岡 篤

山野 寿之 吉村久仁雄

■新 同 人 (二六年八月〜二七年七月)

大島ともこ(河内長野市) 松本 昌(雲南市)

藤塚 克三(河内長野市) 谷川 憲生(駒郡)

安福 和夫(磯城郡) 藤原 大子(羽曳野市)

足立つな子(三田市) 田付 絹枝(藤井寺市)

川本真理子(東京都) 大坪 一徳(川西市)

磯部 義雄(和歌山市) 楠原 富香(紀の川市)

石田ひろ子(貝塚市) 藤原千恵子(大阪市)

寺本 実(大阪市) 谷口回春子(鳥取市)

棚田 大(鳥取市) 山下 凱柳(鳥取市)
奥澤洋次郎(神戸市) 上田 和宏(神戸市)
宇都満知子(大阪市) 内田志津子(大阪市)

若本 安代(大阪市)

■同人総会出席者 (順不同・七六名)

澤井敏治 井丸昌紀 山崎武彦 山本希久子

初代正彦 大内朝子 北村賢子 大久保真澄

安土理恵 矢倉五月 長浜美籠 平松かすみ

鶴田遠野 伊達郁夫 遠山唯教 今井万紗子

足立 茂 川上大輪 小林わか 久保田千代

水野黒兔 島田誠一 村上玄也 松尾美智代

池田純子 黒田能子 田中章子 森松まつお

山口光久 長井善純 前たもつ 江島谷勝弘

柿花和夫 小島蘭幸 糞谷和郎 片山かずお

河内月子 新家完司 加川靖鬼 岩佐ダン吉

石田隆彦 藤井宏造 内藤憲彦 佐々木満作

松岡 篤 三宅保州 木本朱夏 古今堂蕉子

西出楓楽 榎本舞夢 山野寿之 居谷真理子

吉岡 修 西村哲夫 川端一步 鴨谷瑠美子

市坪武臣 河内天笑 村上直樹 木見谷孝代

安福和夫 栃尾奏子 中村 恵 山岡富美子

榊本宏子 山田耕治 松原寿子 鈴木いさお

坂 裕之 高瀬霜石 米田恭昌 原田すみ子

大田扶美代 飛永ふりこ 中原比呂志

榎本日の出

■おはなし(要旨)

言うだけなら

誰にでも言える話

よりよい川柳界のために

三宅 保州

私は、和歌山という一地方で川柳歴は三十三年間を経て、現在は結社や県協会



三宅保州氏

の代表をはじめ、日川協や川柳塔社の一端、マスコミやカルチャーの選者・講師など十か所等を担い、柳話も数多く依頼されたこと等によるつたない経験から、川柳界の発展を祈念して、レジュメの項目により、言いたい放題にお話しさせていただきます。お許し下さい。

まず、番外として「川柳塔まつり」への祝吟を詠ませていただきました。

せん 川柳に川柳塔という牙城

りゆう 隆々と川柳塔は昇り龍

とう 滔々と川柳塔という大河

それでは本論をタイトル順に述べます。

1 川柳界の問題点

○文芸としての川柳を標榜する

×高齢化、ジュニアやヤングの無関心

×排他的な川柳界

×企業・マスコミ川柳の問題点

2 企業・マスコミ川柳の問題点

×駄洒落、語呂合せ的誤った川柳観

○企業、マスコミのPR力、集句力

3 大会、句会の在り方

ア 誌上大会の長・短所

イ 出席大会の長・短所

ウ 大会、句会の運営の在り方

エ 入選句数の在り方

△全員入選から厳選方式まで

△採用方式か資格方式か

オ 入選のランク付け

△三才五客 △秀句のみ

カ 欠席投句の扱い

×欠席投句拝辞

△欠席者の句は上位に採らない

△欠席者も句本位で上位に採る

キ 選評の是非

ク 代表者選の是非、他社選者の是非

ケ 初心者、ベテラン同じ土俵の是非

4 選者を斬る

ア 問題のある選者

×問題発言

×披講力、飛行方式の欠如

△一回読みか、二回読みか

5 定型の順守

○十七音はルールであるべき

6 柳誌の良し悪し

○会の方針やポリシーがある柳誌

×入選句等のみ記載の柳誌

7 カルチャーの功罪

ア 柳社のカルチャー

イ 行政のカルチャー

ウ マスコミ等のカルチャー

各賞表彰・記念句会

受賞者（敬称略）前列右から、松尾美智代・中井アキ・川端一步・主幹・名誉主幹・宇都満智子・永見心咲・上田ひとみ
後列右から、辻内次根・渡辺富子・居谷真理子・平嶋美智子



第二十一回川柳塔まつりは、爽やかな秋晴れに恵まれた十月三日、ホテル・アウイナ大阪にて開催された。青森から沖繩まで全国各地から同人・誌友、そして多くの川柳仲間三五七名が参加。

句会に先立ち六賞の表彰が行われた。それぞれ受賞者に対して、小島蘭幸主幹から表彰状と記念の盾が授与をされ、会場からは盛大な拍手で祝福。

引き続き、本年度の新同人が紹介され、代表として安福和夫氏が今後の抱負と決意を元氣よく述べられた。

お話は海南市の三宅保州氏。「言うだけに誰にでも言える話」と題して、あらかじめ出席者に配布された詳細なレジメに添って、副題の通り「よりよい川柳界のために」ご自身の信念を歯切れ良く語られ、美声で「黒潮音頭」まで披露。（76頁参照）

句会では佐賀から参加の小学5年の松尾涼さんと小学3年の松尾芽さんの元氣な呼名が会場を沸かせた。（新家完司・記）

月間賞は木本朱夏さん（和歌山市）
（司会―善純・真理子）（協取―奏子・扶美代）
（清記―玄也・富美子・能子・勝弘・まつお）

（撮影―松岡恭子）



兼題「ギヤップ」

森山 盛桜選

話し合う以前にズレている土俵
この人が仲人さんの言う美人
根拠ない自信で胸を張っている
犯人が刑事か悩むお顔です
お笑いの笑いにずれてふと笑う
席ゆずる少年の耳にはピアス
美辞麗句ことわりましたセレモニ
白黒にギヤップどちらもしたたかだ
フレンチを箸でつまんでいるギヤップ
いくつもの握手ギヤップを埋めていく
夏過ぎて秋のギヤップに四苦八苦
ニュートンとわたしにどれ程のギヤップ
現実はそのなんでもではない介護
ギヤップある顔も神様から貰う
太陽と月のギヤップにネオン街
仏像の笑みの後ろの寒い夏
留守電の敬語の音が淋しい日
美しい人が素うどん食べている
一向に溝が埋まらぬ日本海
六甲おろしすぐにギヤップを取り払う
有頂天から転落の日の正気
楽しんでいきます新人とのギヤップ

日出男
廣子
心咲
ちよこ
久江
則彦
ばっは
ヒロ
純子
千代
美千代
芳山
美千代
健柳
將文
流青
めぐみ
和子
弘光
正明
誠一
蘭幸

思い出となったギャップを笑い合う
 絶妙なギャップ保って妻と住む
 雨の日も走り続けた差が光る
 好きだから楽しくなってくるギャップ
 童顔の私の中のSとM
 そのギャップ私を受けて立ちましよう
 プスと言うギャップを売りに漫才師
 スポーツは万能いつも追試験
 絶世の美女が値切っている八百屋
 読書するべし思いつつ飲んでいる
 標準語話すあなたが遠くなる
 縄のれんくくると消えていたギャップ
 男運しめじみ思うこのギャップ
 鬨えと爪愛せよと髪が伸び
 同じ神信じていがみあうヒト科
 百均のレジで財布はルイヴィトン
 気にしないギャップわたしはわたしです
 行間のギャップを埋める酒二合
 弾丸を発する妻はおちよほ口
 新婚の記憶と今にあるギャップ
 涙する許されたとき罰のとき
 ギャップなどきゅつと抱きしめれば埋まる(真)久美子
 時代劇ポップコーンを食べながら
 日本語に翻訳している年代差
 ええもんを召してはるのに化粧下手
 仲間つてほらねギャップも消してゆく

ちかし 認め合う落差平和にしてくれる
 昌紀 生前の豪語と落差ある遺産
 扶美代 命の段差キヤタビラが踏んづける
 能子 佳
 ふみか うつくしい人の意外な箸づかい
 日の出 見かけよりこころふるえておりますの
 かすみ わたくしの目には見えないわたしの根
 一歩 恋談義男と女にはギャップ
 奏子 夕焼けに二人は違う明日想う
 完司 人
 わこ ギャップなど蹴散らす柘榴弾せている
 大輪 地
 瑠美子 道徳を日日塗り替えているギャップ
 真理子 天
 玄也 天と地のギャップ人間のギャップ (森)惠美子
 五月 軸
 月子 見た目より洗濯挟みよく弛む
 智彦



兼題「ゆらり」
 山岡富美子選

末男 生き急ぐことないゆらり秋の道
 高鷲 ゆらゆらの八十路の旅を楽しもう
 紀の治 突然の妻の敬語に揺れた俺
 理恵 芒ほど揺れずに君を信じてる
 朱夏 水鏡ゆらり素顔を写しだす
 霜石 残された時間ゆらりと寛ごう
 朝子 バス降りてから陽炎になりました
 盛夫 聞かぬふりしても揺れてるイヤリング
 浩子 ゆうらりと右へ傾く船にいる
 恵 流されてゆらり浮くのもしんどいね
 新子 字余りがゆらりゆらりと眠らせぬ (古)和子
 あきこ 人間をゆらりとさせる秋の酒
 幸雀 触角のゆらりとおたがいを探す
 奏子 無風にもゆらり野望の火がゆれる
 心咲 ジェラシーという名の私がゆらり
 星雨 揺り椅子のゆらりは昔まで戻る
 留里恵 真夜中の介護ドミノが揺れている
 一粋 閃光にゆらり歴史が覆る
 千代美 真つ直ぐにならぬ秤の針ゆらり
 日枝子 秋風のせいだけじゃ無い揺れている
 榎子 昼の月見て見ぬふりをするゆらり
 盛夫 おまえもかそよと揺れてる枯れすすき
 正和 冷めたモカゆらり疑心顔を出す
 妙 マンボウのゆらりゆらりが理想形
 正和 活断層眠っています我家にも
 妙 枝折れはしないゆうらり生きてゆく

目を閉じて残像ゆらり立ち上げる

名月へゆらり参ろう恋連れて

心棒をオーバーホールしてるとこ

別れ際抱きしめるのは卑怯です

「遊ば」っと小熊ゆらり顔を出す

流燈がゆらり未練を置いていく

震度3でした小さな訃報欄

ゆらりと生きれば人生は長い

母さんがゆらりと顔を出しはった

黒揚羽ゆらり溜息から生まれ

揺れながら散った揺れながら咲いた

残照にゆらり弧影を抱きしめる

陽炎を透かせば風か恋人か

ゆらりゆらゆら不思議な風に誘われて

自負心ゆらり胸に刺ったガラス片

恋の魚ゆらりと夜を滑りでる

人間に化けたらゆらりゆらり秋

天寿全うゆらりと外す吸入器

夕焼けの裏からゆらり明日が来る

ゆらりゆらりお伽草子の絵の中に

だまし絵の中へゆらり母の老い

佳

クラゲにはクラゲの骨があるのです

象さんの歌と一緒に歌ったね

タイムスリップジンベエサメの背に乗って

万華鏡ゆらりこの世を裏返す

啓子

富子

浦久美子

ひとみ

(田)章子

武彦

鯉

蕉子

月子

瑞美子

蘭幸

ヨシエ

寿之

公輔

(森)廣子

くにこ

(真)久美子

哲夫

美代子

浩子

りゅうこ

佳

京

葉子

ますみ

朱夏

秋ざくらも女も乱れるのがお好き

ときどきは洗って干してみるココロ

地

神さまは許しゆらりと立ち去った

天

寂しさがゆらり祭のうしろから

軸

万国旗のゆらぎ難民よ何処へ

富美子

楓

楓

文子

霜石

四捨五入して古株に入れられる

草原の風を知ってる蒙古斑

天井の竹が歴史を重ねてる

安保法古い戦の傷が泣く

(森)惠美子

霜石

文子

楓

楓

文子

霜石

四捨五入して古株に入れられる

草原の風を知ってる蒙古斑

天井の竹が歴史を重ねてる

安保法古い戦の傷が泣く

義理人情四角四面に生きてます

古い順らしいそろそろ覚悟する

ノックする古い私をみな捨てて

懐メロを歌うが軍歌歌わない

古典なお読み手次第で新しい

考えの古さは母の武器だろう

岩割って昔取り出す考古学

喝采のきのこの事は過去のこと

世界遺産古い街道にも活気

デジタルの疲れを癒す紙芝居

タバコの火借りた昭和が去っていく

半世紀前の梅酒で古稀祝う

古くても使える物が捨ててある

九条が古い等とは言わせない

安保法古い戦の傷が泣く

天井の竹が歴史を重ねてる

草原の風を知ってる蒙古斑

四捨五入して古株に入れられる

草原の風を知ってる蒙古斑

天井の竹が歴史を重ねてる

安保法古い戦の傷が泣く

義理人情四角四面に生きてます

古い順らしいそろそろ覚悟する

ノックする古い私をみな捨てて

懐メロを歌うが軍歌歌わない

古典なお読み手次第で新しい

考えの古さは母の武器だろう

岩割って昔取り出す考古学

喝采のきのこの事は過去のこと

世界遺産古い街道にも活気

デジタルの疲れを癒す紙芝居

タバコの火借りた昭和が去っていく

半世紀前の梅酒で古稀祝う

古くても使える物が捨ててある

九条が古い等とは言わせない

(森)廣子

こいし

芳山

留里恵

弘子

雨奇

(上)紀子

(真)久美子

喜八郎

鈍甲

美弥子

良一

賀世子

修

千賀子

弘一

黒兎

末男

秀穂

りゅうこ

浩子

碧

(楠)章子

(浦)久美子

(谷)久美子

いわゑ



兼題「古い」

川端 一步選

古民家に宿る日本人の粹

キヨミ
（森）恵美子

兼題「宝」

いくさを嫌う使い古した手足
古文書の著者も説者も宇宙人
良妻賢母淑女は死語にさせません
人間が古くて義理が欠かせない
お前とも古い付き合いだねカルテ
古くなくても妻を捨ててはいけません
古いシャツ脱ぎすて熱い応援歌
パソコンが何だと父の楷書体
町内に一〇〇年御座す地蔵尊
古き佳き不戦の国に住む誇り
古いもの新たな風を生むベース
どっしりと構えておれと言う古木



古今堂蕉子選

子に代わり古い首なら差し上げる
手書き主義古い奴だと言われても
古文書が語る敗者に陽が当たる
婆さんの知恵はなかなか斬新だ
ほろほろになろうと叛旗ひるまない

柳友五百これが私の宝もの
幸せなダイヤ妃の肌に触れ
自然との共存吸って吐く宝
ぬす人も手が出ぬ健康という宝
何もせず何も無い今日はお宝
子は宝憶良も嘆く少子国
蜂の巣の中の宝が狙われる
六道湖の宝を皆さんに配る
お宝の壺を夜な夜な覗いてる
贋作を上手に褒める鑑定士

いさお
洋々
智史
文代
くにこ
鈍甲
左余
芳山
天翔
靖鬼

勤勉の汗が完済したローン
光らせたたくて研いています感受性
最後の恋耐火金庫に入れて鍵
本当の値打ち知らないから家宝
お宝は自宅にしている大阪城
宝ジェンヌ夢見た小町だった母
宝石を選ぶ目をしてきゅうり買う
御堂筋にもうすぐ降ってくる宝
思い出のあなたを時々巻き戻す
聞き上手宝と思う人がいる
代々のお宝槍の大欠伸
別れ道宝を置いてきた未練
金食うし手がかかってても子は宝
どなたかに話すと消えそうな宝
掌中の珠よ平々凡々よ
妊婦さんだ思わず席を譲ってる
ニッポンの宝をYOUに教えられ
宝石も遊びも好きなわたし魔女
時間という宝をいつも無駄にする
宝石箱たんと友達入れてある
子宝に恵まれ家族一ダース
たらればを乗せ宙を舞う宝くじ
失った光に代わる耳と指
一芸に重宝がられ嫌がられ
経験は誰にもとられない宝
重宝な口で褒めたりけなしたり
君と見る朝陽あなたと見る夕陽

茂
美智代
由一
かずお
宏子
楓葉
（森）廣子
ますみ
千代美
ダン吉
昌枝
美弥子
義博
見清
霜石
賀世子
みつこ
弥生
桂子
一瑤
壽峰
（野）鷹
英夫
宣子
美津子
知栄
めぐみ

住

宏子

家宝というものをトイレで考える
怒ってる妻は格別美しい
わが宝没句の山をなお高く
悪友は宝刺激をたんとくれ
米つぶの宿す光りを子に遺す
あら炊きの鯛の目玉を宝とも
お宝の木刀で妻斬りかかる
立ち読みの街の本屋は知の宝庫
五十年同じ指輪の葉箱

（森）恵美子

正子
堅坊
明子
流青
完次
典呼

賀世子
みつこ
弥生
桂子
一瑤
壽峰
（野）鷹
英夫
宣子
美津子
知栄
めぐみ

人

小雪

お宝の壺を夜な夜な覗いてる
贋作を上手に褒める鑑定士
家宝というものをトイレで考える
怒ってる妻は格別美しい
わが宝没句の山をなお高く
悪友は宝刺激をたんとくれ
米つぶの宿す光りを子に遺す
あら炊きの鯛の目玉を宝とも
お宝の木刀で妻斬りかかる
立ち読みの街の本屋は知の宝庫
五十年同じ指輪の葉箱

（周）真理子

千賀子
典呼
完次
流青
明子
堅坊

賀世子
みつこ
弥生
桂子
一瑤
壽峰
（野）鷹
英夫
宣子
美津子
知栄
めぐみ

地

小恵

お宝の壺を夜な夜な覗いてる
贋作を上手に褒める鑑定士
家宝というものをトイレで考える
怒ってる妻は格別美しい
わが宝没句の山をなお高く
悪友は宝刺激をたんとくれ
米つぶの宿す光りを子に遺す
あら炊きの鯛の目玉を宝とも
お宝の木刀で妻斬りかかる
立ち読みの街の本屋は知の宝庫
五十年同じ指輪の葉箱

（周）真理子

千賀子
典呼
完次
流青
明子
堅坊

賀世子
みつこ
弥生
桂子
一瑤
壽峰
（野）鷹
英夫
宣子
美津子
知栄
めぐみ

天

克己

お宝の壺を夜な夜な覗いてる
贋作を上手に褒める鑑定士
家宝というものをトイレで考える
怒ってる妻は格別美しい
わが宝没句の山をなお高く
悪友は宝刺激をたんとくれ
米つぶの宿す光りを子に遺す
あら炊きの鯛の目玉を宝とも
お宝の木刀で妻斬りかかる
立ち読みの街の本屋は知の宝庫
五十年同じ指輪の葉箱

（周）真理子

千賀子
典呼
完次
流青
明子
堅坊

賀世子
みつこ
弥生
桂子
一瑤
壽峰
（野）鷹
英夫
宣子
美津子
知栄
めぐみ

軸

克己

お宝の壺を夜な夜な覗いてる
贋作を上手に褒める鑑定士
家宝というものをトイレで考える
怒ってる妻は格別美しい
わが宝没句の山をなお高く
悪友は宝刺激をたんとくれ
米つぶの宿す光りを子に遺す
あら炊きの鯛の目玉を宝とも
お宝の木刀で妻斬りかかる
立ち読みの街の本屋は知の宝庫
五十年同じ指輪の葉箱

（周）真理子

千賀子
典呼
完次
流青
明子
堅坊

賀世子
みつこ
弥生
桂子
一瑤
壽峰
（野）鷹
英夫
宣子
美津子
知栄
めぐみ

一歩引くそんな言葉が好きやねん

一歩

お宝の壺を夜な夜な覗いてる
贋作を上手に褒める鑑定士
家宝というものをトイレで考える
怒ってる妻は格別美しい
わが宝没句の山をなお高く
悪友は宝刺激をたんとくれ
米つぶの宿す光りを子に遺す
あら炊きの鯛の目玉を宝とも
お宝の木刀で妻斬りかかる
立ち読みの街の本屋は知の宝庫
五十年同じ指輪の葉箱

（周）真理子

千賀子
典呼
完次
流青
明子
堅坊

賀世子
みつこ
弥生
桂子
一瑤
壽峰
（野）鷹
英夫
宣子
美津子
知栄
めぐみ

宝石は偽物私は本物
すぐ傍の宝物には気付かず

すみ子
裕之

消されたがまた火があがる都構想
理由あって妻には頭あがらない
成立はしても違憲は違憲です

隆彦
珠子

テンションを上げてマツタケご飯の日
舞い上がる私制するの私
平均寿命あげてチューブにつながる

(平井)美智子
ちかし
綾子

命の匂いつか宝の匂を目指す
森は宝で蟋蟀が鳴く百舌が鳴く
わたくしの真水に触れてくる宝

(上)紀子
蘭幸

どっこいしょと言えば少しは上がる腰
解からんでも手だけ挙げとく参観日
消費税高くなっても酒は飲む
まつりと聞くだけで血圧があがる

保州
茂

もう少しあがると星に近くなる
双六のあがりばつぽつ見えてきた
反戦歌バストヒップをあげながら

(谷)久美子
久江
アキ

抱きしめる距離に抱きしめられる人
GPSつけられ探しに行く宝

あきこ
久美子

消費税高くなっても酒は飲む
まつりと聞くだけで血圧があがる
消費税上がつて進むダイエツト

雨奇
よしみ

愚痴は止せもうじきご飯炊きあがる
モンタンの枯葉にごさる濡れ落葉
双六のトントンであがりた

(森)恵美子
英夫

死ぬ時はみんな返していく宝

新一

雨あがるおまけの虹にいやされる
天国の階段上がる準備する
エビ天の形に海老はなつて行く

宏造
更紗

震えあがる事件に慣れてくる恐さ
ジャンケンに負けて苦手な木に登る
煮ころがしぐらいで婆の株あがる

無限
すみえ

宝から平易なものになって行く

孔美子

よく滑る口でうだつが上がらない
後期高齢小さく狼煙上げている
双六のあがり鬼が待っていた

楓楽
朱夏

火葬場へ煙があがるまでの嘘
地下鉄をあがるとモンローに出会う
あがるはずの僕はじわじわさがった

正人
耕治

失敗を宝に変えるのはあなた

義昭

足と相談して階段をあがる
しょうもない火花があがる会議室
人生のアップダウンを楽しまん

善純
大輪

さあ出番人の字を呑むジュリエット
告白の前うどんが茹であがる

昌紀
良彦

五粒の真珠これから花開く

兼題「あがる」

まああがれつもの話がたんとある
転んでも空を味方に立ちあがる
Uターン酒の手だけはあげて来た

能子
克己

日の丸があがると日本人になる
あがったら何があるのか縄梯子
しゆるしゆるポなんと平和な遠花火

芳光
瑠美子

メイドインチャイナで私できあがる
近すぎてまだハルカスにあがれない
風呂上あがり彼女の顔に肩がない

大子
妙子

明日には必ず道が出来上がる
目があつて殺し文句をみな忘れ
酷使され無言ですぬるバッテリー

博子
哲男

駆け込むと便器のフタがあがる国
クレオパトラの前では誰でもあがる

幸雀
義



高瀬 霜石選

消費税あがり牛肉鶏肉に
しょうひせい上がるとママがあせるんだ
敬子

芽
銭湯のあがる合図は神田川

千休
満子

天の階段上がる準備する
エビ天の形に海老はなつて行く
よく滑る口でうだつが上がらない

義

人
ウハウハの未公開株です私

京

鎮守の森へ母のこと父のこと
人間の森で迷子になっている
森から海へながーい長いラブレター

千代美
美羽

森を出て魔法がとけた小人たち
子は五人小さな森になる家族
一本の木となり森を守り抜く

(平) 久子
美智子
ちかし

地
成績は上がった後がこわいんだ

涼

アナログの森で命を遊ばせる
木洩れ日の森で五感を遊ばせる
パワースポット図書館に森がある

一瑤
紀の治

常識を太古の森に笑われる
鳥も樹も醒め森の精まだ眠し
母さんは森の奥から現われる

大輪
道夫
瑠美子

天
急がすなよ僕の人生はこれから

賀世子

星月夜お伽の森が深くなる
森が病んでいると熊が告げにくる
森に足向けては寝られない魚

美智子
希久子

高速が走りフクロウ眠れない
白神の森へ繋がる蒙古斑
鳥は歌手風はオーケストラの森

耕治
真理子
霜石

軸
初恋じゃないけど初恋の気分

賀世子

鎮守の森角に億ション建つうわさ
母に逢いたい昭和の森へもぐり込む
森の四季詩人をひとり生みました

宏子
航太郎

鳥は歌手風はオーケストラの森
森の匂い獣の匂い遠くなる
悲しみを越えて童話の森になる

見清
小雪
星雨

兼題「森」

小島 蘭幸選



路郎薫風おわす十七音の森

楓 楽

森抜けてやつと大人になりました
祖父の樹も父の樹もある僕の森
ウエルカム森に「どこでもドア」がある

(仲) 美千代
芳光

人の住む森だ光と陰がある
妖精と微睡む森のハンモック
森の奥神話が生きている叢祠

富美子
順啓
ひろ子

荒れた森神が出たきり戻らない
森を出たヒト科が悪さばかりする
森からの恵みで海は生きている

栄 子
ダン吉

木洩れ日を浴びて亡父と森に居る
秋だなあ森から届くオノマトペ
森からの風が勇気を呉れました

弘一
利子

メルヘンの森からコウノトリ翔んだ
深い森抜けると喜寿が過ぎていた

いさお
武彦

言の葉の森で優しい風に会う
森のことならオランウータンに聞く
文学の森をさ迷い抜け出せぬ

照 子
久美子

森の奥深くで虹を産みました
森抜けたとき天空の散歩道
森を出た男は海を見てきたか

美 籠
ますみ

神の森風と遊んで木の実降る
くにご

よしみ

泣きに行く母の匂いのする森へ
リフレッシュ森のシャワーを浴びて
次世代へ鎮守の森を守り抜く

理 恵
千代

十月の森にホルンを吹く男
森のまま父は遺言書を書いた
受胎告知森を歩いてみませんか

敏子
真由

ペアルック森を出たのはひとりだけ

次根

深閑の森から神の息づかい
一人来て森の木霊に癒される
子を宿すなんてやさしい森だろう

正彦
壽峰

受胎告知森を歩いてみませんか
ふるさとの休耕田を森にする

心咲
典呼

古書店の隅に昭和の深い森

木本 朱夏

一人来て森の木霊に癒される
子を宿すなんてやさしい森だろう

(吉) 知 栄

ふるさとの休耕田を森にする

完 司

豊かな森だ果箱には雛がいる

軸

子を宿すなんてやさしい森だろう

知 栄

豊かな森だ果箱には雛がいる

完 司

豊かな森だ果箱には雛がいる

軸

参加者の感想

懇親宴の楽しさ

加藤 鯉（たかね・静岡）

昨年「第二十回川柳塔まつり」に参加して、その参加人数の多さもさりながら粒揃いの選者群と入選句のクオリティの高さ、そして何といたっても懇親宴の楽しさにすっかり魅了された。そして今年是我が心の兄貴・高瀬霜石さんが選者になっている。これは何をさておいても参加せねばなるまい。今回も川柳塔まつりは大盛況、ホテルアウイーナのきらびやかな金剛の間は三五七名の川柳愛好家で埋めつくされ席が足りなくなるほどだった。もちろん今年も大満足。また来年来ます。

感動のまつり

久保田千代（常任理事・兵庫）

秋晴れに恵まれ、第二十一回川柳塔まつりが開催された。私は八度目の参加になる。思い返せば薫風先生から「出なさい」と言われての参加が最初だった。

「まつり」の会場は、月例会の句会と同じなのに緊張する雰囲気は、何年経っても変わらない。遠方からのお客さまもお迎えしての賑やかなロビー風景も毎年目

にして微笑ましい。

午前中の総会、続いての表彰式そしてお待ちかねの句会へと順調に進行して、今や「まつり」の名物となりつつある吉野ヶ里から参加の涼ちゃん、芽ちゃんの元気な呼名も聞かれ、川柳塔の未来への安心を感じたものだ。あがりたいと思う。懇親宴での柳友は、みなゆつたりと気分よく他社の先輩諸氏の方々と親しくお話させて頂き、幸せな一時を過ごす。

お開き前の庄巻は、全員が手を取り会場一杯に輪になって、これまた薫風先生の愛唱歌の「星影のワルツ」を歌って来年への再会を約束して散会となる。

今年も幸せな絵となり感動のさようならを言うときが来た。

皆さまありがとうございます。
まつりに参加して

山根 妙子（同人・大阪）

川柳塔まつりの佳き日に、「塔まつりに参加しての感想を」と用紙を預りました。冒頭、柳歴三十数年の三宅保州様の川柳の楽しさの中にチクリも交えたお話と、音頭まで歌って下さり、脳と心がすすむと繋がり、各句の披露に！時が過ぎました。参加もまだ三回目、歩の端っこです。懇親会ではお国訛りや懐かしい「鐘の

鳴る丘」の合唱に加わり時が戻りました。四年前失意の私に「川柳しませんか」と声かけ下さった方に深謝しながら来年もと、生きる意欲湧く八十二歳の秋でした。

川柳への活力

多久和敬子（同人・島根）

貸切バスで、早朝五時に、出雲市駅を出発。途中松江、米子で乗車あり総勢二十五人で第二十一回川柳塔まつりに出席。全国から三五〇名近くの柳人が参集し、会場は熱気満々でした。各賞受賞者の晴れのお姿を拝見し感動致しました。三宅保州先生の貴重なご講話の後、披露が始まりました。全没覚悟と万が一の期待が入り混じっての一時でした。が一句だけ呼名する事が出来、何よりの土産になりました。川柳への活力をいただき、有意義な一日に感謝し、秋の暮れゆく中帰途につきました。

句に圧倒されました

森山 文切（誌友・沖縄）

今回初めて川柳塔まつりに参加しました。早めに会場に到着しましたが、席を探すのに苦労するほどの盛会ぶりです。ま

ず人の多さに驚きました。
次に三宅保州さんのお話。今から披露される選者を前にして「選者はどうある

べきか」熱くお話しされ、選者の方々は
プレッシャーになったのではないでしょ
うか。歌も印象的でした。

そして何より句に圧倒されました。レ
ベルが高く私は全没でした。悔しさを糧
に来年リベンジしたいと思います。

感動体験

川本真理子（同人・東京）

二年前より、月に一度東京から川柳塔
へ投句するというかたちで川柳に触れて
まいりました。今回の川柳塔まつりへの
参加は三回目の句会体験です。いつも誌
上でいろいろなすばらしい句を読ませて
いただき、最近はお名前と作風が何とな
く重なるようになってきておりました。
句会へ参加することでその皆様のお顔と
生の声に直接触れることができ、とても
楽しいひと時を過ごさせていただきまし
た。川柳塔の届くのがますます楽しみです
なりそうです。

贅沢な時間

中川ひろ介（誌友・大阪）

定年後父の遺伝とか糖尿にかかり、始
めたのがウォーキングと川柳、丁度半年
目、今が一番楽しいころだと思えます。
今回初めて川柳塔まつりに出席させて頂
き先輩方の作品から学ぶところが大きく、

改めて自分の未熟さを知らされました。
全没も痛し痒しの大盛会、私にとって贅
沢な時間でした。切っ掛けは川柳同人で
消防士だった父の影響だと思えます。火
を消して公僕の父遺愛の句、老いらくの
恋よく枯れて燃えやすい、心の火燃やす
秘密の夢がある、川柳と父母に感謝です。

クラクラ ワクワク

菊池 京（青い実の会・青森）

川柳塔まつり参加の夢がようやく叶い
ました。霜石親分の応援をと、子分気取
りの3名（めぐみ・良彦・京）で参加し
ましたが、青森ではまず経験しない三百
人以上の大会に、いきなりクラクラ。し
かし、皆さんの温かいもてなしで私た
ちもすぐ馴染み、ワクワク気分で大会に
参加していました。大会場で呼名できた
感動は忘れません。懇親宴では本領発揮
で自称「懐メロの歌姫」と化しては多く
の柳人の皆様方と友好を深めさせていた
だきました。本当に楽しかったです。

懇親宴

句会の余韻を引きずったまま一〇九名
の参加者は、三階葛城の間に移り懇親宴

が開催された。司会進行は、長井善純・
居谷真理子。新家完司理事長の「これか
らが本番」の挨拶に続き、番傘川柳本社
主幹・田中新一氏の乾杯の発声で、和や
かで且つ、賑やかな宴が始まった。

程なく上杉謙信の扮装で同人・丹後屋
肇氏が颯爽と登場。詩吟と剣舞を披露、
旧交を温め合う会場の雰囲気は更に盛り
あがった。

恒例のカラオケ大会は日川協事務局長・
本田智彦氏の「さざんかの宿」、番傘副幹
事長の森中恵美子さんの「雪椿」を皮切
りに、自慢の喉が次々と披露された。

とりわけ岡山県笠岡市から参加の誌友・
藤井智史氏をはじめとする若い歌声に、
これからの川柳塔を背負って立つ力強さ
が頼もしく、大いに会場を湧かせた。

西出楓架相談役の閉会の挨拶の後は、
「星影のワルツ」。完司理事長のリードの
もと、参加者全員が手をつなぎ、大きな
輪になって大合唱をするという、川柳塔
恒例のシメで最高に盛り上がる時間を共
有することができた。

和気藹藹の中、来年の再会を約して懇
親宴はお開きとなった。

（大久保眞澄）

懇親宴



乾杯の音頭をとる
田中新一氏



楽しく合唱される皆さん



丹後屋
肇氏



交流を深め合う
ひととき



全員で星影のワルツを合唱

川柳大会参加者

総数357名
(順不同・敬称略)

青森	菊池 京 高瀬霜石	川端一步 川端六点 北出北朗 榎本日の出	西澤司郎 西出楓楽 能勢良子 鈴木いさお
茨城	嶋本 喬	北村賢子 吉川哲矢 久世高鷲 大島美智代	原 洋志 肥山一文 平賀国和 高木世紀子
東京	伊藤良彦 川本真理子	栗田久子 熊代菜月 黒岩靖博 太田扶美代	藤井則彦 藤井正雄 藤田武人 高田美代子
藤田めぐみ 山田こいし		栗原道夫 小林わこ 酒井紀華 小川賀世子	藤塚克三 藤原 昭 藤原大子 田中美弥子
岐阜	鶴留百合	坂 裕之 坂上淳司 坂本星雨 片山かずお	前たもつ 前原正美 増田隆昭 津守なぎさ
静岡	加藤 颯	櫻田秀夫 佐藤忠昭 澤井敏治 鴨谷瑠美子	升成 好 松浦英夫 松岡 篤 出口セツ子
愛知	富田末男 藤田千休 金子美千代	沢田和子 島田誠一 初代正彦 岸井ふさゑ	水野黒兎 都 武志 三村 舞 徳山みつこ
京都	櫻崎篤子 高島啓子 今井万紗子	助川和美 杉本義昭 鈴木栄子 木見谷孝代	宮西弥生 村上玄也 村上直樹 中川ひろ介
津田照子 都倉求芽 西村益子 藤井文代		関よしみ 田付絹枝 伊達郁夫 久保田清美	森 茜 森 廣子 矢倉五月 中里はこべ
前中知栄 榎本宏子 三宅満子 山田葉子		田中新一 田中朋子 田中廣子 桑田ゆきの	安田忠子 山根妙子 山野寿之 原田すみ子
大阪	油谷克己 荒川鈍甲 赤松ますみ	谷久美子 谷口東風 谷口 義 古今堂蕉子	山本 進 雪本珠子 吉岡 修 平井美智子
有藤 昇 池田純子 池 森子 石田ひろ子		丹後屋肇 次井義泰 辻村ヒロ 小山恵美子	吉木栄子 米澤俣子 若本安代 平嶋美智子
井澤壽峰 井丸昌紀 岩田明子 磯島福貴子		津守柳伸 鶴田遠野 寺井弘子 齋藤さくら	弘津秋の子 平松かずみ 藤原千恵子
上嶋幸雀 上山堅坊 榎本舞夢 指宿千枝子		寺川弘一 寺本 実 遠山唯教 阪井美世子	松尾美智代 松本あや子 宮崎シマ子
海老池洋 江見見清 大川桃花 岩佐ダン吉		栃尾奏子 内藤憲彦 内藤光枝 佐々木満作	森中恵美子 森松まつお 森吉留里恵
大堀正明 荻野浩子 柿花和夫 内田志津子		中井アキ 長井善純 中岡 妙 柴本はつは	山岡富美子 山本加お里 山本希久子
笠嶋恵美 梶原弘光 加島由一 宇都満知子		中川隆充 永井玲子 中園 清 嶋澤喜八郎	吉道あかね 吉道航太郎 吉村久仁雄
賀部 博 河内月子 河内天笑 江島谷勝弘		中南杏子 中村 恵 西川更紗 島田千鶴子	あまのとーな 宇都宮ちづる 美馬りゅうこ
			兵庫 青木公輔 足立 茂 足立つな子
			石原歳子 市坪武臣 上田和宏 上田ひとみ

梅澤盛夫 大石希世 長川哲夫 上垣キヨミ 上田紀子 宇野幹子 川上大輪 土屋起世子

大坪一徳 加川靖鬼 片山 忠 太田としお 川上智三 喜田准一 木本朱夏 藤原ほのか

亀岡哲子 金川宣子 北野哲男 奥澤洋次郎 楠原富香 楠見章子 小谷小雪 古久保和子

黒田能子 糀谷和郎 小山紀乃 緒方美津子 武本 碧 辻内次根 松原寿子 三宅保州

梶元世津 白川淑子 多田雅尚 奥田みつ子 森口美羽 たむらあきこ

田中章子 富永恭子 中嶋憲三 久保田千代

長島敏子 長浜美籠 能勢利子 清水久美子 竹口清信 田中天翔 棚田 大 坂本とも湖

萩原典呼 福田好文 房安志激 松下ひろ志 中村金祥 夏目一粹 成田雨奇 竹村紀の治

藤井宏造 堀 正和 松井文香 竹山千賀子 西村久江 平尾正人 牧野芳光 谷口回春子

丸山孔一 村岡義博 村田 博 中岡千代美 森山 鈴 森山盛桜 山下凱柳 萩原みゆき

森本高明 山口光久 山崎武彦 七反田順子 両川洋々 両川無限 春木圭一郎

山田耕治 西口いわえ 東内美智子 政岡日枝子 吉田孔美子

山口ヨシエ

【奈 良】 安土理恵 安福和夫 居谷真理子 今岡健柳 岸 桂子 新家完司 菅田かつ子

阿部紀子 大内朝子 大楠紀子 大久保真澄 銭山昌枝 田中紀恵 福間左余 多久和敬子

大西將文 加門萌子 笹倉良一 小林すみえ 古浦青帆 松田眞弓 松本 昌 多久和博子

谷川 憲 菱木 誠 坊農柳弘 澤山よう子 松本文子 渡部好榮 竹治ちかし

牧浦完次 松本柊子 山下純子 高田まさじ 仲田美千代 松本はるみ 松本知恵子

山田順啓 山本昌代 米田恭昌 飛永ふりこ 森ふみか 目賀和子 くどうちよこ

吉野成子 渡辺富子 中原比呂志 森ふみか 目賀和子 くどうちよこ

【高 知】 橋田綾子 橋田秀穂

【福 岡】 梅崎流青

【佐 賀】 松尾 涼 松尾 芽 真島久美子

【沖 縄】 森山文切

御芳志お礼 (敬称略・順不同)

田中新一 小島蘭幸 新家完司 古今堂蕉子

川上大輪 西出楓楽 本田智彦 鴨谷瑠美子

森山盛桜 河内月子 川端一步 山岡富美子

前たもつ 鶴田遠野 水野黒兎 山本希久子

村上玄也 村上直樹 山口光久 久保田千代

島田誠一 黒田能子 藤井宏造 居谷真理子

高瀬霜石 柿花和夫 木本朱夏 江島谷勝弘

梶元世津 山崎武彦 坂 裕之 鈴木いさお

松原寿子 藤田武人 栃尾奏子 片山かずお

足立 茂 三宅保州 榑本宏子 西口いわゑ

長浜美籠 小澤幸泉 宇都満知子

佐々木満作 森松まつお 番傘川柳本社

川柳ふうもん吟社 米子きやらぼく川柳会

川柳塔鹿野みか月 京都塔の会 川柳塔わかやま吟社 美研アート 匿名

民族の詩歌 (41)

方言のうた③大阪弁

三好 專平

お前知ってるか。なんや。こんな詩や。詩てなんや。あほか。わからんかったらだまってえ。ほな言うで、うちのこと、あの人きつと分かつてると思うねん／うち、ほんまに好きやねん、あの人のこと／なんにもいうてへん／なんにも聞いてへん／でも、分かるねん／あの人は、うち以上に、／好きな人が、居てはるねん／せやから、うちには冷たいねん／かめへんねん、うちは．．／たとえ、うちは利用されても／あの人のこと好きになっただけで／幸せやねん、どや、ええ詩やろ。泣けてくるやんけ。どこの言葉や。言わずとされた河内です。菊水丸、待ってました。話変わるけど、川柳知っ

てるか。知らないでか、それやったらだれでも知ってるがな。古池や蛙飛びこむ水の音。どあほ。それは俳句や。嗚呼、玉杯に花受けて、や。うそこけ、それはなあなんぼあほでも知ってるで。軍歌じゃ。ちやう。一高寮歌、おほえとけ。わしはトウタイ出じゃ馬鹿たれ。何処のトウタイや。嗚呼、解放の旗高く。モンテンルの夜は更けて。勝つてくるぞと勇ましく。お前と俺とは同期の桜。バンザイ三唱。十年もたつというのにまだだれも帰らないのだ。おいおい、川柳はどないしたんや。ころっと忘れてもうてた。五輪やてうちは買もん二輪やで／よめはんは痛いところに足とどく。なんでやねん。無粋なこと聞くやつあるかいな。食べなはれそれがオカンのおもてなし、よいよい。踊ってる場合か。わてほんまによくわんわ。古いなあ。あかんか、おもしろいやんか。鯛に平目にカツオにマグロにブリにサバ／鳥貝赤貝タコにイカ／海老にアナゴにキスにシャコ、ああしんど。おま

えなに言うてんねん。川柳や。どついたろか。もつと真面目にせんかい。もいっぺん聞くけどな、足や。目えから火出すぞ。鱗ちやうのか。往生しまつせ。真似すんな。スカタンなやつちや。昔屋のオボツチャマ。笑うて帰れよ。もうすぐ死ぬんやからのう。だれに言うてるねん。地球の半分自分のもんや言うてるおばちゃんもおるけど。原爆200万発、こりゃさ。あれこりゃ。どっこいせ。金水敏ちゅう阪大のエラーい先生がこのごろ大阪弁はちほち講座いうのをやってる。知らんがな。大阪弁はなんやしやべる人で言葉がステレオタイプなんやて。どんなステレオや。ヤーさんはヤーさんの言葉があるやろ。魚屋には魚屋の、教師には教師の。アタリキシヤリキ尻の穴ブリキ。マイド言うたら商売人や。カンニン言うたらオカマか。ナンマイダ言うたら坊主。オレオレ言うたら詐欺師か。うまいことできてるねんなあ。早い話、お前は何者じゃ。忍者。ボケ。しつかりせよと抱き起こし。なんとかならんか。

愛染帖

新家 完司選

(投句) 276名

松山市 神野きつこ
家族には内緒イチジク食へている

(評) 大好きなイチジク。一パック五個入りを買って、あと二個も残っている。堅実な主婦のチョッと気が引けるささやかな内緒。

弘前市 吉川ひとし
車窓から見える物みな欲しくなる

(評) 目の前を飛び去る果樹園 田圃、邸宅 高級車、ビル等々、欲しいものばかり。人の欲に限りはないが、これはまた壮大!

佐賀県 真島久美子
本物はファンデーションのずっと下

(評) 化粧とは文字通り「装って化ける」と。さて、「ずっと下」の本物はどのようなものか? 見たいような見たくないような。

岡山県 紫 しめの
赤飯に自慢話もついて来る

(評) 祝い事につきものの赤飯。ゆかしい習わしの一つだが、自慢話が付いて来るのが難点。愛想よく相槌を打つのも浮世の義理か。

羽曳野市 吉村久仁雄
終活はゆつたりお茶を飲んでから

(評) 後顧の憂いが無いように、身辺を片付けておく終活。だが、終着駅はまだまだ先。ゆつくり「このひととき」を楽しむ。

海南市 堂上 泰女
断捨離へ通販が来て邪魔をする

(評) 終着駅に向かつて、身の周りを小さくぱりしておこうと思っているのに、ついテレビショッピングの名調子に乗せられて…。

交野市 田岡 久幸
恬として不義理と恥の山に生く

(評) パーフエクトでないのはお互いさま。法律を守り、他人の暮らしに迷惑をかけたらない限り、少々の事は「蛙の面に小便」だ。

和歌山市 古久保和子
女子会も敬老会も参加する

(評) 敬老会には「何歳以上」という決まりがあるが女子会は自由。平均年齢70歳でも女子会。どこにでも顔を出して元気溼刺!

神戸市 上田 和宏
百までの予定を立てる誕生日

(評) 昔は夢だった百歳だが、現在の我が国には六万人もいる。予定通り進むには飲食の節制と軽い運動、そして川柳でボケ防止。

橿原市 居谷真理子
迷い子を監視カメラは見えてだけ

(評) 殺された中学生二人。明け方までさ迷

う姿をカメラは写していた。不審者を認識して通報するシステムの開発は至難か?

寝屋川市 森 茜
虹が二重に全没の道帰る

へりくつの尻尾はトーン垂れている
頑張つて食べるふたりで一人前

香南市 桑名 孝雄
湯上りを待つ塗り薬貼り薬

いくつまでやる気ですかと問う脚立
猫の鈴いつも私に持つて来る

瀬戸内市 宮宅比佐恵
女です見つめられると灯がともる

長野県 丸山 健三
五輪とはむずかしいもの蜘蛛の糸

鳩だけが迎えてくれる寺がある
ボケましたなどと上手にうつつやられ

鳥取市 倉益 一瑤
ひとりなら多分作らぬ朝ごはん

青森県 松山 芳生
かあちゃんがきれいに見えた盆踊り

人間も猿も呆れている猛暑
普屋市 黒田 能子

マタニティーのお腹は遠慮なくさわる
耳遠いぐらい我慢をいたします

松江市 石橋 芳山
チカチカのネオンの奥はミステリー

貧乏の重さよ天井が低い

唐津市 坂本 蜂朗

白蟻と共に引き継ぐ親の家

鳥取県 齊尾くにこ

カシヤカシヤともどき料理はお手のもの

京都市 都倉 求芽

血管のところどころにバス停が

八幡市 今井万紗子

純情は遙か宇宙に捨ててきた

安来市 原 煩惱児

野菜買って来て枕辺にそのまんま

青森市 守田 啓子

お見せしましょう群青になるところを

出雲市 竹治ちかし

億の金動かす他人の子の話

堺市 矢倉 五月

自分にも嘘をつきつき生きている

和泉市 横山 捷也

財産も借金もなく大あくび

風邪癒えた友が碁盤をほめに来る

鳥取市 前田 楓花

お隣の柿がそろそろ熟れる頃

幸せな人はホントによく笑う

弘前市 高瀬 霜石

飲んで騒いで騒いで飲んで中華そば

おじさんはねなどと言ってるおじいさん

紀の川市 北山 絹子

おめでたい話の中に猫もいる

葬式の話で終わるクラス会

高槻市 安田 忠子

家に居ると寝てしまうので外に出る

宇部市 平田 実男

遺産分け以来メールが来なくなり

三田市 上田ひとみ

夏ヤセもせずありがたく肥ゆる秋

鳥取県 竹信 照彦

キズ物の梨が美味しい貰い物

神戸市 富永 恭子

スクワットしながら続く親稼業

三原市 鴨田 昭紀

にんげんの海で苦しい立ち泳ぎ

桜井市 安土 理恵

わざと乗り越し帰宅時間を遅らせる

豊橋市 藤田 千休

偏頭痛退職すれば自然治癒

岡山県 田中 恵

元氣だよ貧乏神に感謝する

お月さまが大丈夫かとおついで来る

倉吉市 牧野 芳光

目に触れるところに武者小路を置く

谷の数ほど輪唱をするチャイム

大阪市 栃尾 奏子

ときめきを探し夫に服を買う

恋心ではなくただの不眠症

枚方市 寺川 弘一

寂しい町だ防犯カメラ見当たらず

日記帳楷書で書いた一ページ

和歌山市 武本 碧

抑止力効かずぶりぶり顔に出る

煩惱へ使い果たしたエネルギー

三田市 北野 哲男

極楽はスイッチバックで上るとこ

地獄とは垂直落下するところ

貝塚市 吉道あかね

資格取るのにやはりお金がいる仕組み

イントロで波長が合ってから仲間

鳥取市 奥田 由美

そよ風が恋の扉も開く秋

ノイローゼほどに悩んだ一日惚れ

熊本市 杉野 羅天

美人見る確かに出来る目の保養

宝くじ当たればすぐに離婚する

大阪市 榎本日の出

残り蚊のテロ二の腕へ急降下

河内長野市 村上 直樹

なならない早とちり癖いさみ足

大阪府 古今堂蕉子

会うとすぐ今日の歩数を見せたがり

豊中市 藤井 則彦

鳥取市 福西 茶子

月一度のんべんだらりしたいもの

弘前市 福士 慕情

ベルト穴ひとつ縮めるのも難儀

大阪市 佐藤 忠昭

山陰線速く走るな旅情飛ぶ

池田市 上山 堅坊
ぼちぼちを忘れて走る趣味の道

岸和田市 雪本 珠子
惚け防止作句しながらウォーキング

米子市 成田 雨奇
納得の句を得て今日はいい日だな

枚方市 丹後屋 肇
青息吐息一鞭当てる締切日

岡山県 池田たか子
指ばかり折って締切りに合わず

西宮市 片山 忠
四ヶ月川柳離れ何も得ず

米子市 後藤美恵子
文学で散らす火花はおもしろい

大阪市 高杉 力
甲子園レフトスタンド独り酒

笠岡市 藤井 智史
今日の汗きつと昨日の酒でしょう

三田市 堀 正和
天国へお神酒届いておりますか

札幌市 三浦 強一
酒の出る会は欠かしたことがない

尼崎市 山田 耕治
一合でひたいに艶が出てきます

紀の川市 辻内 次根
深刻という字を消してくれる酒

小野市 藤原 泰宏
妻ビール俺もお供で酒二合

堺市 奥 時雄
飲兵衛が譲ろうとせぬ一言

大阪市 奥村 五月
路地裏の汚い店に美人ママ

松山市 栗田 忠士
止まり木という人生の安息所

大阪市 江島谷勝弘
もう一本少し間がある終電車

藤井寺市 鈴木いさお
よし明日は試してみようمامシ酒

堺市 加島 由一
親もバカ子も馬鹿酒を飲み過ぎる

弘前市 稲見 則彦
喻えられとても迷惑だと千鳥

鳥取県 細田 裕花
夕立がざあつと通り過ぎて秋

大阪市 藤田 武人
ミゼットが我が物顔の三丁目

京都市 榎本 宏子
婿が婿がと大事な息子呼ばないで

倉吉市 中村 毅
あれもこれも疲れますのであれこれ

長岡京市 山田 葉子
大丈夫すらすらお世辞言えました

岡山市 丹下 凱夫
七十七年いっぱいロスタイムがあった

八尾市 高杉 千歩
真夜中にプロゲ散歩の古い気まま

唐津市 仁部 四郎
お見舞いのお返し趣味は何えず

岡山市 永見 心咲
声だけで大山のぶ代だとわかる

今治市 渡邊伊津志
投げた球君に拾って欲しかった

神戸市 松井 文香
虫の声聴けます今の電子辞書

堺市 内藤 憲彦
パリ旅行大阪弁で押し切った

宝塚市 田中 章子
カバ君のお尻のすきな三歳児

堺市 村上 玄也
レスじゃないレスというから驚いた

海南市 小谷 小雪
露草の紺しぶとさの色だろう

橋本市 石田 隆彦
美辞麗句並べ誇る喉仏

鳥取市 永原 昌鼓
増えるのはシワシミ白髪愚痴の種

東京都 川本真理子
つかかけの範囲で生きる努力する

唐津市 山口 高明
用意した土囊使わずひと安堵

和歌山市 平田 元三
避難無駄それでよかった雨と風

河内長野市 大島ともこ
担ぎ手を公募している村祭り

箕面市 中山 春代
口下手を友が通訳してくれる

河内長野市 坂上 淳司
若い時買ったお墓は坂の上

京都市 櫻崎 篤子
どしゃ降りを抜けて帰って来た二人

神戸市 近藤 勝正
馴染んだと思えばもはやガラケーに

三田市 東内美智子
ボン菓子の轟音聞いて並んだ日

鳥取市 土橋 螢
美しい花 うつくしい仏様

川西市 山口 不動
謝れと軍事パレード見せつける

和歌山市 福井 菜摘
広角のレンズに換えて人許す

豊中市 水野 黒兎
記憶よりふる里の山低かった

鳥取県 石谷美恵子
胃の中で喧嘩しないか薬たち

羽曳野市 中川ひろ介
路地裏にサンマ焼く香や春夫の詩

大阪市 柴本ばつは
父ちゃんが待つてはるから早よ帰ろ

枚方市 伊達 郁夫
災害の記事に固まる鼻めがね

富田林市 中村 恵
誉められて鼻も頭も下げておく

大阪市 井丸 昌紀
サプリメント飲んでも喧嘩勝てません

奈良県 渡辺 富子
二駅だけいら立ち捨てる家出する

三田市 福田 好文
蚊取り線香腰にぶら下げ盆踊り

尼崎市 清水久美子
私から好きと言わせるあかたれ

茨木市 藤井 正雄
学校で習った嫁の五目飯

三田市 尾崎 一子
荒れた地に老人ホームまたひとつ

鳥取市 谷口春子
屁理屈へ心の中でペロを出す

羽曳野市 宇都宮ちづる
二キロ減変化は顔に増えた皺

西宮市 緒方美津子
カラオケは調子はずれる程拍手

高槻市 富田 美義
流れ星どれにも違う事情あり

岩国市 上村 夢香
彼岸花残し周りの草を刈る

枚方市 海老池 洋
下流老人なんかはいない蟻仲間

奈良市 大久保真澄
目標は口の減らないおばあさん

富田林市 小出 修三
鳩が巣を作り庭木が煩がる

三田市 足立つな子
繁昌亭笑わぬ夫笑わせる

鳥取市 池澤 大鯨
せいっぱい生きてるらしい皆多忙

藤井寺市 津田シルク
あつけらん生家いらぬと子等は言う

大阪市 田中ゆみ子
大海は知らないけれど幸せだ

尼崎市 市坪 武臣
幸せです心が曇るヒマがない

大阪府 野田 栄呼
子は巣立ち犬中心の老い二人

河内長野市 藤塚 克三
シャッター街去年のセール貼ったまま

貝塚市 石田ひろ子
踏切の側の地蔵の花絶えず

弘前市 岡本 花匠
家三度建て替え住んだ凡夫婦

富田林市 中井 アキ
掌に握り潰したのは妬心

田辺市 岡本 昇
山と川セット古民家売りに出す

藤井寺市 田付 絹枝
老木に蟬シヤンシヤンと叱咤する

河内長野市 渡邊 修
回転ずし孫がテーブル取り仕切る

和歌山市 松尾 和香
人生の哀しみ軽くするお経

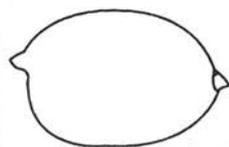
共選欄

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 368名)



「見せ場」三浦強一選

誇らしい職場去る日の胸のバラ
さあいよいよという時にコマーシヤル
テレビには見せ場提供した汚職
見せ場には毎度登場切られ役
花道の睨み拍手が鳴りやまぬ
名場面だけはしっかり立ち見席
名優に見せ場とちった苦い過去
裏方に見せ場はないがいい仕事
花道を六法踏んで終りたい
ベンチ裏素振り百回見せ場来ず
代打の代打やつと日の目見せどころ
九回の裏にドラマが伏せてある
満塁に巡り合わせた四番打者
見せ場なく砂持ち帰る甲子園
終焉の見せ場今から考える

米子市	竹村紀の治
和歌山市	柏原 夕湖
京都市	都倉 求芽
羽曳野市	中川ひろ介
四條畷市	吉岡 修
大阪市	柴本ばつは
富田林市	中井 アキ
豊中市	水野 黒兎
紀の川市	辻内 次根
河内長野市	梶原 弘光
青森市	松山 芳生
和歌山市	福井 菜摘
南あわじ市	萩原 狸月
和歌山市	磯部 義雄
倉吉市	山中 康子

「見せ場」長浜美籠選

アンカーの走りダントツ私の子
体操の見せ場回転金メダル
ベンチ裏素振り百回見せ場来ず
遅刻したウルトラマンに見せ場無し
大根のレシビを百は持っている
体当たり演技世間に認められ
外国の脅威アタック打つ手ない
よく打った球児の見せ場ホームラン
ぞっこんに酔わすアンコールの見せ場
一瞬の見せ場を持っているラムネ
海老蔵の飛び六法はお家芸
舞扇びしりきままた立ち姿
競技場もロゴも見せ場をはずされる
最高の見せ場だったなウエディング
焦点を合わせて選ぶ勝負服

可児市	板山まみ子
松江市	小川 注湖
河内長野市	梶原 弘光
玉野市	片岡 富子
松山市	神野きつこ
三田市	久保田千代
奈良市	阿部 紀子
八尾市	宮崎シマ子
生駒市	飛永ふりこ
茨木市	藤井 正雄
神戸市	細川 花門
富田林市	片岡智恵子
大阪市	古今堂蕉子
堺市	齋藤さくら
防府市	坂本 加代

延命拒否こんな見せ場も近くなる
見せ場のない一生だった花櫃
最高の見せ場葬儀の長い列
日本の見せ場にとんと富士の山
借景に富士座らせる露天風呂
お見合いで貧乏ゆすりしてしまう
花嫁の父を泣かせるナレーション
入刀のケーキ新郎手を添える
自信あるスピーチ出番なく終る
4回転ジャンプに惜しみない拍手
だんじりの屋根の上から見得を切る
感動の見せ場があった救助隊
見せ場などなかった長い事生きて
大阪のここが見せ場と蟹動く
庖丁の見せ場刺身に月が冴え
涙腺を突いて見せ場がやって来る
見せ場では十中八九こけている
焦点を合わせて選ぶ勝負服
女ですここが見せ場と泣き崩れ
涙みな集めてドラマ今佳境
花東が見せ場を作る前市長
ええ格好してもだあれも見ていない
子のために啖呵を切ったのは私

札幌市 小沢 淳
大阪府 米澤 淑子
大阪府 田中ゆみ子
大阪府 初山 隆盛
紀の川市 宇野 幹子
三田市 福田 好文
和歌山市 古久保和子
唐津市 山口 高明
堺市 奥 時雄
箕面市 寺井 柳童
大阪市 大西 晴雄
和歌山市 北原 照枝
豊中市 松尾美智代
藤井寺市 津田シルク
唐津市 仁部 四郎
出雲市 竹治ちかし
岡山県 紫 しめの
防府市 坂本 加代
鳥取市 倉益 一瑤
登別市 小林 碧水
豊中市 源田 啓生
堺市 羽田野洋介
高知市 小川でるみ

運動会しか見せ場ない孫である
四番ゴメスジェット風船舞い上がる
潜り込む小兵力士に湧く拍手
満を持し唄う十八番の安来節
ころ合いだ息びつたりの大向う
来客へ良妻ぶりを見せつける
迫真の演技が鈍る二日酔い
男でもおしゃれをしたい同期会
校長挨拶は学校の見せ場
鬼太郎と砂丘が鳥取の見せ場
料金分見せ場はつくるオットセイ
参観日ここぞとばかり手を挙げる
ここからが見せ場魂乗り移る
痴話喧嘩派手にやったが止めに来ぬ
ハイライトそこで突然コマージュ
デジタルがここぞとばかり画像処理
寡黙だがカラオケだけはシャシャリ出る
テレビには見せ場提供した汚職
迫真の見せ場に鬼気迫る演技
表参道本場よさこい演じ切る
延命拒否こんな見せ場も近くなる
見切り品激うまにする妻の技
五時まではまったく目立たない男

神戸市 松井 文香
堺市 加島 由一
堺市 奥 時雄
広島市 岸本 清
西宮市 福島 弘子
西宮市 福島 政勝
横濱市 菊地 茂
西宮市 足立 茂
西宮市 片山 忠
鳥取市 吉田孔美子
倉吉市 山中 康子
京都市 榎本 宏子
京都市 榎岡 りこ
八尾市 高杉 千歩
米子市 生田 和之
三田市 北野 哲男
弘前市 稲見 則彦
富田林市 山野 寿之
京都市 都倉 求芽
東大阪市 佐々木満作
高知市 小川でるみ
札幌市 小沢 淳
河内長野市 渡邊 修
橿原市 居谷真理子

おっちゃんの法被が冴える秋祭り	堺市	柿花	和夫
見せ場やで居眠りしてる場合ちゃう	桜井市	安土	理恵
来客へ良妻ぶりを見せつける	横浜市	菊地	政勝
色褪せた主婦の見せ場はいい笑顔	吹田市	木下	敏子
万物の見せ場よ命産むシーン	鳥取市	福西	茶子
みどり児の見せ場泣いても笑うても	宝塚市	田中	章子
アンカーの走りダントツ私の子	可見市	板山まみ子	
運動会しか見せ場ない孫である	神戸市	松井	文香
四コーナー命を賭ける鞭の音	枚方市	伊達	郁夫
ゴール前ごぼう抜きして万馬券	三田市	村田	博
ぞっこんに酔わずアンコールの見せ場	生駒市	飛永ふりこ	
さりげなく誘導されている見せ場	八王子市	川名	洋子
雑魚だつてここぞの見せ場模索する	奈良市	米田	恭昌
一瞬の見せ場を持つているラムネ	茨木市	藤井	正雄
玄関の目線に魚拓貼つてある	茨木市	島田	誠一
古民家にここが見せ場の囲炉裏端	大阪府	高木	道子
赤ちゃんの見得をきるよな第一歩	豊中市	池田	純子
雪の絵を墨をうすめて書いている	鳥取市	土橋	螢
大合唱歯車の歌蟻の歌	弘前市	高瀬	霜石
秀句			
九条を守る団結こそ見せ場	香芝市	大内	朝子
見せ場未だボーカーフェイス崩さない	大和郡山市	坊農	柳弘
ここからが見せ場か雪が降ってくる	藤井寺市	太田扶美代	

清宮の活躍甲子園を沸かす	横浜市	川島	良子
見せ場です正念場です答辞読む	唐津市	仁部	四郎
東京五輪とんだ見せ場のあれやこれ	河内長野市	村上	直樹
長雨で見せ場なくした秋桜	加西市	金川	宣子
ここからが見せ場か雪が降ってくる	藤井寺市	太田扶美代	
出棺の嗚咽断ち切るクラクシヨン	香南市	桑名	孝雄
間違つたらアカンからルビ振つておく	大阪市	江島谷勝弘	
雪の絵を墨をうすめて書いている	鳥取市	土橋	螢
茶碗蒸はあちゃん腕の見せ所	雲南市	菅田かつ子	
おっちゃんの法被が冴える秋祭り	堺市	柿花	和夫
見せ場だつた日没前のまっかつか	藤井寺市	鴨谷瑠美子	
まだ捨ててはいないお立ち台の夢	塩竈市	木田比呂朗	
最高の見せ場夕陽が海に落ち	鳥取市	倉益	一瑤
満月の下で彼女へプロポーズ	尼崎市	藤井	宏造
ファイナルの花火に釘づけの瞳	青森県	松山	芳生
馬の足見せ場ないまま黄昏る	東かがわ市	川崎ひかり	
よかつたなあ団十郎のいい睨み	河内長野市	坂上	淳司
途中まで先頭だつた子の走り	弘前市	福士	慕情
バージンロード人生最高の見せ場	和歌山市	玉置	当代
秀句			
ヒマワリもバラも見せ場を知っている	松江市	石橋	芳山
錦織くん勝つて流暢な英語	大阪市	川端	一步
花火師の意地が見事に打ち上がる	藤井寺市	高田美代子	

「近い」

谷 口 義 選

(投句 210名)



近眼に乱視があつて老眼も
近付くほど大きくなつた父の背な
手の届く位置にいつでも居てくれる
目の前の夫の顔がかすみ出す
ワンコイン貯めて近場のバス旅行
間違ひのものは近場で飲んだこと
べっぴんは近くで見ないのがルール
近いのにアベノハルカスまだ行かず
近いけど心の遠い子がひとり
一週間顔見えていない二階の娘
如才なく掃いております両隣
酔っぱらいの足下にあるあの世
近くからスーパが消え家が消え
近づけどなお近づけど賢気楼
戦終えて知つた夫婦の近い位置
トイレからトイレへ走るバスツアー
ネットから覗く身近な世界地図
ご近所は知らん振りして知つている
センセイの顔の利くのは近場だけ
スーパのとなりはずっと住んでいる

可児市 板山まみ子
大阪市 原田すみ子
大洲市 花岡 順子
奈良県 渡辺 富子
和歌山市 福井 菜摘
高槻市 原 洋志
奈良市 大久保真澄
大阪市 江島谷勝弘
唐津市 吉富 節子
堺市 矢倉 五月
藤井寺市 太田扶美代
池田市 上山 堅坊
米子市 成田 雨奇
豊橋市 藤田 千林
出雲市 竹治ちかし
橋本市 石田 隆彦
松山市 神野きつこ
堺市 澤井 敏治
奈良市 米田 恭昌
八尾市 村上ミツ子

すぐ側にいいお手本があつたのに
百均が近くて小物ばかり増え
天国に近いわたしの現在地
一番近い自分信じて生きている
爆買いと衝動買いはいとこです
近くまで来たからなどと寄らないで
同病を持って身近な他人さま
いきなりのハグでぐぐつと近づいた
月へ近づきたくてペランダが好き
そろそろとホーム入居の適齢期
ナナカマド色付き母の忌が近い
遠い人といえ隣十八歳

佳 句

見守り隊老人同士声をかけ
駅からは遠いが畑には近い
近くより遠くを先に見るキリン
わたくしの側で逆立ちするピエロ
お向いが医者で一年中患者

人

とりあえず病氣の話から入る

地

砂かぶりときどき力士落ちてくる

天

近すぎてイチゴになってしまいそう

軸

お医者さんも急に白髪が増えはつた

松原市 森松まつお
八尾市 高杉 千歩
松江市 三島 淞丘
茨木市 藤井 正雄
笠岡市 藤井 智史
豊中市 水野 黒兎
香芝市 大内 朝子
四條畷市 吉岡 修
大阪市 榎本日の出
三田市 堀 正和
弘前市 福士 慕情
榎原市 居谷真理子
大阪市 古今堂蕉子
藤井寺市 鈴木いさお
枚方市 寺川 弘一
青森県 松山 芳生
堺市 奥 時雄
弘前市 高瀬 霜石
大阪市 大西 晴雄
佐賀県 真島久美子

「レシート」

加川 靖 鬼 選

(投句 206名)



レシートに明細書けぬ交際費
 河内長野市 藤塚 克三
 レシートで分かる我が家の暮らし方
 神戸市 富永 恭子
 号泣の議員レシート握り締め
 河内長野市 坂上 淳司
 レシートが倍にふくらぬ夏休み
 河内長野市 木見谷孝代
 レシートがなくても息子信じます
 池田市 奥園 敏治
 レシートの裏にメモする五七五
 河内長野市 黒岩 靖博
 格好よくレシート要らん言うたけど
 奈良県 安福 和夫
 アリバイのためにレシート溜めてます
 三田市 堀 正和
 レシートに7が並んでいい予感
 唐津市 吉富 節子
 居酒屋のレシートばかりよう溜まる
 松原市 森松まつお
 レシートは消えて証拠が残らない
 鳥取県 竹信 照彦
 情報満載のちっぽけなレシート
 羽曳野市 徳山みつこ
 レシートにわが家の無駄を指摘され
 茨木市 藤井 正雄
 家計簿のレシートで見る物価高
 弘前市 福士 慕情
 レシートはアリバイのため貰うだけ
 藤井寺市 鈴木いさお
 保証書にレシート貼って保管する
 池田市 上山 堅坊
 レシートをボーボー捨てた頃が華
 犬山市 関本かつ子
 カード払いレシートちらと見てるだけ
 大阪市 古今堂蕉子
 レシートの長さが語る大所帯
 堺市 奥 時雄
 レシートのあれやこれやに知る暮し
 豊中市 水野 黒兔

思い出にレシートも貼る旅写真
 捨てられたレシート夏の恋終る
 ポケットの底にかくれたレシートよ
 レシートに今日の献立残される
 一人暮らしをレジのレシート知ってる
 レシートの束で膨らむ痩せ財布
 使わぬがレシートしかと手に入れる
 レシートを失くし返品諦める
 断捨離へレシートつけたままのシャツ
 二日酔したレシートに残る悔い
 我が家ではレシートの無い自家野菜
 レシートの裏がわたしの句箋です

住 句

レシートはこまめに溜める自営業
 大阪市 江島谷勝弘
 こんな事もあろうレシート取ってある
 藤井寺市 太田扶美代
 レシート一枚夫婦の仲をわやにする
 三田市 福田 好文
 レシートでよかつたでしようか交際費
 唐津市 仁部 四郎
 レシートがうっかり喋るあの出会い
 今治市 渡邊伊津志

人

バブル期は呉れた白紙の領収書
 三田市 北野 哲男

地

レシートがポトリ秘密が暴かれる
 横浜市 川島 良子

天

レシートが頼り記憶系探し
 弘前市 高瀬 霜石

軸

記録紙の証拠が消えたサーマル紙

箕面市 出口セツ子
 三田市 上田ひとみ
 鳥取市 土橋 螢
 青森県 松山 芳生
 札幌市 小沢 淳
 松江市 三島 淞丘
 鳥取市 池澤 大鯨
 豊中市 松尾美智代
 八尾市 高杉 千歩
 堺市 遠山 唯教
 大阪府 畑中 節子
 堺市 澤井 敏治

「細胞」

長 井 善 純 選

(投句 203名)



優しさに触れると細胞活気づく
 小保方さん今でもアナタ信じたい
 酷暑去り細胞動き出す気配
 脳細胞さほりたがっている欠伸
 好きは好き単細胞と言われても
 恋すると細胞達も踊り出す
 細胞と駆引きつづく闘病記
 単細胞老いて楽しく生きるコッ
 脳細胞シヤキンとさせる大ジョッキ
 喫煙が癌細胞を活気づけ
 短気です単細胞ですみません
 細胞の分裂かさね五十キロ
 単細胞すぐに心が出てしまう
 万歩計つけて細胞増やしてる
 同期生単細胞が生き残る
 細胞の活性計る屋台酒
 細胞のひとつご先祖さまが棲む
 使わないうままで錆びつく脳細胞
 難しい話を避ける単細胞
 単細胞に持たせてならぬ核ボタン

藤井寺市 太田扶美代
 鳥取市 福西 茶子
 京都府 榎本 宏子
 西予市 黒田 茂代
 河内長野市 梶原 弘光
 香芝市 大内 朝子
 堺市 遠山 唯教
 大阪府 榎本 舞夢
 堺市 内藤 憲彦
 米子市 後藤美恵子
 大阪市 江島谷勝弘
 大阪市 藤原千恵子
 高槻市 富田 美義
 大阪市 榎本日の出
 唐津市 坂本 蜂朗
 茨木市 藤井 正雄
 弘前市 高瀬 霜石
 高槻市 富田 保子
 八尾市 高杉 千歩
 三田市 福田 好文

脳細胞猿と比べてみたくなる
 むつかしい話はごめん単細胞
 脳細胞寿命より先壊れずに
 細胞も化学変化を起こす恋
 脳細胞もう分裂を止めたま
 脳細胞増やすぎらざら好奇心
 細胞を奮い立たせた五七五
 脳細胞調子良いのは恋のせい
 酒好きの脳細胞の指示で飲む
 細胞がすぐ取り込んでる脂肪
 DNA親の責任逃げきれず
 細胞の入れ替え夢でないこの世
 佳
 わたくしの細胞子等は美男美女
 細胞が減った分だけ増えた皺
 細胞を扱う科学者のロマン
 色白の細胞だけは欲しかった。
 単細胞嘆くなわてとあんたの子
 人
 細胞の真ん中辺に亡父と亡母
 地
 恋をする度に細胞若返る
 天
 壁の耳全細胞を傾ける
 軸
 脳細胞だけが気になる物忘れ

鳥取市 岸本 孝子
 豊中市 松尾美智代
 大阪市 原田すみ子
 佐賀県 真島久美子
 河内長野市 坂上 淳司
 生駒市 飛永ふりこ
 神戸市 山根 弘子
 河内長野市 松岡 篤
 大阪市 坂 裕之
 貝塚市 吉道あかね
 大阪市 伏見 雅明
 和歌山市 松尾 和香
 岡山県 紫 しめの
 西宮市 足立 茂
 池田市 上山 堅坊
 弘前市 今 愁子
 三田市 上垣キヨミ
 富田林市 山野 寿之
 海南市 堂上 泰女
 和歌山市 武本 碧

初歩教室

題一 大根

山口 光久

誌友の方からご意見を頂き嬉しく思っています。内容は8月号P86、中段23行目の句について、でした。

原 ちらしし貝が多すぎて困ってる

添 ちらしし絵画多すぎ困ってる

「ご意見は、作者は「貝」ではなく「具」と思い違いをされ投句されたのではないか、それなら中七に収まる（単に誤字）。また、添削句の「絵画」は「貝が」の活字変換の誤りか。ちらししは野菜や魚介などの具を酢飯の上に並べた鮓。また、混ぜたものもいいます。作者は貝に貝が多すぎるのを詠まれたものとして理解し、中八と判断、コメントしました。

原 句に、もし誤字があっても、原句はそのまま忠実に、誤字のまま書き表します。それにより添削者は判断しなければなりません。

原 句の書替えや転記ミスは許されません。誤字は「誤字です」とコメントします。

添削句の「絵画」は、パソコンの変換ミスで、私の原稿は「貝が」です。編集部に厳重なチェックをお願いする次第です。

添削

原 すり大根さんまの味を引き取てる 孝 明

「引き取てる」は何をどう間違えられたのでしょうか。多分、「引き立てる」ではないかと思いました。これも誤字の類です。誤字は絶対に駄目です。

添 大根おろしさんまの味を引き立てる

原 高齢者劇団大根なれど感動し ひろ介

「劇団」は冗句です。「感動し」はし止めになります。「し止め」については5月号で述べましたので参考に。

添 高齢者の大根なれど感動す

原 獲りたての大根かけ妻に見せ 義 徳

よく分る句ですが、「妻に見せ」では単なる報告に過ぎません。ああ、そうですかで終わってしまいます。川柳はもとをただせば報告句ですが、そこには、人の心や感情が入っていない必要ありません。

添 獲りたての大根かけ誇らしげ

原 千両に目が眩む大根役者 (今) 廣 子

「千両」を現代風な言葉で。

添 大金に目が眩んだか大根よ

原 道の駅沢庵漬けにめぐりあえ 開 子

「沢庵漬け」は名詞ですから「け」は要りません。漬物を漬ける場合の、動詞としての「つける」の時は「漬ける」となり「け」が要ります。

添 道の駅沢庵漬けがお出迎え

原 かんばちの味じひきたてるけんのはり (田) 廣 子

「味じ」は「味」で「じ」は要りません。

添 かんばちの味引き立てるけんのはり

原 天プラに脇役おろし引きたてる 満 寿 恵

添 てんぶらを大根おろし引きたてる

原 輪切りしておろして千に切られたり ゆ かり

添 輪切りよし大根おろし更によし

原 一球入魂大根のタネ無事発芽 ひとし

「一球入魂」は野球でピッチャーが一球に全身全霊を込めることですが、広く、一つのことに気力を注ぐ時にも使われています。他に言葉を探してみましよう。

添 丹精を込めた大根無事発芽

原 昭和史の大根足だ図太いよ 安 子

添 私の大根足は図太いよ

原 秋冷えに大根素ハダ白さ増し 勝 治

添 秋冷えに大根さらし白さ増し

原 ジャコ入りの御温い飯が欲しい 武 人

添 ジャコ入りのおろし大根旨そうな

原大根は葉も捨てられぬ野菜高 国和

添大根の葉っぱ美味しい野菜高

原大根役者苦勞甲斐して名枝人 ミヨノ

添大根役者苦勞を重ね名演技

原大根を磨いて今や名優に 勝正

添大根が腕を磨いて名演技

原ぶっかけの大根舌にこちよい 忠貞

添大根おろしぶっかけ舌に心地よい

原大根のつまはうまいと言われない 智史

添大根のつまは脇役胸を張る

原頼りになる白くて太い妻の足 福貴子

添優しくて大根足の妻頼り

原さんま焼くおろし大根あればよい

添さんま焼くおろし大根花を添え 風花

原上天気千切大根作ります

添千切りの大根作る上天気 (山)久子

原よろけないぶれない母の大根足 ひろこ

添よろけずぶれず大根足の母達者

原あっさりが良い大根の一夜漬 元三

添大根の一夜漬ならあっさりめ

原大根をたらふく食べてメタボ消え 英男

添大根をたらふく食べて健康美

原大根でこの世の舞台演じ切る 天翔

添大根で人生模様演じ切る

原ブリ大根舌にころがる母の味

添ブリ大根舌に焼きつく母の味

食べ過ぎだ大根足が笑ってる

しつかりと大根足が立つ地球

遺伝子の不思議みーんな大根足

大根も馬鹿にならない野菜高

古稀すぎて大根足が懐しい

可愛いね大根脚の君が好き

丹精こめてきた大根自慢する

すずしろと呼ばれ嬉しい脚線美

私にそっくり鎮座する大根

大根も年季を重ねいぶし銀

二人ならまだまだ遣れる大根時き

窮屈と大根土から首を出す

貝割れがあつてわが家の朝が来る

大根の白さ戦争許さない

泥付きの大根売れる道の駅

大根の白さを妄想せぬ歳に

大根もしつかり磨き初主演

大根が野菜価格のパロメーター

大根の間引き終えたぞさあ太れ

大根が見得を切つてる幕ノ内 大根の白さまぶしい二日酔

(富)恵子

大根も人も煮込んで味が出る

みずみずしい大根わたし負けました

大根の食中毒はないんだね

大根おろしちりめんじゃこと豆御飯

大根煮開んで本音よく喋る

ふうふうと吹いて大根舌づつみ

淡雪のように大根のおろしたて

秋星

(高)道子

由美

保雄

大根役者芸は下手でもいじらしい

大根足ずつと悩んで古稀を過ぐ

元気な葉っぱそれが大根買う目安

沢庵のコリコリ感が心地良い

大根のように心も真っ白に

寧

(高)弥生

(見)温子

忠士

洋子

(山)弘子

亜希子

モモ

美智子

きっこ

凱柳

加代

こずえ

尚世

のり子

泰宏

登子

齋藤 宏子

鍋を囲んで一家団樂の様子が目に浮かん

できます。家族とは斯くありたいものです。

どつしりとした大根足が頼もしい

川名 洋子

太くて丈夫な大根足。どつしりとして頼

もしい限りです。なんと頼り甲斐のある足。

大根の白さに迷いふつ切れる

北原 昭枝

心に迷いのある人は、大根の白さを目に

すると素直に迷いから覚めるでしょう。

【私の句】

餡色のぶり大根に舌づつみ

【少しの修正でよくなる句】

【今月の推せん句】

【佳句】

【私】

【佳句】

川柳塔鑑賞

同人吟 村上直樹

— 10月号から

熱中症怖いぞ怖い電気代

吉田喜代子

今年の夏は記録的だった。どこか変な異常気象である。来年も熱中症がいやそれ以上に電気代やら再稼働やら安売法やら増税やら老いの身には怖い物だらけ。

九条をでんぐり返す多数決

北野哲男

民主主義の要諦は多数決。物議を醸した安売法制をお互いどのように考えるべきか。決心を問われている日本人。孫や曾孫の為にも決して悔いを残してはならないと思ふ。

戦中の話に孫が発芽する

土屋起世子

戦後七十年。殊更に戦争と平和について語り合った方も多い事であろう。発芽したお孫さんの正しく強い成長を祈り、次代を担う若者たちに真実を語り継いでゆく我々の責務を考える。

心機一転まずカーテンを変えてみる

西口いわる

新出発を目指す作者。カーテンも変え、髪形も変えてどうぞ思い切った新天地を目指されよ、空は青く何処までも広い！

待つ長さ過ぎ去る早さ生きる今

雪本珠子

子供の頃の一日はなんと長かったことか。早く来いと心待ちにしたお正月も今ではあつという間に新年。また一つ馬齢を重ねる。

それでも私達は精一杯今日も生きている。

ひこばえのいのち尊き愛しさよ

岡本花匠

ひこばえの力強さ、その生命力には感激そのもの。そして新しい命が芽生え世は生まれ変わっていく。人の世もまた同じ。輪廻転生、生生流転。

少年よその一日を俺にくれ

太田昭

少年の力強さ、限りなき成長力、嘗ては自分そのものであった。あの頃を思い逃げられない老いの身を振り返ってのノスタルジー。悔しさと羨望に溢れながら飽くまでも生き抜く決意。若さへの挑戦。

いつの日か飛び立つ鶴を折っている

大谷篤子

鶴を折る飛び立つ刻が来るように

松山芳生

限りなき生への意欲、若さへの挑戦。この元氣さえあれば大丈夫。例え身は老いたとしても心は青年。鶴が力強く羽ばたいて、願望から必然になることを期待するや切。

幸せが顔に漂う笑い皺

谷久美子

こんな老後を迎えたい。こんな日々を送りたい。今日を精一杯生きて、汗して来たであろう作者の気持ち溢れ出て羨ましくさえ思われる。

人間が戦で造る世界地図

柿花和夫

有史以来、世界に戦火の絶えた日が果たしてあったであろうか。人の業、人の欲が多分これからも、いつ迄も…。

明日咲く花とあしたの話する

古久保 和子

君も思いっきり咲けよ歌えよ…。私も明日は勝負なの。お互い頑張ろうね。明日はきつと晴れるから…。

転んだのは神のなさけの小休止

伊藤 藤玲子

決して老いたものではありません。神様がチョット注意をしてくれただけ。頑張りたいと励ましてくれた。温かい思いやりとやさしい心遣いに感謝。

スロースロークイック力むことなく生きて

杉本 義昭

七〇代で三度目のエイジシユートを目指す義昭さん。必ずや達成されることでしょう。力まずに何処までも前向きに。

鏡には写らない第3の顔

高瀬 霜石

ジキルとハイド。お互い他人には勿論、自分ですら知らない見えな顔。それらを隠して人は生きている。ああ怖い。そして奥深い。限りなく広い。

ほろ酔って父が歌ったねんころり

藤井 寿代

年離れた父が機嫌よく歌った子供の頃や

我が子達が小さかった頃の思い出。それを聴く妻や娘や孫達。ほのほのとした秋の夜の温かさ。元気でね、お父さん。

方程式解けない男対女

宇野 幹子

円周率は数字が読める。男対女の方程式は千変万化。いつ何処で何が飛び出すやら、だからこそ面白い。だからこそ奥深い。杖に柱に、隠し騙され今日も又。

雑念を停止居酒屋一人酒

春木 圭一郎

居酒屋の喧騒：その中で一人酒、何も聞こえず考えず、じつくり楽しむ秋の酒。肴はするめか枝豆か：ああ至福のひと時。「姐さんもう一杯！」

ダイケアー小さな恋のシャボン玉

加島 由一

ダイケアーに通っている友人の老母？最近はおしゃれに気を使い、お肌の手入れも余念がないとか。新しい生き甲斐、今日もいそいそ迎えるの車に乗りこんで…。

傷だらけなのに食べたい恋したい

坂本 蜂朗

年老いて思いも掛けない手術。でも生き

ている、生き抜いてやる。食べる、恋する

…これぞ元気の証拠。若さの証。この元気をさで頑張ろう！白寿はおるか茶寿、皇寿。百元シヨップなら爆買いも可能です

爆買いのお陰で地価まで上昇したとか。

猪川 由美子

その国の火薬庫はいつ爆発か：それに引き換え我が家計の慎ましさ。

いつかまた飲もつと軽い嘘をつく

吉村 久仁雄

嘘も方便。決して悪気ではなくて気軽な挨拶なんですよ。だけど機会があれば飲みたいな。語りたいたいな。お互い仲間。

他人ごととまだ思ってる敬老日

大川 桃花

老人にあやかかって連休を増やした苦肉の策。せめて電話の一本も掛けて来いよ。お年玉弾むのに、でも老人でないからそれは無理か。よし張り切ってデパ地下へ。

里山は小さな秋の絵画展

栃尾 奏子

日本人で佳かった。日本に生れて良かった。自然四季に乾杯。日本に乾杯！

深呼吸ほづら青空見えて来た

今井 万紗子

水煙抄鑑賞

—10月号から

山田葉子

順番の真ん中へんに居る余裕

渡邊 伊津志

兄弟の真ん中、兄チャンが怒られたよう
なへまはしないで育ち、社会へ出てからも
真ん中へんを泳いで、余裕綽綽の作者には、
大らかさが溢れています。

まだ運を使いきってはいないはず

大浦 初音

これまで努力と気遣いと忍耐とで世を
渡って来られた初音さん。これからです。
運命の女神にたつぷり微笑んでいただきま
しょう。

おおよそのこの世の恥はかきつくす

田岡 久幸

子供の頃からやんちゃ。大人になってし
たいことは全部やってきました。恥も沢山
かいたけれど、わが人生に悔なしの作者の
姿が浮かび上がってくるようです。

脇役を生きて世間が見えてくる

岡本 勲

世の中がよく見えるのは、時に脇役もさ
れ、表街道も裏街道も見渡して来られたか
ら。もはや死角はありません。今では妻の
脇役も任されています。

手のかかる夫残して逝けません

河田 洋子

子供のようによく好奇心旺盛、服装に無頓着
なご主人をおもちになって、「私は先に逝
けませんよ」と嘆いておられる奥さんを
知っています。勿論、オノロケでおっしゃっ
てるんでしょうけど。

窓辺には小さな花も忘れずに

上田 ひとみ

見てくれる人もないけど、若い頃と同じ
ように、小さな花でもいいから、窓辺に花
を飾る作者の心意気が、ゆたかに感じられ
ます。

子や孫に逆らうつちはまだ元気

羽田野 洋介

「老いては子に従え」なんて古い。パソ
コンだってスマホだって使いこなしている
作者は、まだまだ子や孫に逆らって、わが
道を行きましょう。

名を呼べば子供の時の顔になる

前田 恵美子

妻になり母となつて「奥さん」「お母さん」
としか呼ばれなくなつて久しい。この歳に
なつても、まだ名前で呼び合える友がいる
のが嬉しい。

今ここで謝るべきか泣くべきか

工藤 千代子

大変、タイヘン、男の尊厳を傷つけてし
まったみたい。そこで女は大急ぎで考える。
ここは謝る演技をするべきか、泣く演技を
するべきか。

物忘れ暑さのせいにしておこう

荒木 郁子

最近、作者も物忘れが多くなったことを
気にしてらっしゃるようです。加齢なのか、
病気なのか。いえいえ、今年は例年になく
特別暑かった。きっとそのせいなのでしょう。
う。

何もかも捨てて出て行く勇氣なし

高岡 弥生

人間が特定の相手と何十年も一緒に生
きていくのは、かなり無理なことである
とか。かと言って、ノラになる勇氣もな
いですね。



食べて川柳パワーを!

私たちの身体は食べたものから出来ています。また生きてゆくエネルギーも体維持もすべて食べ物から得ています。万が一、何らかの事情で食べることができなくなれば、たちまち衰弱して遂には死に至るでしょう。

そのように考えますと、健康で食欲があるということは本当に有り難いことです。また、お金さえ出せば世界中の珍しい食べ物を得られるこの日本も、不満を言えばキリがありませんが、有り難い国だと言えるでしょう。

遠慮なくどんどん進む腹時計

村上ミツ子

和・洋・中まだ迷う胃に感謝する

福島 弘子

有りあわせの膳は日中韓になる

山岡富美子

野垂れ死にだけはせんぞと飯を食う

太田 昭

悩むことあろうか白飯がウマイ

栃尾 奏子

寝て起きて食って元気がよくなった

土橋 螢

空腹は最高の調味料。山海の珍味でも、お腹がいっぱいだったらずい少し旨いと思えません。食事前にお腹が「グー」と鳴るほど減っておればOK! 三度の食事をそのようなベストコンディションで迎えるためには、食欲の秋といえども「腹七分目く八分目」で抑えるように努めたいものです。

洋も中も韓もいいですが連続では飽きてきます。やはり基本となるのは、どのような惣菜にも合い、三百六十五日食べてもまったく飽きることのない米のメシです。おいしく食べてグッスリ眠れば元気になること間違いなし!

焼きギョーザ夏を乗り切る心意気

森下よりこ

たいていは元氣「焼き肉」好きな人

門村 幸子

秋茄子も秋刀魚も食べて翔んでいる

畑 佳余子

肉ジャガを炊いて一人前試食

古今堂薫子

ベーコンエッグ大好物の九十歳

大賀 心月

味噌仕立ての雑煮こつり生きてやる

宮崎シマ子

パワーの出る食材は肉や魚のような動物性蛋白質ですが、それだけでは偏り過ぎで、野菜も摂らなければいけません。その点、挽き肉と野菜がバランスよく入っている餃子は理想的。秋茄子と秋刀魚など「旬」の食材も最高です。

いくら腹ペコでも試食に一人前も平らげるのは食べ過ぎ。高年齢になってもベーコンエッグや味噌雑煮が大好きというのは頼もしい限り。元気に食べて百歳超えを目指しましょう

ラーメンライス妻が戻ってこないの

石橋 芳山

素うどんに玉子を割って妻の留守

吉村 一風

箸置きも面倒くさい独り膳

坂上のり子

佛さんに匂い供えてひとり鍋

高杉 千歩

ひとり鍋ほっこり曇る窓ガラス

楠見 章子

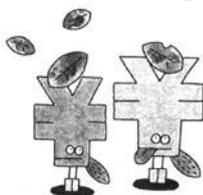
よく食べる寝るすべては一人生きる道

尾崎 一子

料理などしたことがないという男の食事は前2句のようなお粗末さ。明らかに野菜不足です。自販機でも売っている野菜ジュースで補うという手もあります。また、一人暮らしの女性も多くなってきましたが、こちらは男性と違って遅く、箸置きなどは省略しても、「ひとり膳」を楽しんでいます。ともあれ、食事が美味しいというのは最高の幸せ。さまざまな食材から元気を貰って川柳ライフを楽しみましょう。



(投句212名)
今回の図柄から
連想するもの、そ
れはズバリお金で
す。全体の八割り
ほどがお金をイ
メージした句でし
た。



それはそれで現実味があり、けっこう
楽しませて頂きながら、ちよこつと違う
風景も覗き見たりして、深まつてゆく秋
の日は有意義に暮れていったのです。
では、ご一緒に。

堺市 澤井 敏治

間違いがいくつあるのか分かるかな
(評)二つの同じ絵の中のちよつとした
違い、あとで見れば「なーんだ」と思う
ことも見過ごすことありますよね。

枚方市 海老池 洋

哲学の道ぶらぶらと飲む話

(評)飲む話、これぞまさしく哲学では

ありませんか。人生を、人間を極めるた
めに飲むぞ！

大阪市 井丸 昌紀

大きいのが好き日本銀行券
(評)英世よりも一葉、一葉よりも論吉、
この逆の方が好きという人が居ればお顔
を拝見したいものです。

弘前市 今 愁女

表向き幸せ夫婦散歩する
(評)けっこう有るようですよ、こんな
御夫婦。外では一緒、家の中では別居同
然なんて、ちよつと切ないけど。

弘前市 高瀬 霜石

金持ちも貧乏人も肩は凝る
(評)神様が平等でよかったです。金持
ちなのに肩が凝らない、貧乏な上に肩凝
りまで、なんてゼツタイ許せない。

三田市 足立つな子

天高し紅葉狩りから茸狩り
(評)いいですね、秋を満喫している様
子が目に浮かびます。こんなに身軽に動
ける達者さに乾杯。

玉野市 片岡 富子

割り勘と聞いて遠慮を取つ払う
(評)御馳走になると思うと遠慮が先に
立ちますが、割り勘なら好きなものを好
きなだけ、こつちの方がいい。

榎原市 居谷真理子

シャラシャラと尻尾を振って忘れたわ
(評)いかにも女性っぽい句だと思いま

した。しなやかでしたたかたかでも、何
故か憎めない、男性もイチコロ！

堺市 矢倉 五月

狐と狸承知のままで添いとける
(評)どっちもどっちの感あり、夫婦と
しての日常は何となくスリリング。でも、
(添いとける)に脱帽です。

河内長野市 松岡 篤

金なんてどうでもなるさついで来い
(評)なんとという頼もしい御方、女性は
こういうのに弱いんです。でも、出来れ
ばお金があるに越したことないですけど。

三田市 堀 正和

日銀にタヌキが二匹いるらしい
(評)弘前市 浅田 隆樹
宝くじやっぱりただの紙だった
大阪府 米澤 俣子

爆買いの国の人には負けますワ
長野県 丸山 健三

返済がまだまだ続くマイホーム
神戸市 奥澤洋次郎

ときめきの色に染まっている小径
藤井寺市 若松 雅枝

下駄投げて明日の天気占う子
大阪市 田中ゆみ子

石投げて円の強さを確かめる
鳥取市 倉益 一瑤

議事堂の前でひと肌脱ぎますか
唐津市 仁部 四郎

西宮市 足立 茂

旅客機を買う約束のピーナッツ

箕面市 出口セツ子

国民は打ち出の小槌ではないぞ

笠岡市 藤井 智史

底なしのお腹へ秋を食い続け

防府市 坂本 加代

離れたら飛んでゆきそう手をつなぐ

大原市 柴本ばつは

気を付けてマンホールだよ蓋の上

河内長野市 梶原 弘光

五輪迄ワツシヨイみこし担ごうか

八尾市 村上ミツ子

やきいもの匂いにおなか減ってくる

三田市 今西 廣子

諭吉にも尻尾あるとは知らなんだ

和歌山市 北原 昭枝

ああ秋だ枯葉お金にみえてくる

松江市 石橋 芳山

亡国にエデンの園へお引越し

紀の川市 楠原 富香

二人三脚いつまで続く旅路やら

鳥取市 前田 楓花

婆ちゃんの葉っぱビジネス金を生む

大阪府 高木 道子

今日よりは若い日は無し悪しからず

米子市 八木 千代

ビットコイン 尻尾残したまま風に

和歌山市 玉置 当代

宇宙旅行したい今から貯めておく

塩本市 木田比呂朗

年金で過ごしています夫婦窘

豊中市 水野 黒鬼

化け上手ギリシヤへ派遣するタヌキ

米子市 政岡日枝子

風に舞う君もボク等も風来坊

大阪市 江島谷勝弘

マイナンバーややこしいこと言うてはる

神戸市 松井 文香

財宝の埋めてあるのはこのあたり

佐賀市 真島久美子

焼き芋は値上がり大人つて寒い

加西市 金川 宣子

もったいない仕切り直しのエンブレム

高槻市 島田千鶴子

バーゲンも済んで秋風身に染みる

鳥取市 春木圭一郎

円安と円高どっち得だろう

吹田市 木下 敏子

どうしたの尻尾に見える私の目

尼崎市 清水久美子

良友とコントを披露文化の日

弘前市 福士 慕情

兄ちゃんもまだまだ修行足りないね

香芝市 大内 朝子

子狐が手ぶくろ買に行くお札

米子市 生田 和之

円高のバりにマロニエ降りそそぐ

八尾市 山根 妙子

羽根が生え飛ぶ日がきつと来るはずだ

鳥取市 津村 律子

般若経お金次第で声高く

明石市 糀谷 和郎

懐が温くて弾む今日の靴

富田林市 中村 恵

金のなる木だと信じて水を遣る

藤井寺市 鈴木いさお

古都逍遙諭吉一葉二人連れ

羽曳野市 中川ひろ介

白髪にワインカラーが良く似合い

三田市 野口 晶子

こっそりと化けております母の恋

可児市 板山まみ子

ここだって老後は金さ狸山

香南市 桑名 孝雄

秋風が吹いても夫婦しています

横浜市 川島 良子

学校がイヤならおいで忍者村

和歌山市 喜田 准一

あの娘から今夜あたりにある電話

大山市 関本かつ子

あの世までお金は持って行けません

1月号発表 (11月15日締切)



柳箒に2句

初心者にもベテランにも役立つ！

川柳の理論と実践

B 6 判・326頁 税込 1680円 (送料込 2000円)

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家 完司
TEL0858-52-2414 FAX0858-52-2449

句会 燦 燦

九月句会を読む 岩崎 眞里子

地球からしたり落ちてくる血糊

保州

堤防が決壊したり何人も殺害されたり：重く悲しいニュースが続き、増え続けているという難民の映像まで浮かんできた。

九条と演歌愛して70年

なぎさ

居酒屋で世界平和を語り合う

一文

安保法が通ってしまった。大切に守ってきた九条だが、これからは演歌のように、もっと粘り強く守らなければいけないのかも知れない。国会よりも、熱く世界平和を語る居酒屋で！

裏町で人柄を売る小商い

好

行商の母の汗しむ授業料

富子

どんな時でも静かに導いてくれる灯を詠う二作品。時代を繋いでいるのは、健気に生きている人間の温かさであると納得。

生臭い男ごんがり焼いてやる

洋

靴はけば足もしつかり歩き出す

日の出

生臭い男？と考えるより先に、川柳って良いなあと思った。

今後は、カリカリに焼いて靴を履かせてみることにしよう。

家計簿も記憶も滴ほとほと

富美子

すぐしぼむそれでも夢をみてしまおう

見清

滴は生命の源だが、立ち上がる力となる記憶さえ、滴だという。そういえば虹は滴の集合体で、憧れの夢の形でもある。

一言でいいです一言がいいです

眞理子

大胆さ併せ持つてる人気者

信子

声に心を乗せて余韻と哀感を醸し出す一言は、佳句と同じくらいいい。そんな一言を遣いこなす人は、間違いなく人気者。

大胆に行こうこの世は肝試し

完司

思わず頷いてしまいました：拙者臆病者故、仮面装着の上、

後に続きます。よろしくお導き下さい。

冬せつ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

抱きしめてジーンと伝う子の温み 賢子
神さまから地球を借りている人科 洋
借用書催促出来ぬセピア色 美智子
語り部の伝える歴史重すぎる 秀雄
長寿国支えるための薬漬け 祥昭
箸二膳なにも事なく原爆忌 一
メール出来ぬ時代遅れの夫婦です さち子
味方にも敵にも成れる俄か雨 柳弘
さがしてたメモちりじりに洗濯機 茜
女傘借りて小さな波が立つ 麗
抜こうかなその逞しさ水を遣る 尚世
手の甲にメモ書いているナースさん 美江
返すあてあればあなたに借りません 薫
わたくしの不老長寿のとは恋 朝子
大恩を借りたままです母の墓 郁夫

もてもての頃もあつたが古時計 修

忘れぬようメモしたメモは何処やった 弘風

人生の岐路にほしいな信号機 弘委智

謎の国返さないのでまた借りる 高志

人生を圧縮すれば終電車 弘一

君の事俺が守ると楷書体 寿子

借り返し尻尾は振らぬことにする 仁

留守電に愛想笑いも入れておく 高鷺

戦争のむごさを語りつくせない 鈍甲

こじれてるアイロンかけてあげようか 亜成

一期一会心を込めた八十路すぎ ルイ子

竹の子がはずかしそうに頭出し 博泉

タイガースの結果で違う酒の味 栄二

幸せの味は不孝を知ったから 壽峰

遺伝子のおかげ裸眼で針仕事 かずみ

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

苦虫を飼っています腹の底 (矢)五月

苦虫を噛んで見ているニュースです 芳香

不機嫌な顔で一日どないした 美世子

政治屋へ苦虫を噛む閻魔様 克己

苦虫を噛めば天女も魔女になる 朝子

苦虫を友にしていた頑固爺 満知子

苦虫を噛んでも好きな妻の顔 敏晴

身内からボロボロ苦虫の安倍総理 守善

あの人に逢えば苦虫あまくなり シマ子

恐いぐらい美しすぎる妻ケイコ としお

嘘付かぬ男でどこか頼りない 昌紀

嘘で良いほめて下さい占い師 日の出

嘘と知り笑顔の妻の処世術 舞夢

病欠の人が内野席にいる 妙子

年齢を隠し続けて夕化粧 重信

嘘だらけ折れたタバコでわかります 舞蹴

すぐばれる可愛い嘘を少女羽化 ばっは

ストレスを酒に包んで海へホイ いさお

風呂敷で酒を包んで兄卒寿 一歩

母の愛包み込んで縛らない 郁子

何かの足しにしてねと母の紙包み 賢子

三角も四角も風呂敷に包む ゆみ子

義理嫉妬ほどよく包み込む袱紗 美籠

亡母からの包み無言の愛溢れ 福貴子

初孫を真綿で包み育てて 志津子

お願いだ五百万ほど包んでよ 勝弘

人間の脆さを包み込む夕日 柳弘

包まれて見たいと思う胸がある 桃花

希望の花べったり根付いてます 紀子

べったりと演歌の染みた酒が友 宏造

べったりと坐るとスツと立てません まつお

有りのまま生きて情けに支えられ 千歩

川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

腸内が戦っていて生きられる 陽之助

経済も政治もいつも火の匂い
 北の人冷凍庫から出て話そう
 苦戦してやっこ釣ったゴム草履
 戦争を語らず逝つた亡父思う
 戦場の一人一人は平和好き
 鳥取と島根戦う一議席
 戦いにまだ人類は飽きてない
 戦争は嫌だいやだと鳩時計
 半世紀溜めたゴミとの戦です
 戦いは始まつてゐる物忘れ
 熱中症発汗もなくぶつ倒れ
 甲子園接戦続き汗にぎる
 春はキラキラ夏はキラキラ君の海
 キラキラの汗を流して金銀銅
 キラキラは食い物探す時だけだ
 キラキラもどきどきも消え倦怠期
 果てるまで胸熱くして夢を追う
 キラキラキラキラ日本中が燃える
 キラキラと君こそ命アマテラス
 一睡もせず光つてるコンビニよ
 大衆に練られもまれて早や米寿
 恋文を練りあげ書いたラブレター
 中韓の口を鎮める談話練る
 三人が練つた知恵なら敵はなし
 計画を練る間が楽し小旅行
 体温が移るまではと土を練る

幹 啓
 道 子
 重 忠
 耕 治
 重 利
 野 蒜
 芳 光
 節 子
 三 津 子
 龍 枝
 貴 恵
 たけ代
 宣 子
 悦 子
 義 人
 紀 美 恵
 啓 子
 照 彦
 石 花 菜
 紀 の 治
 久 芽 代
 芙 美 子
 清
 滋
 公 恵
 くにこ

一日の終りに明日の策を練る
 練り上げた老後の地図を虫が喰う

竹原川柳会(広島) 古田 太虚報

言ひ放題鍵のかからぬ口喧嘩
 ほろ酔いの暴露ばなしの口に鍵
 十二歳お風呂に鍵をかけたはじめ
 饒舌のお口へ鍵がほしくなる
 見てるのに左右対称書けぬ眉
 空晴れてやっこ鏡に笑顔出る
 元気が朝の鏡に問うてみる
 ちちははといるふるさとの大鏡
 突然の計報鏡の乱反射
 しみじみと生きながらえてみる鏡
 この鏡仮面をつけてから曇る
 昼寝から覚めた金魚のひと泳ぎ
 泳ぐのは下手でもうまい世渡りは
 念仏の力この世を泳いでる
 イワシの群れトツプを泳ぐ君の目よ
 遅れないよう大掻きでついて行く
 離婚から再婚泳ぎうまいなあ
 宇宙ステーション平泳ぎする天の川
 裸んは昭和の海で泳いだ日
 石けんがあるくチビでゆくように
 美容院本音がぼろり聞き上手
 小引出し昭和の小物懐かしい

美ッ千
 完 司
 節 生
 敬 子
 淑 子
 慶 子
 弘 子
 半 徳
 栄 恵
 蘭 幸
 幸 子
 規 代
 寛
 比呂子
 宣 之
 栄 香
 千代美
 昭 紀
 輝 恵
 笑 子
 汎 美
 静 風
 歩 美
 貞 子

柿花和夫選

狭くともぶれぬ歩幅にある矜持
 言い聞かせながら私も泣いている
 品格を高めるために無口です
 水汲みの少女が背負う途上国
 ささやかな祭り毎晩やつてます
 謎解きはコナンに任せ飲みに行く
 悩んでる間はないセミの八日間
 きまゆりゆがをきまいるまねてゐるよ(保育所陽
 寝心地がととも良かった手術台
 ふと過ぎるあの日あの時あの微罪
 ひとし 剛

佳句地十選

(10月号から)

山本 希久子 選

油濃い嫌みにギョツとレモン汁
 お月さまやさしい家族ありがと
 八月の黙禱甲子園は熱い
 塩さけも父の小言も甘くなる
 ひたひたとわたしにまといつく闇夜
 なんだつて自分の死にさまが恐い
 働きの八月天突く百日紅
 核があるだから試してみたくなる
 生き残りヒロシマの日はまだ続く
 一病の縁で出合った夏椿
 奏 子
 たもつ
 一 歩
 澄 子
 あきこ
 賢 子
 理 恵
 健 彦
 ダン吉
 辰 雄

里の風母とゆたゆた昼寝する
梅雨明けだ先ずは何からしようかな
平和祈念色とりどりの金魚舞う
史子

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦

百回の挑戦見事に逆上がり
好きだから真逆の言葉突いて出る
身体の異常が支え生かされる
意地悪を決して言わぬ母子草
七人の敵が私を無視してる
怒っても昼間の月は隠れない
百まではやっとな数えたかくれんぼ
抑えても俺にはわかる妻の角
花好きにいじわるはせぬ薔薇の棘
夕焼けを百葉箱が開きたがる
お姑さん次のイチワル考える
通せんぼ好意を寄せる人だから
太陽に到着来た服を脱がされる
喉元を過ぎて原発再稼働
好きだから捻くれてみる恋心
血圧が一気に上がると袋とじ
安保护法怒りの拳振り上げる
瞬間湯沸し渾名とおり怒り出す
怒り捨て余生を温め合う二人
意地悪を言われて強くなつた僕
祥月の妻にスコールないだろ

厚子
笹舟
史子

高野宿坊解説づきの皿の数
ほつとする言葉一行書き添える
シャガールの馬と仲良くなれて秋
一番を目指してやっとな五、六番
命には色も香りも味も無い
氏加子
五楽庵
和香子
霜石
一花

わかあゆ川柳会(島根) 松本はるみ

雨よ降れ宇宙の芥を流すまで
長い道さまよいつつも二人旅
くもの糸さまよいつつも出す答
ほめられて気分良くして酒すすむ
雨上り虹の向こうに明日を見る
雨しぶく旱の道をなだめつつ
ふところの少し潤う年金日
ふところ手天を仰いだ頃もあり
英子
好榮
恵美子
ハル子
安子
はるみ
かつ子
昌

城北川柳会(大阪) 近藤 正報

百歳が合縁奇縁生かし生き
下着だけおしやれしてますパーバリー
白魚がびちびち跳ねる喉の奥
雑種です放し飼いですうちの人
ほこほこに温めた肌着母に着せ
その内にご縁があると云うアラフォー
歩をうまく使う師匠とめぐり合う
日向ほこ風と遊んでいる孤独
ベルト穴一つ縮めて夏終る
野鶴
勝弘
博
満洲夫
千恵子
麗

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

電気ドリル五欲を削る歯科の椅子
夏は過ぎやがて彼岸が見えてくる
縁あって稼いだここで華と咲く
ままごとに夫婦ゲンカを入れる孫
ほどほどに遊べと妻が無理を言う
あやとりの橋を渡って母に逢う
川柳のご縁人の輪友の渦
夏脱いで恋の始末に蓋をする
今にしてあの日があつて共白髪
びちびちのジーパン飾らぬ若さ
おもろいな一期一会の日日の縁
ふる里と縁は切れない父母の墓地
夕涼み縁台将棋良き時代
感覚が遊びであつた深い罪
身に合つた下着心を弾ませる
身勝手と利己的言うが戦イヤ
へこたれてはならぬ目的果たすまで
びちびちの肢体が男悩ませる
縁側と庭のある家夢の夢
夏祭り済んで金魚は夏休み
いい縁起だけを担いでらんらら
遊びだと言ひ聞かせても炎立つ
初のデモ遊び心の子をつれて
和夫
縣笹
杵香
節子
星雨
直樹
郁夫
賢子
公子
朝子
志華子
武彦
たもつ
美智子
榮子
満作
義昭
高志
弘委智
堅坊
正修
正

何人を救し阿弥陀の絵に溶ける

幹子

何不足無いが若さが欲しいだけ
失敗は何があつても意味がある
何てない話の出来る友がいる
顎引いて額かしげる虚舎那仏
飯の世に見栄など張つて何になる
苦い水何度ものんで今がある
何も無い訳がないでしよそのお顔
何事も本音話せる友がいる
老いたかなおつくりになる何もかも
丸ごとの西瓜を買つて待つ帰省
柚子刻み香り残つた指の先
うつとりと実り甘味を醸し出す
思い切り叩こう西瓜風物詩
直売のみかん笑顔をくれました
みつ豆の最後に残すサクランボ
病室で軽い息しているりんご
ほがらかに暮れてそれからよく眠る
ほがらかに笑える席を持つている
ほがらかな笑顔の底に深い傷
底抜けに陽気な妻といふ疲れ
ほがらかに過ごすシアアのプロگرام
嫁姑笑つてマグマ知らぬ屋根
ほがらかに笑ひ袋を三つ持つ
ほがらかな母が背負つてきた苦労
持つ物を持つて陽気な風に乗る
ほがらかな歌声持つてケアハウス

ひろ子 敏照 美子 寛 碧 昭枝 みね 幸子 弘子 起世子 きく 日出男 美羽 あき子 倅子 次根 当代 絹子 准一 智三 美枝子 宏夫 章子 義雄 菜摘 みつ江

待ち合い室みんなほがらか長寿村
ほがらかに終日過ごす検診後
子の世話にならぬ心身ストレッツ
逆境の時こそ用意する笑顔
いざという時は枕を持つて逃げ
万一に備え脱兎の足鍛え
台風が備え横目に肩すすかし
献血の明日に備えて早寝する

南大阪川柳会 津守 柳伸報

葉サブリごはん葉サブリ酒
朝四コサブリに元氣をもらつてる
焼酎に果実漬ければ皆サブリ
効能はないがしっかりと副作用
この歳でおしめバレぬか心配だ
おどおどと口説かれるのは困ります
寿司提げておどおど帰る午前様
官邸におどおどしない翁長知事
おどおどとする事も無い無一文
おどおどとすまい私の道をゆく
災害を忘れずリュック入れ換える
志摩の海災害事故が無いように
災害時どうして出るか話し合う
人間が宇宙を荒らすから異変
被災地もしっかりかかる消費税
里帰り笑顔どっさり豆台風

よしこ 彦弘 純子 富香 和子 昇 英夫 保州 柳伸報 いさお タカ子 博 実 東風 篤 和雄 国和 更紗 志華子 ルイ子 弘泰 柳右子 一歩 なぎさ

生ビール理屈はいらぬ喉仏
向う意気強いお方に警告知
ご機嫌の悪い理由はタイガース
日本を世界の覇者にしたいアベ
愚痴言える人がいるから強くなる
理由などないけど好きな人は好き
ひどいでは済まぬ事件が続く夏
本年もトラは無理だと言つた人
中一の遺棄涙する残酷さ
ひどい名前だ誰が付けたカイヌフグリ
行つたまま妻戻らないカーニバル
表現はひどいが情のある助言
くれてやる態度で返す貸した金
戦争へ惨状知らぬ人が舵
無視されてその上墓穴掘られる
爺ちゃんはいいつ死ぬのんと円らな目

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

果たし状来た日ひっそり剣を研ぐ
諸行無常などとパチャくる鬼がいる
実をつけて男になった樹になった
五百羅漢出会うオイラのデスマスク
戦争は似合わぬ青い青い空
ほんとうの自分に還るデスマスク
ひっそりとしたロツターの敗け試合
激論も軽くばちやくり輪が和む

武臣 柳伸 直子 勝弘 弘委智 楓 昌紀 忠昭 弘子 たもつ ばっは 集一 久美子 克己 栄子 直樹 洋々 一瑤 無限 茶人 みゆき 三千代 高鷺 凱柳

特効薬晩酌だけは欠かさない
ピカドンの記憶心に置き忘れ
ひっそりと夜な夜な覗く壺がある

地佳平 人間が住むと自然がパチャクられ 一 粹
回春子 (方言「パチャクする」はませ返すの意です)

奥様の手の中にある楽天家
雑草がはびこる家の要介護
百均で幅さかしてあるチャイナ製
脆い品製造国で腑に落ちる
シミ皺ははびこってるが良い笑顔
キミたちはスマホ病だと気付かない
外来種はびこる古都の池まつ赤
大地震ヒトの脆さを見せつける
おばちゃんの手料理が出るランチ店
思い出の手紙の束をラッピング
タマ逝って野良がはびこるマイガーデン
虫の音も涙君が逝ってから
くらし向き筒抜けおとなりの喧嘩

かあちゃんの家出ひっそりメシを炊く
パチャクするな家内の機嫌悪くなる
宴会でパチャクするくせが直せない
パチャクった後で後悔するでない
手鏡はほんとのことを言い過ぎる
原爆忌地球何とか生残り
足許がよろけ田植えてデスマスク
デスマスクかわいイミケにするつもり
いのししがひっそり村で会議する
ひっそりと暮す地球の隅借りて
挨拶もなくライバルが先に逝く
ひっそりとした病院に嗚咽もれ

天翔 川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報
由美子 ポックリと逝きはったのは酒の所為 敏 治
隆浩 間を置けば時が喧嘩の刺をとる 好
清流 カメラの目はびこる悪へ天の網
美恵子 脆い橋わかつていても渡りたい
晴々 散歩道花より草が喋り出す
野蒜 はびこるとクローバーさえ嫌われる
拓庵 地球にはプラスと庭の草叫ぶ
大 両親のけんか子供が点つける
昌鼓 数の力ではびこる政治如何とも
穀 冷えずぎや暖め過ぎやとよく揉める 扶美代
蟹郎 はびこったヒト科に地球鞆め面 愿

清晋 素頼馬 澄空 時雄 憲 光
清也 玄也

サポートは要らぬオシメもわしが履く
生きるって楽しいことだ酒がある
することをして帰る星きめました
原爆忌まだ懲りてない改憲派
戦場で平和を祈るデスマスク
原爆忌二度は来ないと誓いたい
苦勞して貯めた金でも子は楽に
年金でひっそり一人めしを喰う
ひっそりとお札かぞえて微笑んで
全力で生きた証のデスマスク
残像の思いが残るデスマスク

とも湖 デイクアでも喧嘩してきたおばちゃん
ひろ子 夕焼けがきれいだ涙脆くなる
世紀子 散歩道犬の喧嘩で仲違い
ゆみ子 散歩道犬の喧嘩で仲違い
舞 夢 老いました五体すべてが脆くなる
安代 大軒敵見当たらぬライオンだ
健吾 夫留守天井とってランチする
永久 黙りと言う手が妻の挑戦状
五月 喧嘩する体力ないと言うてます
さくら ちよっと好き脆いあなたの泣き上戸
憲彦 閉めきった無人の家が脆くなる
かりん

高知川柳社 小川てるみ報
泳がねば生きて行けない回遊魚 てるみ
エロスから泳ぎ出たのかピカソの技 哲史
恋一途瀬戸内海を泳ぎきる 和広
町工場すき間を泳ぎ生き延びる 陸宏
濁流でも泳げる術を子に教え 三郎
自由に泳ぎいつか大河の主になる 千鳥

茂登子
重忠
秋月
和子

茂登子
重忠
秋月
和子

ぼたる川柳同好会(大阪)水野 黒兔報
本音だと字余りになり一苦勞 信男
議会では安保健法案本音出す 長一
日記帳本音を書いて憂さ晴らし 郁子

恥掻いた方がいいわけがうまくなる

久子

涙の出ない悔しさをもてあます

和代

コンビニが我家の味を奪い取る

五月

丁寧に頼めば背中掻いてくれ

守啓

この老いも平和があつてなればこそ

亜矢

空き家増え寂しい町の猫元氣

芳子

落葉掻く季節待つてる残暑です

桂子

価値観が違う夫婦で古希迎え

恵美代

国民を嘗めたらあかん安保法

正子

コーヒを掻き回しては打ち明けた

美佐子

おだやかに健忘症が迫りくる

節子

朝顔と咲きを争う合歓の花

清乃

父さんが掻けば太めのかつお節

純子

ぼつかりと無心に生きる白い雲

安子

腰かがめ顔覗き込む見舞客

敬子

鷹節掻いてとびきり母の出汁

美智代

政治家に正義の旗をさしあげる

華蓮

定年後妻に敬語を使う日々

風

かき集め故郷を送る野菜便

春代

守るものあつて素足で歩けない

一眸

スマホゲーム孫の目線にかがみ込む

昭好

夏祭り浴衣に団扇かき氷

柳童

腹八分胃も懐も痛まない

嘉子

使わねばすぐ錆びていく老いの脳

みちる

安保法のんきな余生掻き回す

堅坊

夏枯れの財布へチラシどつと来る

美恵子

いつからかがんで通る妻の前

正太郎

世知辛い世に追い打ちかマイナンパー

勝

どつちかが覚えてるから暮らせてる

敦子

捨てられず母の使った古はさみ

やすの

もつと右少し左とじれつたい

黒兎

点滴の背中をさする四季の歌

遊弘

屈むのは次の飛躍を目指すため

勇太郎

直角に曲る台風恨まれる

黒兎

恥知っているので総理にはならぬ

公弘

かがんでる背中て語る我がおやじ

あや乃

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

うらやんで居ては展望拓けない

高明

游子札背中に付けた老い悲し

淳司

少しだけ開放された金使い

陽

筋肉が落ちてわが足骨と皮

蜂朗

迷惑な自称資源のゴミ屋敷

修

美智子妃のかがむ姿の美しさ

泰子

父逝つた歳に入院繰り返す

四郎

審判に刃向い敵がひとり増え

弘光

迷子に並んで離婚に親は両手挙げ

百合

身軽さを買われ毎年移動する

節子

迷つてるママが頼りの育児本

久美子

外で亡き母偲ぶ醤油味

勇一

ママが来る口許孫がさつと拭き

節子

迷いナビ助手席妻とけんか旅

一夫

毎日が祭り忙しい外出着

美千代

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

陽子報

なにくそが利かずエアコンつけに立つ

陽子

秋晴れに我が身の曇り放り投げ

和代

スポーツの後のビールで疲れ飛び

まみ子

行列はなんでも並びゲットする

栄子

無事平穏喜び仰ぐ西雲

克三

子を連れて離婚に親は両手挙げ

美千代

バーガー屋オープン景気嗅ぎに行く

みどり

孫娘好き好きしたら背かれた

悦夫

電線に並んだすずめ作曲家

雅美

仕切られてそれとも良いかと男ども

和之

愛らしく最初の見合い猫かぶり

一彌

末席にいても輝く人がいる

かつ子

老けるから欲はほちほち小出しする

菜美

迷つても迷わなくても妻が決め

篤

末席にいても輝く人がいる

かつ子

川柳塔まつえ吟社(高根)相見 柳歩報

同居するベツト一番賢沢だ
 同居しておはよの声三世代
 屋根裏に魔女が一緒に住んでいる
 同居する妻が親分俺子分
 シェアハウス彼女の素顔見せしもう
 ユダをさす指を鋭利に尖らせる
 正義言うカマキリの尖り頭
 雨だれに尖った石も丸くなり
 もうやめる尖った過去は許すから
 猛暑続きで神経までも尖りぎみ
 宿題をしないと尖るハハの顔
 尖らせた胸元包むオブラート
 面とりをして大根は尖らせぬ
 尖り出した羊に犬も丸くなる
 甦る記憶の中にある微罪
 古日記昭和がどつと甦る
 色褪せた記憶に絵具足してみる
 半焼の記憶楽しさ広げてる
 記憶にはないと英才達と言う
 ひび割れを記憶がないと言っておこ
 B29の音は覚えてる頭巾
 限界の記憶に蓋をする日本
 胸どきどき隣りに座った初デート
 胸どきどきの胸の鼓動が超マツハ

桂子 輝山 青山 芳山 知恵子 ちえこ 柳歩 柳季 久絵 博子 芳恵 浜丘 昌枝 草庵 とも子 堂太 妙子 弘充 寿代 幸湖

フレームを覗き高鳴る腰の線
 落ち着かぬ想いどきどき波が寄せ
 大茜どきどきさせて知らん顔
 パーゲンで求めた服が吊つてある
 ワンチャンス求人票がハグしたが
 後方支援などと言うけど前は敵

長柳会(大阪) 辻村 ヒロ報

抵抗力暑さに負けてひと休み
 抵抗す母に小遣減らされる
 ママの口抵抗してもパパ勝てず
 迫りくる老いにさからいエステする
 夢を持ち抗つてます老の坂
 アモ参加孫の時代にかける夢
 難関校合格すれすれ運まかせ
 過去語る男の皺の深い味
 ちまちまと暮して今も隅が好き
 義母の味競う料理に嫁の意地
 人前で女房が好きと言う男
 理屈こね黙らっしやいと頑固爺
 抵抗も出来ぬ子狙う卑怯者
 迷い箸途端に母の手がビシヤリ
 コスモスの迷路裸足で歩きたい
 迷つたら一寸派手目に老いの智慧
 迷うたび骨惜しむなど亡母の声
 迷つては白紙撤回お家芸

たけし 左余 美智子 千里 熊四郎 哲子 ヒロ 武男 もこ 輝子 ひろこ マサ 靖博 知津子 ふみ 三和子 正博 洋二 幸子 ともこ 和子 けいこ 孝代 光弘

議事堂へ押し寄せて行くプラカード
 半世紀女房の味に浸つてる
 謝るか意地を通すか妻の前
 昏迷の地球みつめる蒼い月
 埋立てはさせぬと珊瑚腕を組む
 迷わずに雑草らしく生きた自負
 花の名を無口な人に教えられ

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

あの人と冷凍保存してほしい
 ぼくのパパ冷凍保存精子です
 育児休暇すつかりママの顔になり
 腕があり技量もあるが仕事なし
 冷凍にしておく僕の影法師
 赤子抱く姿は慈母の姿して
 嫁はんが休暇中ですす出前です
 腕一本で家族を支えてくれた父
 冷凍の品は何だか味落ちる
 来なかつた息子の海老が冷凍庫
 花火の赤戦火の赤の走馬燈
 九条が世界遺産になった夢
 何かへの叫びを見せる桜島
 カチカチの冷凍品で味はよし
 何もかも冷凍してる共稼ぎ
 共働き料理の腕を上げた夫
 一泊も星降る里はうれしいね

光男 ひろ介 シルク 洋一 美代子 ヨシ枝 六点 アヤ子 かつ美 喜久子 美喜 敏 雄太 猿杓 千鶴子 ちづる ダン吉

腕のいい職人だったのが誇り

たくましい腕にひかれる一目惚れ

ポツポツと噴火の支度休火山

五人の子生んで育てた太い腕

夫いつ逝ったか秋の風に聴く

ご飯食べたことを忘れる時がある

腕相撲息子に勝てる歳となり

川柳塔わかやま吟社

川上

大輪報

母の顔知らず六歳夢で逢う

張り裂けそうな想いおさえた日の別れ

泣いて泣いて泣いたら次は笑おうよ

このごろは夢の中でも叱られる

この涙もやがては乾く時が来る

泣いている女にかけける唐辛子

匙加減ひとつ変わらぬ母の味

素材の旨味引き立てている調味料

具沢山味噌汁今日のエネルギー

砂糖塩控えて共に長寿食

胡椒ふるまだリタイヤを許さない

おいしさは母の愛です調味料

輪ゴムまだ飛ばす勇氣は持っている

消しゴムにお礼を言ったことがない

伸び縮みしながら流れ見極める

もやもやが晴れては困る政治論

思い切つて会つてもやもや吹きとばす

さくら

フジ

高鷲

登志子

みつこ

いさお

章司

佐一

寿子

大輪

小雪

日出男

夕胡

准一

千代子

徑子

秀子

富美子

和香

めぐみ

克子

ほのか

紀久子

愿

もやもやと心を閉じる自閉症

言い負けて今夜は眠れそうにない

安保法もやもや乗せて出航か

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

九条のガタガタ平和へのうねり

農日記残暑の中で種を蒔く

敬老へ招かれ老母の薄化粧

花々の残暑ものともせず咲いて

ご迷惑かけない様に仕舞えたら

残暑飛び今や中秋と真ん中

敬老の日金一封を待っている

敬老は当然のことだったのに

敬老に出る足腰はまだ若い

敬老の日だけ主役の席座る

思い切つて飛べよと囁す雀の子

囁かれてゴリラの仕草まねてやる

凌ぎよい残暑に群れる赤とんぼ

気がつけば敬老会の中に居る

ガタガタと集団的自衛権を言う

ガタガタとならないための遺言書

五線譜に囁したてられちようが舞う

酒持つて来いよ妻を囁してから

夫婦間建付け悪くても我慢

ガタガタは言うまい所詮他人ごと

児を囲み泣けよ笑えと囁したて

紀子

英子

弘子

弘子

弘子

孔美子

かおる

富久江

和子

照彦

咲和

鈴

八重

ゆり子

完司

重忠

実満

盛桜

登

美恵子

京

小鹿

満

みさ子

すみれ

虎落笛ガタガタ雪になる報せ

安保法反対囁子渦を巻く

敬老は嘘年金の額を見よ

ガタガタと人の足音風の音

ガタガタのからだ働き過ぎだろう

手拍子を揉んで酒席の酔ったふり

川柳あまがさき(兵庫)大浦

初音報

出迎えの傘が楽しい雨にする

ずけずけのタクトが今日も振れている

羽化出来ず蟻の餌食か油蟬

傷口を熟年夫婦かばい合う

かじられた臍がうずいて眠られぬ

卒寿まで生きたがいまだ未完成

介護ロボいつも笑顔で不満無し

塾通いさせではみたが不合格

ちちんぶい呪文で治る孫の傷

遠ざかる足音ばかり柿熟れる

あかんたれを可愛く思ういやなくせ

仏壇に安産祈るお灯明

きいつけやあなたは口で傷つける

浴衣着て粋な男の盆踊り

虚しさにも負けない様に張る虚勢

秋深し邯鄲の夢今一度

あんなにも可愛かったがいま憎い

ずけずけと言う嫁ですが頼り甲斐

妻子

拓庵

恒

美ツ千

蟹郎

茶子

かずお

よしひさ

修平

柳明

初音

千代子

富夫

正和

千賀子

ヨシエ

洋子

祐康

五月

雪菜

和子

比ろ志

幸香

里江

かすり傷程度ですんだ低い鼻

靖鬼

カメラマン構図選びは詩人の目

和夫

内緒やでワシ好きやねんジャイアンツ

いさお

読み聞かせ母子のとても濃い時間

章子

朝いちの茶柱山が動き出す

美智子

好きやねん人命救助してる人

美世子

核のゴミ捨てるめどなく再稼働

宏造

富士五湖の日没ぼつと一行詩

ふりこ

好きやねん言われてからの不眠症

柳弘

時間だけかけて結論出ぬ会議

茂

ふんわりとモザイクかけている噂

怜依子

愛よりもやっぱりお金好きやねん

紀雄

あなたにはせめてわかつてほしかった

ひとみ

真実を追求すれば虚の世界

隆盛

不器用な男の愛はほんまもん

朝子

幼なじみずけずけ弱み突いてくる

りこ

虚と実の狭間で生きたる認知症

惠美子

温かい貴方のその目好きやねん

美花

傷つかぬようにと回りくどく言う

耕治

夢を追う詩人の部屋に花はない

喜太郎

ストレスがむっと顔だす人と居る

万紗子

二つ三つの傷敷章にして男

美籠

満天の星みな寝かせ陽が昇る

國治

気苦労の祖母はこっそり梅酒のむ

わこ

会う会わぬ傘を回している思案

哲男

身の程を悟る朝日の素っ裸

柳弘

古稀に孫溺愛せずにおれません

福貴子

傷ついた心を癒すセラナーデ

紀乃

暁天の読経に心浄められ

史郎

愛あれば金はいらぬは若い時

和

川柳塔なら

中原比呂志報

秋霖の午後約束が反故になる

理恵

見栄はった後に虚しさ押しよせる

弘子

愛は何処時々不明四十年

かよこ

薄幸の詩人に寄せる片想い

萌子

九条に魔法を掛ける安倍総理

保子

妻が言う無理に愛を試される

堅坊

夫婦げんか虚しさだけが残るあと

賛郎

村山さんを薄めただけの安倍「談話」

紀雄

愛という字はなかなか味がある

芳香

蛇口から今日の命をもらう朝

寿之

裏切りの科白虚ろな耳が聞く

勝弘

ワタクシを愛するなんて目が高い

まつお

朝からの光まよって若返る

將文

僅かでも望みを掛ける保守ハト派

完次

ヘタだけど朝の三時に五七五

美濃

真つ新な朝を迎えているいのち

順啓

飯の世の飯の幸せだなこの世

倫

フナ寿司と蛇とミミスズと孫の世話

勝弘

今日もまた極楽という朝の風呂

日の出

陽は昇る我が人生の一ページ

良一

かたづいた部屋は苦手や風邪をひく

珠生

青春に還る藤村の「初恋」

見清

関白のしっこ漏らした虚ろな目

恭和

夜勤明け深い眠りが心地良い

昌代

淋しげな肩が温い手待っている

柩子

妻に負け詩集一冊旅に出る

恭昌

さすが古都世界一です観光地

功

老いらくの最後の恋にかける僕

優

秋の鹿塔を詩にする奈良暮色

博一

あかつき川柳会(大阪) 山本

司

今日もまた全没食らい虚ろなり

崇明

川柳大阪 山崎

成子

珠生報

昌代報

朝が来るいつかは来ない時が来る

おたか

日本がこよなく好きで四季の彩

一步

ドロイン買いちよつと地獄を見に来ます

廣子

ご破算に願いましたは朝が来る

薫

申カツ10本ドヴォルザークが買つてはる

和代

和代

若者よ魚雷というもの知ってるか
人面魚似の初孫に絶句する

多恵子
久美子

安保より堤防補強急がねば
金持ちのもっと欲しいをサギ見ぬく
息子にはずいぶん資本かけてある
あたたかい味噌汁じゃこにありがとう

和雄
美智子
いさお

ごろごろいる高校野球いい選手
先がないごろごろなんかしとられぬ
血も肉もごろごろ夏に負けている
脳みそがとろけて出そうごろごろと

けいこ
醉芙蓉
宣子
悠子

おととい買つてきのうも買つて今日も買う
出発はヘソクリだった立志伝

紅絵
篤

鰻危慎試しに食べる鯨井
可愛いけどめだかの世界共食いも
岸和田がワサワサしてるはや祭り
だんじりの法被スポーツ店で買う

鮎子
花笑
福貴子
ふさゑ
義泰

鳴石はごろごろ波と乱舞する
偉人伝読んだが偉くなれなんだ
偉いとはとても言えない難壇だ
啄木もじっと手を見た我も見

祐子
完司
次男
瑞子

まっさきに売れる団子へ並んでる
魚河岸のあの鉢巻きが小気味よい

一筒
喜八郎

松茸も食べないままに秋終る
秋夜長しゃべる相手のない一人
秋風にふかれて極楽蜻蛉です
栗御飯隣に秋をお裾分け

智恵子
由紀子
萩江

偉い人もいつか誰かの世話になる
無理をして偉い偉いと言いまくる
偉い顔しない貴方のそこが好き
偉い人中には悪い人もいる

玲子
美知江
茂夫
照彦

み仏が資本僧職恙無し
太陽の恵み知らない深海魚

茶助
壽峰

一生を漕ぐライフワークの魅力
三途の川漕いで渡るか泳ごうか
トライ舟進まずぐるり回るだけ
プランコを漕ぐコツ教えてくれた女

英子
康子
日出子
風露

かしいな頭を撫でてくれた母
頭の隅にいつも年齢こびりつく
堤防は決壊せぬという誤解
奥の手を持つていそうな顔をする

房子
希久子
昌紀
久仁雄

柿の実は歌になるけど栗は無理
モンブランのてっぺんにいる栗きんとん

一文
勝弘

丸クスを買って読んだが三ページ
換気扇今夜秋刀魚と告げている
五臓六腑なんでも買える日もやがて
バンドラの箱だ開けるな安保法

忠昭
秀夫
堅坊
康信

自らを苦しめている石頭
進化の余地ありそう右脳刺激する
頭では分かっているも無理してる
頭低く下げてまああく暮らしてる

光久
たもつ
加お里
美智代

目がじろりそつと箸ひく生けづくり
憎らしいおひとに投げる栗のいが
魚釣るミミズを掘った場所にビル

隆昭
朝子
哲男

七難を乗り越えやつと風海
漕ぎ方がまだ若い手の平のまめ
無いとほしいごろごろあると食べぬ梨
五輪の塔がごろごろしてる古戦場

野蒜
妻子
茶子
雄大

物忘れ頭ころころ音がする
頭脳明晰性格素直健康児

智恵子
みつ子

わたくしの資本鈍感力だろう
マイナンバー皆ロボットにするつもり
資本家の野望侵略考える

敏子
克己

倉吉川柳会(鳥取)
竹信
照彦報

重忠
龍枝

サークル檸檬(大阪)
松尾美智代報

みつ子

頭切れすぎる人には距離を置く 楓 衆

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

悲しみにマイクを向けるニュース記者 茂

外人に席譲られて口籠もり 邦 男

やり回し競うだんじり街が鳴る 靖 夫

株式と五輪費がする乱高下 哲 男

生きてるぞ時時落とす鍋のふた 淑 子

乱暴に吐いた言葉が加速する 洋次郎

言い訳に詰まり暴言吐く破目に てる

泣かされても後追いかける次男坊 光 子

寅さんのようにふらりと旅したい 勝 弘

ふらり来るYOUに親切日本人 利 子

ふらり来て姉を偲びつ吾亦紅 じろう

終章はふらりふらりと花筏 紀 華

幸運はふらりと来てはすぐ消える 盛 夫

別腹に譲るスイーツバイキング わ こ

魂がふらりと降りた無人駅 千 代

誰も譲ろうとしない朝のトイレ 美津子

鈴虫に譲りそびれた蟬の声 章 子

父譲りの有難くない臍曲り 比 志

権力者責任だけは譲り合う 宏 造

きのこ狩り松茸みつけ譲るまい みよし

急がねば坂の向こうに陽が沈む 弘 子

本堂まで石段行こか坂行こか り こ

好き嫌いコロコロ変わる恋心 美 香

舞い込んだ手紙ひとつに眠られぬ ひとみ

対立意見一步譲って踏み込まれ 浩 司

手と足も不自由はない秋日和 美 籠

孫からのくぎ煮お茶うけ酒のあて 秋 果

原点に還ると愁はよく弾む 武 彦

恋の灯をつけたあなたは罪な人 キヨミ

身の丈に合った暮しの心地良さ 一 徳

歳捨ててブランドショップ梯子する 千賀子

世渡りが上手な波にひよいと乗る 武 臣

し残した昨日を捨う今日の風 恭 子

ゆっくりと歩く人生老いの坂 歳 子

お下がりにいろんな心ゆずり受け 伯 備

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

九十回紆余曲折の誕生日 重 忠

酒飲んで歌える今がパラダイス 完 司

土性骨あるならお前立ち上がれ 圭一郎

今更にわたしの灰汁は抜けません 一 瑤

晴れの日も時化の日もあり五十年 天 翔

百の誕生八十八の子が祝う 蟹 郎

趣味をもつ今からだって遅くない 節 子

骨のある言葉ストレス増えてゆく た ぬ

誕生日想い出深い秋の空 菖 子

白骨化してもあなたはあなたなの 幸 安

シケている海は私の戦場か 敏 子

時化のあと必ず風にするケンカ 一 粹

海底で大物時化をじっと待つ 茶 子

時化の日も一徹な父海を恋う 弘 子

明日はあす今の私を磨いどく 雅 女

肉付きが良くて骨身に滲みにくい 美恵子

翠 洋 会(大阪) 佐々木満作報

人間の品格笑っているカラス 富 子

上品に座っています見合い席 良 子

残業も働き蜂としての自負 集 一

お父さんの残業居酒屋を梯子 千 歩

親だから諫める態度凜として 照 子

暮し向きどう変わろうと二人だよ 理 恵

やさしげな姑でいる難しさ 蕉 子

負けそうになるとでつかい声になる 浩 二

毎日が自作自演のノンフィクション 和 夫

子供には演じるよりはは真実を 善 之

水琴窟ほとほと五感研ぎ澄ます 満 作

虎の夢紙吹雪舞う御堂筋 恭 昌

ワンテンボずれた謝罪へ隙間風 桃 花

出来をほめ一輪貰う散歩道 捷 也

乗り物で見知らぬ人とよくしゃべる 紀 子

根性をみがく至難の技である 志 華子

雨のち晴チャンス天から降ってくる 希久子

秋がきて風呂の温度を一度あげ
朝刊が来るので夕刊を畳む
敬子

小魚の意地が小骨が喉ささる
東京五輪不細工なおもてなし
すみ子

ポリウム上げ妻の電話と競い合う
路上ライブ拍手拍手のアンコール
げんえい

赤とんぼ幼い日々がよみがえる
ライバルのジョークの中に棘がある
楓 楽

軽やかにジョークを飛ばし別れよう
纏れてる窮地ジョークに救われる
日の出
舞 夢

京都塔の会 樹本 宏子報

すらすらといかぬ日もありマイペース
僕に似た四角四面の角砂糖
則 彦

甘党に糖尿病と言う垣根
今の子等砂糖漬けされ草食系
保 子

セクシーを笑い飛ばして子だくさん
すらすらと名前が言えぬ大家族
弘 子

砂糖で出来てるデバ地下の半分
隅っこの席に落着く癖がある
堅 坊

セクシーな男は汗の匂いする
落ちつかぬ仮設の友を思いやる
啓 子

柳腰今は腹巻きはり薬
セクシーを維持する度に預金減り
満 子
美津子
円 笑
英 旺

セクシーな声と夏風邪褒められる
地平線すらすら言えたさようなら
今のとこすらすら言える自分の名
宏 子

セクシーを混ぜたら声の色変わる
乗り遅れベンチが落ちつけと誘う
暴飲暴食金も出るけど糖も出る
文 代

糖分を入れ過ぎましたマニフェスト
いつになれば落ちつくのかなうちの人
荒れ模様抱いて落ちつく多数決
見 清

京都弁少し発酵させました
サトウキビ畑がいくさ語り継ぐ
晴れやかな嘘が泳いだクラス会
義 昭

試験前脳に大事なブドウ糖
金平糖こども返りをしてしまふ
エキサイト汗もセクシーポルトさん
洋 之

すらすらと反省文はすぐ書ける
ヘルシーの名で制限をされる糖
益 子

川柳さんだ(兵庫) 田中 章子報

盗み酒真犯人はすぐ割れる
追いつめるホシはお腹のピロリ菌
フェルメールの青を盗んだ秋の空
牛 延

犯人は私を置いて逝った夫
本当の事を言わないガラス越し
豊作の賑い欲しい過疎の村
弘 之

好 文
淑 子
恭 子
幸 香
一 子

芋の蔓豊かな秋よ安保护法
子だくさん豊作でした自分史も
豊穰を祝う御輿が空に舞う
哲 夫

お裾分け今日も明日も明後日も
球界が金の卵で沸きかえる
スイーツを出され数値より食い気
礼 子

スイーツを食べれば止らぬ脳回路
スイーツはみずみずしさよ私もよ
大好物甘い手土産父を釣る
勝 正

味祭り右党左党も丹波黒
あとひと口甘い誘惑ダイエツト
スイーツは遠慮してねと血糖値
喜 久 子

スイーツへ大変身をしたお芋
スイーツの目は客筋も視野に入れ
スイーツへしつかり鳴いた腹の虫
健 二

焦るほど穴が大きくなる悲哀
断捨離が進まない間に歳ひとつ
出て行けと言うたらほんまに行きよった
富 夫

邯鄲の枕がほしい時もある
らくらくの暮しに子猫欲しくなる
前以って知った問題直ぐ解ける
美 智 子

禁煙も禁酒もせずに古希となり
らくらくと家族写真にベットの座
手相にもらくらく暮す烙印が
晶 子

とかげの尻尾切ってトツは生き延びる
順 子
武 彦

順 子
武 彦

最高の幸せ五感生きている
成長の証しと耐える反抗期
見つめれば匂いたくなる彼岸花
GPS付けて爺ちゃん放し飼いで

キヨミ
宣子
野薫
修平

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

孝行をされてつかれる柿日和
地球を描いて孫は平和の字
馴染み客先すはほこりの蒸シタオル
野心だったか真心だったか恋実る
ほっこりと暮らしています第二章
野望あり毎日通うパチンコ屋
親だけが安倍さんに似て間をおかれ
野心秘めて登り続けた女坂
姑をあずかり時計狂いだす
親孝行包み供える彼岸餅
読むほどにはほっこりするみずの詩
日溜まりで私も猫になっている
木洩れ日の道にはほっこり六地藏
サークルのお金預かるああしんど
無駄足をほっこりのぞく昼の月
捨石が庭でほっこり生きている
パソコンに隠れ自己主張の野心
ほっこりの栗ご飯秋と真ん中
重い菓子折野心と書いたお品書き

真理子
時子
肇
比ろ志
ヨシエ
千恵子
武彦
美津子
美佐子
則彦
眞澄
千鶴子
岩玲子
求芽

遠野
正彦
見清
美智代

こころの風邪ハグでほっこり溶けてゆく
名も告げず救ってくれた人の恩
野心家の鼻ピクピクと嗅ぎまわる
孫の目がきらきら光る未知の宙
おかえりと飛び出して来る子の笑顔
ひたむきな野心がいのち染め上げる
元気出るまで喧嘩預けておくつもり
富柳会(大阪) 関 よしみ報

文重
静子
常男
田鶴子
正治
慶子
登子
未知
清
寿峰
高鷲
武人
仁

蕉子
ダン吉
信子
仁

百歳の拳は気力握り締め
足を知ることをさえも知らぬ人
カチカチと今日も努力の万歩計
歟の汗シャワーで流し缶ビール
多数決辛い意見は端しよられる
夏が縮かむソーメンを吸る音
生真面目の一步一步に悔いはない
背負い合う眩しさ太陽が弾む

恵
一文
奏子
寿之
アキ
欣之
よしみ
森子

風露
雄大
幹啓
美ツ千
芳山
宣子
芳光
紀の治
楓花
圭一郎
石花菜
重忠
麦青
石花菜
森子

姑の目ささいな事も逃さない

道 唱

道 雄

秋刀魚焼く大根高く煙和え

白黒をつけずに渡る処世術

私には些細なことだエンブレム

正 雄

洋 一

中国人さま様でんな商売も

したたかなあきんど損して得をとる

本当に当たりクジなど入れてるの

鈴 野

浩 司

手を抜かぬ商売をして蔵を立て

口上手販売員に乗せられる

籤運は貧乏神が握っている

久 子

繁 義

欲しいのは大仏さんの爪の垢

選果場老人パワで動いてる

宝くじ当たるはずです夢に見た

希 楽 良

照 子

煎じてもなかなか出ないその本音

メイド・イン・チャイナの靴でよく転ぶ完司

恒 子

夏 子

大家族煎じ詰めれば二人だけ

もう歳よ遊びなさいと叱られる

武 彦

和 郎

十葉を煮出し私を浄化する

老いの恋愛想だけが遊んでる

盛 夫

保 雄

恋心煎じて愛になる一夜

空想の世界で遊ぶ片思い

文 香

光 久

煩惱を煎じ仏の顔になる

もう歳よ遊びなさいと叱られる

忠 貞

能 子

試食品売れ残りではないのかな

川柳藤井寺(大阪)

弘

清 之

旅先で屋号呼ばれてついまいどっ

利 子

弥 生

試食会盛り上げてますロゼワイン

六甲川柳会(兵庫) 市坪 武臣報

洋次郎

六 点

試食して値段を聞いてやめました

和 宏

絹 枝

美食家もゆっくり手出す初珍味

加寿子

フジ子

試食して笑顔と共にそっと去る

和 宏

大 子

駄菓子屋が今も子どもときめかす

芳 江

大 子

商売は日銭が入る有難さ

正 彦

雅 枝

商売にされてしまったなあ五輪

妙 子

勝 弘

もう少し若けりやなっていたホスト

邦 子

まつお

手数料しっかり取ってゼロ金利

道 子

一 歩

命よりコスト重視の再稼働

武 臣

紀 雄

商売繁盛男の低い腰

順 子

扶 美 代

投句は柳箋にフルネームで2句厳守

ぐち言えず独り芝居で憂さはらす

宇宙へは生野菜より青汁だ

羽根つきは昭和の音でカント鳴り

白寿まで生きる予定の母が居る

ぐち言えず独り芝居で憂さはらす

事務所便り

一月号から掲載の「印象吟」は投句数を危ぶむ声をよそに、最初の百名から二百名を超え、入選は激戦区になりました。選者の多彩な選と達文が功を奏した模様です。

投句は柳箋にフルネームで2句厳守です。奮ってご参加下さい。

(山岡富美子)

柳界展望

★第65回富田林市民文化祭川柳大会は9月20日、富田林すばるホールで開催。参加者98名。本社同人秀句。

中村 恵
静寂が広がる森森と深い

★第87回奈良県川柳大会は9月26日(土)、リーベル王寺にて開催。同人成績。優勝 山野 寿之

人間の川を流れてきた丸味
草笛を吹く望郷の黄金波 他

★第12回美と川柳「観月の夕べ」は9月25日に開催。同人秀句は次の通り。

西川 無限
信念は曲げぬ帆柱凜と立つ

★第67回西日本川柳大会は10月4日、久米南町文

化センターで開催。同人成績。

津山朝日新聞社社長賞

栃尾 奏子

★吹田市民文化祭川柳大会は9月27日、吹田メイシアターで開催。同人の特選は次の通り。

山本希久子

着メロを替えて大人になりました

☆9月28日、朝日新聞朝刊「天声人語」に西出楓

楽相談役の句(太陽と未来 月とは過去語る)が紹介された。

☆鈴木公弘さん(鳥取市・理事)は番傘10月号、リレー放論―鳥取川柳界のあゆみ概観―を執筆。

☆10月6日、朝日新聞朝刊「オビニオン&フォーラム」に岩佐ダン吉さん(参与・岸和田市)の投稿「タマ除けを産めよ殖やせよ」が掲載された。

▽新誌友紹介△

池田市 奥園 敏昭

池田市

紹介者 本本 朱夏
堺市 竹中 準二

神戸市 細川 花門

紹介者 北野 哲男

高知市 山岡 隆宏

紹介者 小川てるみ

紀の川市 山東日出男

紹介者 川上 大輪

▽お詫びして訂正△

▽7月号 P 91 下段15行 目、喫い捨てて貨車押す肩の位置まる。↓位置決まる。

▽8月号 P 86 中段24行目 ちらしげし絵画↓良が

▽10月号 P 71 上段、宇都満智子↓満知子。P 77 上段、平島美智子↓平嶋 P 89 下段22行目、丸山弘一↓孔一。

常任理事会会 P 9月28日(月) ①21回川柳塔まつり及び同人総会最終確認②第4回春の川柳塔まつり誌上大会③新常任理事・新理事(受諾確認)④定例確認事項⑤各部報告事項⑥その他

次回 P 10月26日(月) PM 13時30分

次回 P 10月26日(月) PM 13時30分

次回 P 10月26日(月) PM 13時30分

新同人紹介

野の 口晶子

―哲男・正和推薦

森山文切

―完司・盛桜・孔美子推薦

丹下凱夫

―蘭幸・完司推薦

藤田武人

―完司・森子推薦

10月号 目次下

誤核のない平和を鳩が待っている

高杉 鬼遊

訂正 誤核のない夜明けを鳩が待っている

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔打吹	14日(土) 13時締切 刃・惚ける・華やか	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
川柳ねやがわ	15日(日) 13時締切 寝屋川市民川柳大会 ブランド・騙す・知る・透明・涙・ドクター	寝屋川国松会館 寝屋川市国松町19-2(春日神社前) 京阪「寝屋川」駅・京阪「香里園」駅下車し、バス№22に 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川柳藤井寺	15日(日) 14時締切 馬・困る・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺さくら町2-2-201 高田美代子
豊中もくせい川柳会	16日(月) 13時50分締切 台所用品・ぶつかる ポロポロ・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳さんだ	17日(火) 13時30分締切 肉・ベット・口説く こりこり・自由吟	キッピーモール6階 (JR三田駅前) 「まちづくり協働センター」内のホール 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
岸和田川柳会	21日(土) 12時30分開場 自慢・狙う・がらり・プライド	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0067 岸和田市南町9-17-18 藤井康信
和歌山三幸川柳会	21日(土) 12時30分開場 ゆとり・指・そのうち	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川柳塔みちのく	21日(土) 17時締切 忙しい・うやむや・引力	弘前市桶屋町4-7 「居酒屋とんぼ」 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛
はびきの市川柳会	22日(日) 14時締切 多忙・口・寄る・カプセル	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳ふうもん社	22日(日) 13時30分開場 辞世句・エンディング 憎み抜く	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪川柳会	23日(祝) 10時30分開場 創立50周年記念吟行大会 記念・ピチピチ・坂・雑詠	会場=錦城閣 天満橋大阪キャッスルホテル 3F (10月号 P.41参照) 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔すみよし	28日(土) 14時15分締切 色気・ペン・結ぶ	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
京都の会	30日(月) 10時30分集合 吟行句会 ドレス・はっきり・卵	集合場所=JR嵯峨野線「花園」駅前 場所=花園会館内 京料理「花ごころ」TEL075-467-1666 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 わかやま 吟社	1日(日) 第23回 和歌山県川柳大会のため 休会	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8482 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 乘原道夫
川柳塔 なら	5日(木) 14時締切 惚れる・空・過去	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城北会 川柳	7日(土) 14時締切 歩幅・届く・うやむや 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
倉吉会 川柳	7日(土) 14時締切 ねちねち・嬉しい・連想	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ 吟社	7日(土) 13時45分締切 音・逃げる・熟す・いそいそ	松江市 雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
八尾市民 川柳会	8日(日) 14時締切 目蓋・坊・群れる・雑詠	八尾市渋川町 安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
西宮北口 川柳会	9日(月) 14時締切 意識・折れる・うっかり 自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「プラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
川柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 走る・石・やすやす・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 阪急「武庫之荘」駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼
ほたる 川柳 同好会	10日(火) 13時30分締切 兄弟姉妹・あわてる・古い	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
あかつき 川柳会	13日(金) 14時締切 散る・血・記事・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル 2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳塔 さかい	13日(金) 13時開場 傾く・天気・おかね(折句)	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳大阪	14日(土) 14時締切 誘う・台・油断	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区本通4-11-6 山崎珠生
富柳会	14日(土) 14時10分締切 壁・無駄・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子

編集後記

★礼状は簡略ながら葉書なり

★一〇月三日の塔まつりには沖繩、熊本、柳川、島根、鳥取、静岡、東京、青森

その他、全国から三五七名のご参加を戴いた。会場のあるこちらでは柳人の交流の輪が広がり、川柳の和、パワーを実感して頂いたことだろう。

★直木賞作家・出久根達郎氏に「麻生路郎読本」をお送りした。氏から「すばらしい一冊です」とお手紙を戴いた。氏は一〇年前まで古書店を経営されておられたが、昔、古本屋主人の路郎のエピソードをエッセイに綴られた由。ぜひお読みしたいとお願ひしている。

★出久根氏から古い川柳句集をお贈り戴いた。昭和十五年発行の「塵」(齋藤半七著) 昭和三十七年四月発行・川柳平安五人

集の句集「塔」。昭和二二年発行の「全国川柳推薦句集第二輯」は全国の主だった川柳結社から作品が推薦されている。「誠実と親切、それは我徒の信奉である」と西島〇丸の言や良し。

★昭和二九年一月発行の村田周魚句集「周魚」には、ところどころに周魚の手になると思われる青いインクの書き込みが散見する。また表紙に「不浪人？」と赤いマジックの題字の句集は、文庫本より少し小さいが三〇数頁、全句手書きである。

★「女難の相―大正時代」と扉に認められているが、作者は小林不浪人であるうか。「流連と決めて吹雪の音を聞き」「辻易者女難の相をずばり当て」など、確かな筆跡に作者の心の髣髴を覗いた気がする。

それにしても古書店を畳まれたあとも、これらの書籍をお手元におかれた出久根氏の川柳観を、ぜひ

「川柳の品位」

最近、汚い言葉や品のない言葉を使った川柳をよく見掛けるような気がして、何故か引つ掛かっていました。

先日、短歌の先生のお話の中で、伝統ある短歌では、品位を重んじるとかで、品位の無いような語句は使わないとの事でした。その後、創元社発行の番傘本社

編「川柳・その作り方・味わい方」の本の中で、「川柳を作る際に品格を保つように」と記載されており、やはり川柳においてもそうであるべきなのだ、と確信できてうれしくなってきました。思ったこと、感じたことをそのまま吐き出せば良いとは言いますが、基本的には「品位のない句」は、作句しないようにしたいものです。

(竹治ちかし)

ひお聴きしたくなった。

★西尾葉抄は一〇月号で

終りました。引き続き薫風抄が連載されます。

先生がお亡くなりになっ

て九年余、先生を御存じ

でない方々も多い。作品

は沖積舎から平成一三年

九月に出された「橘高薫

風作品集」から抽出の予

定。どうぞご愛唱くださ

い。

★我が家の隣の露地に今

年もむかこの実がなった。

花まるの真珠くらいの大

きさ二〇粒ほどを湯がいて、

て、深み行く秋をしみじべると、直径が一・二四倍、みと味わった。(朱夏) 明るさも三割増らしい。

〇九月二十七日は、中秋〇元々お月見は、収穫を

の年月。十六夜の満月は、祝う行事で、当初はサト

イモなど畑作物の芋類や豆類を供えていたが、そ

きく見える「スパーブーム」と呼ばれている。月の後、米を使った団子が

の地球への最接近と満月登場、形も月に似せて丸く作つたらしい。

〇お供えの団子をピラミッドの山形に盛るのも

中秋の名月と限らず、一通じると考えられ、団子を

通じて収穫の気持ちを通して収穫の気持ちを

月に伝えたと言われている。

〇今回のスパーブームは、今年最小の満月と比

べると、今年最小の満月と比

べると、今年最小の満月と比

べると、今年最小の満月と比

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(1月号)」

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

檸檬抄投句用紙

「ピンク」(11月15日締切)

1月号発表

長浜 美籠 選 — 共選 — 三浦 強一 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 -	 	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> ○ ○ </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 年 年 </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 月から一年 月から半年 </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 9800円 5000円 </div> <p style="text-align: center;">} 該当の方に○をつけて下さい</p>

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980-4-298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

あなたの川柳ライフに 楽しく作句力がつく 川柳塔を！

生涯を川柳の向上と普及に尽くした麻生路郎は、大正十三年に月刊「川柳雑誌」を発刊いたしました。昭和四十年七月、路郎亡き後は同人制をとり「川柳塔」と改題し、現在に到っています。「川柳塔」を発刊している川柳塔社は、平成二十六年に創立九十年を迎えた歴史ある川柳結社です。

月刊誌「川柳塔」の特徴の一つは、投句できるコーナーがたくさんあることです。誌友（誌代半年以上前納者）が自由に投句できるのは「水煙抄」「愛染帖」「檸檬抄」「一路集」「初歩教室」などがあります。

また、木津川計先生の「川柳讃歌」及び同人による作品鑑賞やエッセーなど、作句の参考と刺激になる「読み物」も充実しています。

川柳に興味を持ってこれから取り組もうと思っておられる皆さん、また、すでに地域句会などに入会しておられる皆さんにとっても、この「川柳塔」は、必ず良きアドバイザーとなつて川柳ライフを実り豊かなものにしてくれるでしょう。

この機会に是非仲間になってください。そして、限りなく深い川柳の道と一緒に歩んで行きましょう。川柳塔社一同、こころよりお待ち致しております。

◎見本誌ご希望の方は川柳塔社事務所あてにお申し込みください。

川柳塔社

個人用

年賀広告 原稿台紙

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁 1/6頁 1/3頁 2/3頁 1/2頁 1頁

(ご希望の大きさを○で囲んでください。)

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

姓・雅号	住所	電話
	〒	()

川柳など掲載希望事項

送付先

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

川柳塔社

作品募集

1月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
 水煙抄 (8句) 川上大輪選
 愛染帖 (3句) 新家完司選
 檸檬抄「ピンク」 (2句) 三浦強一選
 (長浜美籠共選)
 インスペクションナビ(2句) 大西泰世選
 一路集 (3句) 「巡る」海老池洋選
 「手柄」鴨谷瑠美子選
 「アビール」金宣子選
 初歩教室 「記憶」(3句) 山口光久担当

2月号

檸檬抄「成り行き」
 一路集「招く」「要領」
 「工夫」
 初歩教室「道」

本社11月句会

とき 11月6日(金) 13時開場・13時40分締切
 —開場時間、締切時間を変更していません。ご注意ください。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
 おはなし「川柳こぼれ話」
 兼題「手品」
 席題「煙」
 「じわり」
 「安い」
 「光線」

会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

小島蘭幸選
 川上大輪選
 立藏子選
 田中章子選
 栃尾奏子選
 山崎武彦選
 米田恭昌氏

本社12月句会

7日(月) 午後1時から
 兼題「胴」「かすか」「メッキ」
 「楽器」「照明」

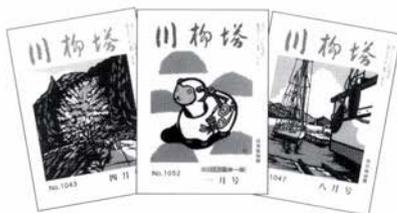
第34年度 夜市川柳募集

第6回「壊す」山本希久子選
 ハガキに3句 11月20日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
 TEL (06) 6372-1178
 FAX (06) 6372-1196
 E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円(送料86円)
 半年分 五千円(送料共)
 一年分 九千八百円(同)

二〇一五年(平成二十七年)十一月一日発行

発行人 小島和幸
 編集人 木本朱夏
 印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
 花野ビル201号室
 発行所 川柳塔社
 電話(06)六七七九三三四九番
 振替〇〇九八〇一四一五八四七九番

川柳塔のホームページアドレス

<http://www.senryutou.com/>

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しつかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真つすぐな
想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと
無く引き出した、オニザキの
自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>